



山  
女  
の  
心

第47号

平成28年11月

関東氷上郷友会

# 三協運輸 株式会社

本店住所 埼玉県桶川市坂田字向990-1

創立30周年を迎え、お陰様でつつがなく発展しております。

東海道を中心に大型トラック約200輛

最新鋭設備を備えた物流センター及び倉庫約12,000坪  
を軸に毎日フル稼働の体制で活動して参ります。

[安全・安心・朗らかに]を旗印にご期待に応じて参ります。



本店 新社屋(敷地面積4,000坪、建物面積2,000坪) 平成23年10月1日完成



関東発一関西行の風景

出発直前の大型トラック部隊

毎日200台の車輛群が東海道を  
中心に走っております。

[主要取引先] 順不同

三井化学(株) 味の素(株) ダイキン工業(株) アサヒビール(株) 三菱商事(株)  
キリンビール(株) 沖電気工業(株) 古河電工(株) ハウス食品(株) 帝人(株)  
新神戸電機(株) (株)東芝 キュービー(株) (株)ブリヂストン 江崎グリコ(株)

# 三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本 勲(氷上町出身)

本 店 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (728) 9380  
E-mail : sankyounyu\_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (729) 0466

大阪支店 大阪府大東市新田中町3-3 TEL. 072 (806) 2821

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪



# 山 ぎょろ

第47号

丹波みち一五夜お月さん一人旅

隆男

山ざぐる 第47号 目次

〈表紙〉笹倉鉄平画「水の奥の世界」／〈扉〉俳句Ⅱ渡邊隆男／写真Ⅱ徳田八郎衛

生まれ替われば……坂上勝朗 5

平成27年度「ふるさとの会」開催……6／井本蝶山氏 和と洋のユニット演奏会……8

平成27年度「ふるさとの会」出席者……10／会計報告書……11

懇親会スナップ……12／祝寿の方々ご紹介……17

《ふるさと随想》

丹波人の遺伝子、人類学は面白い……小森 敏 24

私の青春時代……正呂地 悟 27

丹波の原風景と当時のこと……廣瀬佳智 30

縁故疎開……徳義通夫 33

細見綾子さんのこと その二……藤田玲子 34

上久下小学校卒業記念カレンダー……原谷洋美 37

《近況・エッセイ》

日本百名山に挑戦中……廣瀬正和 39

「ツバメのお宿」が縁で野鳥の不思議に感動……鈴木智丈 42

東西ドイツ統一から二十五年―新たな試練へ……石橋順子 44

ささやかな癒しと感動……谷口 捷 47

謡、長生きしてポックリ死ぬる……細見次郎 49

人生を変えた帰省の日……荻野哲男 51

丸川健三郎と丹波……丸川桂子 53

介護保険制度……山岸幸子 55

丹波ハピネスツアーを開催して……石塚富貴 57

氷上から兵庫県へ輪を広げよう！……太田颯衣 61

《私の職場》氷上の次の世代……岸本卓也 64



《インタビュコーナー》谷垣邦夫さん 郵政改革の影の立役者……編集部 67  
《達人お宅訪問》可部美智子さん 正覚を得る土との対話……藤原ひさ子 72  
《丹波から》

笹倉鉄平の画に魅せられて……赤井俊子 92  
丹波に伝わるむかしばなしを語る……蘆田ひとみ 95  
丹波に暮らす……本間 速 97  
丹波の山と農地について……竹村公作 101  
「丹波と能」……上田 脩 105

《丹波のまつり》

春日町のまつり……高見勘逸 108  
阿陀岡神社……藤田警司 112  
阿陀岡神社祭礼の思い出……浮田信子 115  
兵主神社の秋祭り……河上仁之 116  
兵主神社のおまつり……鏑木 榮 117  
黒井地域のまつり諸々……片山公造 118  
国領のまつり今昔……葦原孝義 122  
「まつり」について思うこと……吉住春代 124  
熊野神社の村祭……富田貞子 126  
舟城神社と祇園祭……村山義人 127

《丹波人物記》

井上 秀 女子高等教育の先駆者  
—母から聞いた秀のこと— その1……徳田八郎衛 130  
《丹波ブランド紹介》

《その6・丹波乳業》酪農家が守った「丹波」ブランド……足立智和 136  
《丹波通信》FM放送局「805たんば」……荻野祐一 140

《MYギャラリー》可部美智子/鶴田ゆき子/吉田素子……75

《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇・川柳座……79

《丹波を撮る》……徳田八郎衛 86

ふるさとトピックス（丹波新聞から）……144

BOOKS……145 同窓会だより……148

インフォメーション……150 寄付者芳名……153

《協賛広告》……154 編集後記……168

黒井音頭

丹波なほえーへえ せんげへや

へイヤ ドウジヤイヤへ

丹波黒井の赤井公

へソウジャロナ サツサへ

幼い時分の武勇伝

へソラ ヤットコ サツサへ

ヨイトコサ

これから少々物語る

のほ ははんか へんへんよ

へホラ ヨイジヤナイカへ

ミナオドレへ

時になほえーへえ せんげへや

へイヤ ドウジヤイヤへ

時に黒井の城主なる

へソウジャロナ サツサへ

公の叔父なる伊予守

へソラ ヤットコ サツサへ

ヨイトコサ

未たのもしき少年と

のほ ははんか へんへんよ

へホラ ヨイジヤナイカへ

ミナオドレへ

(以下略)

(春日おどり保存会提供)

# 生まれ替われば

会長 坂上勝朗



わたくしにとつての年一回の帰郷は、中学校の同級会出席のためのものなのですが、同時に、旧氷上郡内の懐かしい思い出の場所や、新しくできた施設などを見物させてもらうことも、楽しみの一つでもあります。案内役を買って出てくださいるのは、巻内の一才上の幼馴染。

今年の帰省時には、わたくしの家（いまは跡形もありません）の裏手にある、安全山（標高五三七・四米）という山に登って来ました。この山頂には、数本の電波塔が建てられていて、各種電波の中継地点でもあります。三等三角点の標識も打ちこまれています。それより、この山は「安全」という名前が示すところから、阪神・淡路大震災以来、全国産業安全祈願所として、

広く知られています。山頂の真ん中に、上記の文言を刻んだ立派な自然石の石碑が建てられていて、有名な企業の祈願札も何枚か奉納されていました。

かつてこの山一帯は松茸の宝庫で、時期になると、一般の人は一切入山が禁止され、入札で採取権を得た人だけに取ることが許されていました。また、山麓をとりまく村村の入会山としても、人々の暮らしと密接につながっており、燃料としての薪材や柴、堆肥のための落ち葉や草をもたらし続けていました。時には境界線をめぐって近接部落同志のいさかきもあつたようですが……。

山頂からの眺めは、六十数年前の記憶にたがわず、美しいの一言につきましましたが、少年時代に柴や草を刈った山は面影もなく、緑豊かと思えたのは原生林化して苔の生えた倒木が夥しく累なっている暗い森だったのです。

再び丹波に生まれることを許されるなら、今度こそここに根をおろし、この美しい山川を守る役に立たなくてはと、下山の道々不遜にも思いを巡らせたことでした。





## 平成27年度「ふるさとの会」開催

平成27年度の「ふるさとの会」は11月28日（土）11時より、昨年に引き続き東京都千代田区の学士会館で行われました。

総会に先立つセミナー、今年は「尺八の楽しい世界、たてよこなめを楽しみましょう」と題して、国際尺八フェスティバル世界大会で優勝された「井本蝶山さんとその仲間たち」のすばらしい尺八と篠笛・ピアノのアンサンブル演奏を聞かせていただきました。今まで民謡演奏をテレビで聞く程度より無かった中、井本さんの技術によるものですが邦楽音階だけでなく自由に洋楽音階の演奏が可能な尺八を間近に見、聞かせて頂き大興奮のうちに楽しい演奏会を堪能できました。（8頁参照）

総会では坂上勝朗会長の挨拶と報告、引き続き、谷口副会長（会計担当）よりの会計報告、監査報告があり、拍手で全ての議案を了承頂きました。

その後、満80才を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた22名の皆さんのうち参加頂いた足立謙悟さん、浮田信子さん、金出一郎さん、河本幸子さん、葉山勝さん、丸川有次郎さんに坂上会長より祝辞と記念に似顔絵を贈り

ました。何時もながら皆さんお若くとも年齢を感じさせない見事な容姿とお話に感心するばかりでした。(なお今年も似顔絵の制作は、ふるさとひょうご「道草」句会の宗匠住田道人氏にお願いしました。)

懇親会は岸本副会長の司会で開会、笹倉強さんの乾杯で楽しい宴会がスタート、御来賓のご挨拶では、柏陵同窓会の竹内会長、柏原高校の大西校長、兵庫県東京事務所の古川所長、東京兵庫県人会の太田幹事長、

丹波市より辻丹波市長・石川兵庫県

会議長のメッセー

ジを頂きました。

又丹波新聞社小田

会長より丹波市近

況報告も詳細にい

いただきました。

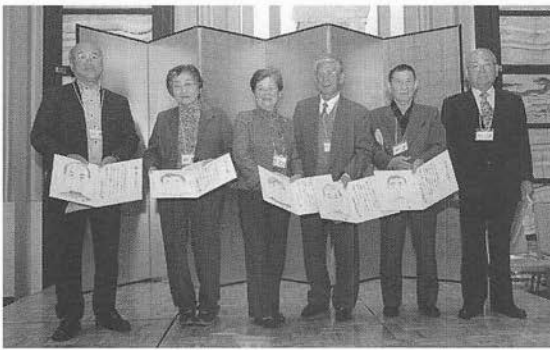
講師の井本さん、

正田さん、尾花さ

んにも最後までお

付き合い頂き、演

奏に感激した会員



祝寿の似顔絵を手に。左から足立さん・浮田さん・河本さん・丸川さん・葉山さん・金出さん。



がその周囲を取り巻き色々質問を交えての歓談も楽しいひと時でした。

何時もながらあつという間に予定時間が終わってしまふという楽しいひとときを過ごし、恒例のお楽しみ抽選会は参加者全員にチャンスがあり、空くじ無しで「丹波の山芋」、「丹波黒豆」、

「丹波産古代米赤米」、「丹波乳業のヨーグルト」などがそれぞれ全員に渡るように、準備されており何かのお土産を頂いて帰ることが出来ました。総会の締めくくりは郷友会のコーラスグループ「どんぐり会」の発表会。昨年同様メンバー以外の同好者も飛び入り参加、笹倉強先生の指揮で『学生時代』他全員で楽しめる輪舞曲を披露、その後参加者全員で「故郷」の大合唱になり大いに盛り上がりを見せました。

和やかな会も来年又元気に会えることをお約束し閉会となりました。

(岡 吉明)

# 井本蝶山氏 和と洋のユニット演奏会

— 伝統和楽器「尺八」の新しい世界

“たてよここななめ” を楽しみましよう！

## プログラム

即興演奏 春の海 甲乙 赤とんぼ・朧月夜

荒城の月 旅愁 satoyama

邦楽器のためのインプロヴィゼーション

## プロフィール



井本早紀さん。

市島町出身。四

歳時生田流箏曲

を始め、十歳時

都山流尺八を永

廣孝山師に師

事。中学まで丹波。東京藝術大学附属音楽高校、同大

学邦楽科都山流尺八専攻14年卒業。現在、同大大学院

音楽研究科修士課程に在籍中。十二歳と十五歳で准師

範、同師範試験に史上最年少で登第。07年東京邦楽コ

ンクール奨励賞受賞。08年国際尺八フェスティバル尺

八世界大会優勝。09年全国高校生邦楽コンクール優勝。

ドイツなど世界各地で演奏活動。大学卒業時に同声会

賞受賞。皇居桃華楽堂にて御前演奏を務める。伝統芸

能国際交流協会会員。日本・ウラジオストク協会ガル

モニア会員。南禅寺独秀流南禅教会音曲担当。菖友会

やEYE音楽教室で尺八講師。国内外問わず演奏活動

の他、学校公演やワークショップ、尺八教室など指導

者として活動中。

〈ユニット奏者〉

篠 笛 正田温子さん

（東京芸大大学院修士課程在学中。様々な賞受賞。活動中）

ピアノ・編曲 尾花明音さん

（東京芸大音楽学部作曲科在学中・学内外にて活動中）





和楽器の新時代といわれ笙の東儀秀樹、津軽三味線の吉田兄弟・上妻宏光さん達が国内外で人気を博し邦楽ファンも増加して久しい中、尺八は民謡の伴奏、時代劇のBGM、虚無僧が吹くもの、お父さんの趣味、奏者はおじさんなどの地味な楽器のイメージも、尺八界のエース貴公子藤原道山さんが登場してからは、尺八のスマートさが注目される昨今、まさか、このようなうら若き女性尺八奏者がおられるなんて、それも高度な技術を身に着け、様々な尺八会の賞を総なめし、その輝かしさで国内外大活躍中の、それがまた丹波出身者だったとは、驚きと嬉しさで大感激。

蝶山さんの尺八は流石の音色。高音から低音までの見事なテクニクで穏やかに優雅に、しつとりと、一尺八寸と一尺六寸の竹管の、前四つ後一つ

の穴から、それは、それは見事に軽く吹かれるのです。そして、心の奥底まで届く正田さんの篠笛の綺麗な音色、尾花さんの見事なピアノの伴奏、三人の三つの楽器で「たてよこななめ」のユニット。静寂な霧の中を浮遊するかのような余情ある未知の世界に誘われました。

邦楽と懐かしい唱歌の数々、正に和と洋のユニットは伝統芸術の古めかしさから抜け出し、誰もが親しめる嬉しい心癒される音楽に変化していました。若い方の斬新な発想に感心。心温まる新しいサウンドに聴き惚れた一時間弱でした。

最後に、犬童球溪（音大前身の卒業生）が教鞭を取っていた柏原中学校において、生徒に排斥運動を起こされ、その時の思いを歌詞にしたといわれている旅愁（アメリカ歌曲ジョン・P・オードウェイ作曲、明治40年日本風に翻訳）を、ユニットで粋な伴奏に合わせて参加者全員で歌いました。心地よい音色の伴奏に、球溪の心情を思いながら、また丹波の懐かしさに思いを馳せながら、思わずホロリ。そして、心地良い残響に酔いしれたのでした。素敵な演奏をありがとうございました。

蝶山さん始め正田さん、尾花さんの益々のご活躍を応援しています。（岡田昌子）

（蝶山さんのHPでは今年の3月に大学院ご卒業とのこと。おめでとございました）

◎平成二十七年度「ふるさとの会」出席者

(順不同・敬称略)

来賓

竹内牧人 柏陵同窓会会長

大西伸弘 柏原高校校長

小田晋作 丹波新聞社会長

古川直行 兵庫県東京事務所長

太田颯衣 東京兵庫県人会・幹事長

講師

井本蝶山(尺八) 正田温子(篠笛)

尾花明音(ピアノ)

祝寿 昭和10年生まれ(1935年)

足立謙悟 浮田信子 金出一郎

河本幸子 葉山勝 丸川宥次郎

会員

青垣町 足立悦雄 田村政子 田村公平

山南町 石塚富貴 池田忍 大野義昭

形田恒夫 久保良雄 勢川武彦

中居篤子 原谷洋美 藤原ひさ子

若森敏郎

市島町 荒木司郎 荒木輝雄 石橋順子

高見秀史 藤田純 丸川宥次郎

丸川寛子 丸川由里子 山本喜則

吉見弘文

春日町 浮田信子 金出一郎 木呂子惠美子

久下善生 原利充 前田武彦

前田三保子 松田けい子

西脇市 笹倉強

柏原町 池田和子 大野善三 岡吉明 岡洋子

岡田昌子 北村貞子 蠅田桂子

河本幸子 瀬々妙子 出町京子

徳田八郎衛 葉山勝 三觜洋子

吉田素子

氷上町 足立謙悟 足立義雄 井上巖 上高子

上田道代 上野忠明 大坪眞子 岸本勲

岸本敏子 坂上勝朗 杉岡明美 谷口捷

谷口浩章 本城英明 八木信行

# 会 計 報 告 書

(平成 27 年 7 月 1 日～平成 28 年 6 月 30 日)

関東氷上郷友会  
 会計理事・谷口 浩章  
 原谷 洋美

(単位：円)



収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,610,267	郵便貯金 810,267	出 版 費	859,531	『山ざる』46号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	142,035	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	683,635	総会関係支払
年 会 費	472,050	延251名	会 議 費	165,128	役員会等
総 会 費	536,000	67名	支 払 手 数 料	390	振替手数料
会 議 費	145,500	45名	消 耗 ・ 備 品 費	91,432	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	360,300	延83名	繰 越 金	1,721,776	郵便貯金 921,776
広 告 料	455,000	延41名			定額貯金 800,000
冊 子 代	84,716				振替貯金 0
そ の 他	94	利子			
合 計	3,663,927		合 計	3,663,927	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成28年 7月 28日

会計監査

中居 篤子   
 谷 敬三 



# 懇親会 スナック

撮影：岡 吉明











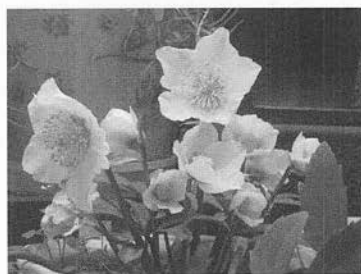


## 祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で80歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当られる22名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、12名（2名は掲載希望されず）の方から回答頂きましたのでご紹介します。（誕生日順）

- ①生年月日
- ②ご出身地
- ③上京の年月日
- ④上京の動機
- ⑤これまでに最も印象に残ることは
- ⑥祝寿を迎えられてひと言

生まれた年Ⅱ昭和11年・丙子・1936年 二・二六事件が勃発した年であったが、一方では、日本で初めてのプロ野球の試合が行われ、映画「うちの女房にや髭がある」が公開され、主題歌「うちの女房にや髭がある」



撮影・岡田昌子

「あゝそれなのに」が大ヒット、ベルリンオリンピックでは「前畑ガンバレ！」で日本中が沸いた年でもありました。

- ①昭和11年1月2日
- ②市島町梶原（旧吉見村梶原）
- ③昭和47年3月
- ④夫の職場の異動に伴い、静岡県藤枝市より一家（夫婦と子供二人）で上京。
- ⑤住まいのある7階建マンションの屋上から眺める富士山の殊に正月三ヶ日の冬晴れの中、秩父連山から南に富士山、その先に箱根連山が連なる風景は素晴らしい。青空の中に白雪を頂いた富士山はいつ見ても清々しく晴れやかな気分になれる。
- ⑥80年、その時々で懸命に生きたいと思う。今も尚、最期のときまで自立して生きる為に努

鶴田 ゆき子様

## 祝寿の方々ご紹介

力中。

### 高見 秀史様

- ① 昭和11年1月30日
- ② 市島町（旧吉見村上田）
- ③ 昭和33年4月（但し、研修期間の2か月後に大阪赴任）
- ④ 勤務先のニッポン放送で関西支社から本社への転勤命令で
- ⑤ 僧家の長男の為、世襲の運命（さだめ）で10歳で得度。大  
学一年夏、己の在り方について兼ねての疑念が拭えず、熟慮の結果、後を継がない事を伝えた時の父との決別。勘当同然の身となりました。寺を受け継いでくれた弟夫婦に感謝しつつも、自らはマスコミとその関連の世界で意を通

し、この年を迎えましたが、亡き両親への親不孝と檀家など、故郷への忸怩たる想い拭えません。

⑥ 平均寿命男性80・8歳。今、正にその時。とはいえ、今少し長らえるため、何を差し置いても、先ず健康維持。故郷への恩返しには、道遠いもの、せめて、高齢化した身近な住まいのコミュニティが元氣であるよう、一隅でさやかに役立つことが出来ればと努めています。

### 荻野 哲男様

- ① 昭和11年3月2日
- ② 柏原町田路
- ③ 昭和二十九年四月三日上京

④ ……

⑤ 日本航空御巢鷹山事故

⑥ 八十年を生きる事は短い様でやはり長くいろいろな事があつた様に思います。私が上京して来た昭和二十九年ごろは日本も世界も平和だった様に思います。が昨今では日本も他国の戦争に参加出来る法案も通り、世界のあちらこちらで小ざり合が見られます。同じ地球上に住む話が出来人間がどうして仲良く平和に暮らせないものか？と思つています。もつとく、安心して助け合う社会になる様に願いたいです。



## 祝寿の方々ご紹介

### 足立 明子様

- ① 昭和11年3月4日
- ② 氷上町伊佐口(旧幸世村方町)
- ③ 昭和34年5月
- ④ 結婚のため。住宅資材会社の長男に嫁ぐ。
- ⑤ 天皇后陛下結婚50年宮中茶会にご招待を受け謁見させて頂いた。共に50年の歩みの私共は身の引き締まる思いで感謝いたしました。
- ⑥ 今年3月80歳を迎え大家族から今一人暮らしに成る迄57年間曲り角だらけの人生ではありましたが、楽しく元気で充実した暮しが出来ます事、まわりの全てに有難く感謝に尽きます。

### 高尾 久子様

- ① 昭和11年3月8日
- ② 柏原町
- ③ 昭和35年10月15日
- ④ 結婚
- ⑤ 56年間の結婚生活中、主人は13年間の闘病生活の末、昨年逝去致しました。入院中は私も毎日病院に通いましたので、お互い悔いはありません。最後はにつこりと手をあげてさよならの挨拶をしてくれました。
- ⑥ よくぞこの年まで大病もなく生きてこられた事、丈夫な体に生んでくれた両親に感謝しています。



### 藤田 千治様

- ① 昭和11年3月9日(いつも、いつも有難うの日)
  - ② 市島町上垣(旧吉見村上垣)
  - ③ 昭和33年3月
  - ④ 信州の土木構造系を33年3月に卒業して、昭和27年10月設立のオリエンタルコンクリート(株)(元都知事・松井春生・創業)に入社し、職についた。
  - ⑤ 国鉄の軌道マクラギや橋梁の桁、建築部材の制作、架設する会社でしたが、22〜60歳の38年間と阪神大震災頃の61〜66歳の六年間は、落橋防止装置関連を扱う会社に世話になりました。
- 東海道新幹線用PCマクラギ制作のために国立にある国

## 祝寿の方々ご紹介

鉄技術研究所に外向し、戻って制作を担当する。

●読売モノレール桁制作から東京モノレール工事を担当し、大阪万博等の跨座式モノレールに関与してきた。

●札幌冬季オリンピック開催前、タイヤで走る札幌南北線高速電車高架工事と道内の橋梁工事のために、家族と共に札幌で転勤三年間を過ごす。

●東名高速道路秦野高架橋工事 工事主任技術者として、二年間従事する。

●東北新幹線用PC軌道スラブ制作、仙台南北線高速電車用マクラギ制作と青函トンネル新幹線用軌道スラブ等や東北地方の橋梁工事積算に関与し、家族と共に転勤13年間を過ごす。55歳で本社に戻る。

⑥現役引退して、14年が過ぎ、

小中高の同期会や、会社の職場OB会と、出掛ける事が多いのですが、現役時代は、多忙な時だったと思われまます。同時代に、お世話になった皆さんの訃報に感謝を捧げたいです。

※「ふる里会」は、母の伯父 藤廣太郎達が始めたと聴き、上京当時から、永い間大変お世話になりました。どうか末永く続きます様にお祈りいたします。

### 池田 忍様

①昭和11年3月29日

②山南町小新屋（旧和田村）

③昭和29年3月

④市川市に住んでいた伯父の招きにより夜間大学進学のため。

⑤41歳のとき長年勤めていた外郭団体系の出版社を辞めて脱サラし（当時のはやり）、独立自営の出版業を始めたこと。当初は自宅で出版物の校正作業で糊口を凌いでいたが一念発起し、東京の茅場町に事務所を構えてアシスタントを雇った。やがてDTPと呼ばれるコンピュータによる文字の組版システムを導入し、横浜の自宅近くに制作室を設けて編集プロダクションとして営業を続けた。

平成元年ごろバブル景気による地上げで茅場町の古い建物の2階事務所が法外な値段で補償を受け、経営的にも一息

## 祝寿の方々ご紹介

### 白井元弘様

ついたこともあるが、もとより経営の才覚が乏しい者として自転車操業に終始した。ただ自分の好きな出版周辺の仕事で職業人生を終えられたことには満足している。

⑥その歳にならないと実感できないことではあるが、80歳は人生の終末を告げる大きな転機。体力の衰えは致し方ないとしても気力の萎えるのは予想外であった。家族関係や環境に不満はないが、「淋しい」気分が襲われる日が多々ある。どんなふうに気力を持ち堪えるか。これからは「気力勝負」の余生と覚悟を新たにしている。



月

①昭和11年3月29日

②春日町

③昭和42年9

④日東紡績株式会社伊丹工場入社（昭和30年）から大阪支店の為上京（当時、江東区の夢の島近くに社宅が有り、ほこりと騒音の中でのスタートでした。今日では、お台場として東京の商業地区の中心として今も発展を続けている所です。）

⑤激動の昭和。真っ只中を生きて来たが個人的にはごくごく平凡なサラリーマン生涯でし

た。そんな中で「阪神淡路大震災」が心に残る出来事の一つです。平成7年1月17日、寒い冬の朝、関西方面地震の報で田舎は大丈夫かと案じながら出社間もなくNHKテレビ「工場煙突倒壊死者発生」との報道があり、それが我が社、伊丹工場である事が判明し、「命」を受け急遽部下3名を連れ現場に向かう為、新幹線に飛び乗った。予想はしていたが電車は京都駅近くでストップ。やむを得ず京都駅まで歩いたが付近は既に大混乱で体力の消耗もはげしく冷静な判断が出来る状態ではなかった。どんな方法、どんなルートで進んだかは今も定かではないが、多くの人の助けを借りた事は鮮明に覚えている。

## 祝寿の方々ご紹介

る（惨状については省略しますが多分、山陰線から福知山線で三田近く、そこから徒歩だったと思う。）「社命」という責任の重さが苦難に立ち向かう勇氣と氣力を与えてくれたのだと思う。現地到着は3日目の朝になったが、事故処理に続き工場復旧に没頭する日々が続き、我が家に帰ったのは、「桜の花」の便りを耳にする頃だったと記憶している。以後しばらくは本社勤務に戻り一年近くを残し勇退退職致しました。

⑥元気で毎日を過ごしております。丈夫で健康な身体を授かった事に感謝の毎日です。回数は減りましたが、50年余り続けている海釣りを今も楽しんでいきます。さすが遠征や荒

磯は避けませんが、平場を中心に月1〜2回程、友人達と釣行しております。江ノ島辺りはバイクで行っております。又、「市」から借りた「市民農園」で健康維持と実益を兼ね、野菜作りを楽しんでおります。収穫の喜びを味わっております。後10年は健康体でいたいと願っております。

### 森田 宏様

①昭和11年4月9日

②旧竹田村（現市島町）

③昭和47年7月16日

④陸上自衛隊に在職中、東京都市ヶ谷駐屯地に転勤のため。

⑤昭和20年8月15日、よく晴れた暑い日、竹田村と福知山の

境にある塩津峠で見た軍人です。峠の頂上から福知山方向に少し下ると小さな池がありました。その堤防上で太陽に向かつて立つておられた軍人が、見ていた我々国民学校の生徒に対し「何をしている。さっさと行け。ぶった切るぞ！」のようなことを言われたので、怖くなって一斉に福知山方向に走ってにげました。70余年すぎた今も軍刀をふりあげて睨んだ顔は、はっきりおぼえております。よほど恐ろしかったのだと思います。自衛官になってから時々切腹されたのだろうかと思うことがあります。又私が自衛官を志した原点は、この辺にあったのかと思うことがあります。

## 祝寿の方々ご紹介

⑥ 本年3月9日、左耳を中心に左顔面の有棘（ゆうきよく）細胞がんの手術を受け、4月1日に抜糸し、現在に至っております。80歳になり健康第一、早期受診の必要性を痛感しております。

### 井本 馨様

- ① 昭和11年5月23日
- ② 春日町歌道谷
- ③ 昭和31年5月
- ④ 会社の転勤命に依る
- ⑤ 昭和39年のオリンピックと新幹線開通
- ⑥ 過ぎてしまえば早いものです。

### 大野 均様



月

- ① 昭和11年7月15日
- ② 山南町
- ③ 昭和47年8

- ④ 東京にあこがれて
- ⑤ 会社に勤務して外国（アメリカ、フランス、イギリス、スイス、イタリア（バチカン市国）旅行した。
- ⑥ ……………



撮影・岡吉明

### 中居 篤子様

- ① 昭和11年10月8日
- ② 山南町大河
- ③ 昭和32年11月
- ④ 結婚を機にずっと駒込に住んでいます。ただ昭和37年から3年半はシカゴに、41年から4年間はカナダのトロントに住んでいました。
- ⑤ 昭和39年秋、シカゴから帰国する時3ヶ月間、ヨーロッパを旅行したことです。
- ⑥ この頃、私達のまわりの同窓生が天国に行かれるので、とても淋しい思いでいっぱいです。





# ふるさと随想

(撮影：徳田八郎衛)

## 丹波人の遺伝子 人類学は面白い

小森 敏 (日野市)



私は進化人類学研究室という所で遺伝や進化について研究していました。「日本人はどこから来たか」など面白いテーマです。

人は生まれつき(遺伝的に)、お酒が強い人と弱い人がいます。ワッファリン(血液抗凝固剤)などの薬が良く効く人と効かない人、ブロッコリーを苦く感じる人と感じない人がいます。

肥満になり易い人、糖尿病になり易い人、認知症になり易い人などの研究も進められています。遺伝子を調べると、色々な持って生まれた性質がある程度推定出来るようになって来ました。(DNAの上に機能をを持つ遺伝子があります。)

私たち日本人はどこから来たかも、DNAを調べる  
と推定が出来ます。よく言われる、縄文人と弥生人の

体や遺伝子の特徴もわかって来ました。日本国内も地域によって、色々な特徴ある遺伝子の頻度に違いがあります。

DNA（ミトコンドリア）における似た形をまとめてグループ分けができ、ハプログループと呼んでいます。これを調べると縄文人に多い型と弥生人に多い型が分かります。昔から丹波に住む人のDNAを調べれば、どの程度の割合の混血かが推定出来ます。

丹波に長く住んで来た人々のDNAのデータがあるかどうか私は把握していませんが、ただ幸いなことに、丹波の場合はDNAを調べなくてもある推定が出来る方法があります。地理的に丹波は中国山脈の東端にあたり、際立った山脈もなく、比較的平坦な、畿内に近い所に位置します。周辺のある特徴ある遺伝子頻度を見ることにより推定が可能と思っています。

丹波地域にも縄文遺跡があり、この地方も縄文人が住み着いたようです。この縄文人特有のDNAは中国南部から東南アジアに比較的多く沖縄や北海道にも見られます。数万年前に日本に渡って来たと言われていきます。この遺伝子の型は、日本の本州では少ないです

が、沖縄やアイヌでは比較的多く見られます。

その後には日本にやってきたのが弥生人です。この遺伝子の型としては中央アジア、中国東北部に比較的多く、かなり古くからある型のようなです。日本人は大きくはこの二つの人々が混血して現代の日本人になったと言われています。丹波地方にはこの弥生人の型が多いと考えています。

このことは、ある特徴ある遺伝子の分布を見ても裏付けられます。お酒に強い遺伝子は北海道、東北、九州、沖縄地方に比較的多く、酒に強い縄文人が日本本州に広がり、その後には酒に弱い弥生人が海を渡って近畿、中部に多く移り住んだと言われています。丹波は比較的酒に弱い人が多い地域になります。

乾いた耳垢の遺伝子は西日本にやや多い傾向が見られ、湿ったタイプの耳垢遺伝子を持つ縄文人がいた所に、乾いた耳垢遺伝子を持った弥生人が広がったと考えられます。丹波は乾いた耳垢の人が少し多い地域になります。

次に血液型の分布から見ますと、O型は九州南部、太平洋沿岸の県に比較的多い事から縄文人に多いと考

えられます。A型は九州の北部西日本に比較的多く、東北に向かうにつれて段々と減少しています。A型の多い弥生人が九州北部、中国・四国に広がった事が考えられます。丹波や近畿地方はどちらかというとA型が少し多い地域になります。

纏めると、縄文人はO型の血液型が多く、酒に強く、湿った耳垢の遺伝子の人が比較的多いと言えそうです。縄文人の骨などから、特徴として二重まぶた、太い眉毛、鼻筋が通る、ひげが濃いなどの特徴を持ちます。

一方弥生人は、血液型はA型が多く、酒に弱くて、乾いた耳垢の遺伝子を持った人が多かったです。体の特徴は一重まぶた、眉は細い、鼻は低く、ひげは薄などの特徴を持ちます。

私たち丹波人はどの特徴の人が多いのでしょうか。足利尊氏が上京する時、九州から多くの人を丹波につれて来たとかの話がありますので一概には言えませんが、北九州から東進し近畿に弥生人が移動していくときに、丹波には際立って高い山脈もなく、縄文人がいた所に、多くの武力に勝る弥生人が流れ込み、住み着いたと考えています。福知山、篠山にも盆地があり稲

作にも適した土地だったと思われます。

比較的、弥生人の特徴を持った人が多いことが予想できます。比率としては35%程度の縄文系と75%程度の弥生系になったのではないかと私は勝手に想像しています。丹波に昔から住んでいるある程度の人の遺伝子を調べると、より細かく特徴や、どこから来たかがわかってくると思います。

最後に私の紹介で恐縮ですが、研究室と最後の研究で調べたことをamazonから電子出版しました。「なぜ、人は幸せを感じるか」は専門書ということではなく、広く浅く、多くの方が、遺伝子に興味を持つて頂ければと思ひ科学読み物として工夫したものです。人類学に興味のある方はこの本も見て頂ければ幸いです。

(昭和20年生、氷上町出身／東芝勤務後、IT企業新人教育講師)

## 私の青春時代

正呂地 悟（伊東市）



私が丹波の郷を離れたのは一九六〇年（昭和三十五）の冬のことだった。

柏原高校に在学中、大学受験のことや、卒業後の就職のこと等は全く考えていなかった様に思う（元々農家であり、サラリーマン経験のない両親は何も言わず、総領の甚六であった私は唯のんびりと構えていたようだ）。

当時の若者の多くが思っていた？ ように、頭の出来は別にして、東京に出れば何とかなるだろう位の気持ちで「石生」駅から東京に向った。東京では、ポリ袋の加工業を営んでいた親戚を訪ね、取り急ぎ受験準備（大変遅いのだが）に取り掛かった。同家の二歳下の息子と勉強に励み？ 三校に願書を提出、そして何

故か二校に無事合格した。学費が安かったことと、冠に「東京」が付いていた（念のため東京大学ではない）学校に滑り込んだ。

それ以降、丹波の郷に帰るのは年に数回となっている。

今回「山ざる」からの原稿依頼を受け、手掛り程開けた窓から見える程度だが、高校時代（今思えば青春時代だった）を少し覗いてみようと思う。

中学を出て何の疑いも持たず柏原高校に入った。両親は赤飯を炊いてくれて、通学用に自転車の新品を与えてくれた。車輪がシルバーで自転車がこんな美しいものかと思つたことを今も鮮明に憶えている。家は横田にあつたから学校迄は4〜5km位はあつた。夏は大汗をかき、冬は坊主頭に帽子を被つているので学校に着き帽子を取ると頭から湯気が立ち昇り、その臭いを思い出す。（私の場合、通学距離は短い方だった。遠くは遠坂から通つている者もいた）。さて、その自転車だが、最初のうちは下校後毎にポロ布で研き上げていたが、それも週一回となり、月一回となり一年も立たぬうち止めてしまい、三年目頃には傷だらけの自転

車となつてしまった。ある時、同級生が福知山線の列車（蒸気機関車が引つ張っていた）で通学しているのを見て、一度これに乗ってみたいと思ひ、僅かな小遣いで「石生駅」から「柏原駅」まで乗つたことがあつた。列車のデッキに立ち（何故か格好をつけて車内には入っていない）凡そ七分間の旅を楽しんだのも良い思い出である。

私の家では、農業中心の毎日だつた。牛も二頭飼つていた。夏場には学校に行く前、牛の為の草刈りが私に課せられていた。背負い籠一杯の草を刈ってくるのだが、朝露を一杯含んだ草を籠の回りから詰め、中程はフンワリと詰めたので籠はずぐ一杯になつた。学校から帰ると親父の目が光つていた。朝露をいっぱい含んだ青草は午後になると三分の一位になつていた。良く似たこともある。学校から帰るとよく田圃に駆り出された。夏も近いある日「田の草取り」を手伝つた。齒が何枚か付いたダブル型の農具（名前は忘れた）を使い稲株を中に缺み田圃を往復して、雑草を採るのだが、これも一度誤魔化したことがある。稲株と稲株の間を往復すると行き復りで二度通ることになるのだが、

面倒なので、行きはとも角、復りは一株を飛ばして片付けた。田の泥が濁っているので如何にもちゃんをやつたように見えるのだが、翌日、又親父に叱られた。田圃の水が澄んでくると行つてない処が明白になつたのである。

「米と云う字はなあ、八十八回手を入れて、やつと食べられる米が出来るものだ。だからもつと真面目にやれ！」この時、米と云う字の意味を憶え、それ以降、お茶漬は食べない。一方で漢字に興味を持つようになった。

そんな多忙？ な中で学校生活は楽しかつた（勉強は何故か好きでなかつた）。いつも連んでいた仲間が居た。彼らはT君、O君、S君、Y君、U君等だが、各々素晴らしい大学に進学した。私は思つた。彼らはいつ勉強していたのだろうと…。

部活も練習は苦しがつたが、楽しい時間でもあつた。陸上部に所属していた。授業が終ると走つていた。当時陸上部にはS君、Y君、T君等が居て花形の部だつた。校内マラソン、地区別駅伝、体育祭では回りの声援が嬉しかった。多分ドヤ顔をしていたんだろうと思



う。そんな中でも暇を見付けて（作って）は女子との交流にも精を出した。

今でも思い出すのは自転車で「川代」の桜を見に行った事だ。汗だくで鐘ヶ坂のトンネルを越え、出た所で休んだ時の空気が旨かった事を何故か憶えているが、女子と見た桜が旨かったかは定かでない。ある時は化学担当であったM先生の許可を得ている（実際は誰が得たのかは解らないし、知らない。私でないことは確かである）という理屈を付け、同級生の店で焼ソバを食べたり（この味が忘れられない。因みに上京して親戚の家で初めて出前を取った時のこと、ソバが良いか”と聞かれ”ハイ”と答えたのだが、配達されたのは日本蕎麦だった。ソバという焼ソバしか知らなかった私は、団子状になったソバに悪戦苦闘し、叔父さんご夫妻と息子に笑われた）した。琵琶湖へ（女子と）一泊のキャンプを決行した事もあった。又、土曜日等は、私の家で、S君のギターでミヨちゃんとか、黒い花びらを唄いだべリングに興じたのも良い思い出である。

全く話しは変わるが、当時レコード大賞なるものが発

表されたのをご存知だろうか。昭和三十四年の第一回は「黒い花びら」、第二回は「誰よりも君を愛す」昭和三十五年である。関係ないが私の好きな曲は「あゝ上野駅」です。

そんなこんなで青春の一コマを覗いて見たが、意外に古いことは憶えているものの、さて昨日の昼飯は何だったか考えてしまふ今日この頃である。

（昭和16年、氷上町横田出身／前ホテル暖香園総務部長）



撮影・岡田昌子

## 丹波の原風景と当時のこと

廣瀬 佳智（和光市）

1946年（昭和21年）生まれの私にとって戦後70年を経た現在、今回のこの寄稿の機会にスタート地点から我が家の丹波との関わりの始まりから18歳までの故郷の地を振り返ってみたいと思います。

その当時のことを思い浮かべると改めて思い出すのは壮年の両親と小学校から大学まですべて同窓であった兄との日々の暮らしの記憶と、川と山々に囲まれた田舎の原風景の記憶です。そこは丹波の山里、母の出生地旧幸世村である。

柏原駅から北へ15km程、佐治川と県道路を中心に東西に広がる水田と集落からなる丹波市北部に位置する当時の旧幸世村がある。村の中心を流れる大きな堤防で護られた佐治川、村を貫通する戦前からあったと思われる当時未だ珍しいコンクリート舗装の県道、そして小中のグラウンド、今も残る氷上町立北小・中学校の

レトロな木造講堂、室町時代創建の足利氏の権勢を窺わせる壮大な禅宗の古刹圓通寺の鬱蒼とした夏の緑とそこに佇む本堂等々が当地の思い出の場所となっています。

中でも好きな当時の情景は近所の幼友達との豊島健二君と近所で買ったおやつのお回転焼きをもって、山の腹の岩によじ登り、日に白く光るコンクリートの道路、あぜ道に仕切られた水田、青く豊かな水量を湛えた佐治川を眼下に見下ろし、幸世村全体を俯瞰する爽快な気分になったあの頃の風景である。

当時の私の小学校時代はほぼ毎日夕方まで豊島君と二人して屈託なく近所で遊びと悪戯にひたすら明け暮れた、セピア色の戦後間もない昭和25年頃から30年代である。楽しくて愉快な時期であった。

近所の料理旅館の床下を這いまわり、納屋小屋、近くの山々、小川、そして学校の講堂の屋根裏が格好の遊び場であり、ゲーム機器、塾、スマホ、母親の干渉とは無縁の世界で、制約のない伸び伸びとした当時の子供の成育環境である。

従って少年時代から大学に入る18歳までは丹波の地

が私のとつての全ての世界であり、想い出の地である。当時外の世界に通じる唯一のパイプは福知山線であり、全盛期を迎えた日本映画であり、そして読み耽った少年向け小説の単行本と親が購読していた週刊朝日であった。70年後にその対象は東映時代劇〈紅孔雀〉から洋画〈スポーツライオン〉に、本は〈巖窟王〉から〈Chaima2049〉に変わっても今もって映画鑑賞と読書が楽しいのは、これらの幼年期の経験であろう。

しかしその後の、中学校3年頃から高校卒業までの4年間は兄が大学入学で家を離れ兄弟一人になったこと、また柏原高校までの往復二時間の遠距離自転車通学は体力の乏しかった私にとつては厳しいものであり毎日通学するだけで精一杯で、正直充実した高校生活とは程遠く、徐々に普段の生活にも余裕が無くなり、前向きな気分も失せていた。やがて本来の自分らしさを取り戻したと思えたのはその後の大学入学以降である。

もともと廣瀬家は三重県桑名市で祖母は愛知県尾西市とルーツは東海地方でありながら、祖父が大阪に出て木材仲買人を営んだところから丹波との縁が生まれ

たようだ。

祖父が戦前の昭和初期に福知山線で大阪から丹波地方に木材の買付けに来ていた際に私の父である長男の嫁として幸世村南御油井上家三女の母が紹介され結婚し、大阪市大正区小林町（東京の江東区木場の様ところ）で私の家族がスタートしたのである。そしてその後太平洋戦争末期の大阪空襲の難から逃れるため、家族は母の故郷の丹波幸世村に疎開し戦争終結後も両親はそのまま丹波に居を構えた。したがってここでの18歳の高校生まで両親と兄との暮らしが私の大方の丹波での想い出の源泉である。

その後私は大学卒業後、専門商社に勤務し、13年間は阪神間に在住後、35年前に勤務先の東京本社への転勤を経て現在に至っている。70年間もまさにあつという間である。

昭和初期の祖父の仕事の内容からの縁で初めて丹波の地に縁が生まれ、丹波の地をベースにした人と大阪をベースにした人々の交流が始まり、今も母方の親族の多くは丹波市と福知山市在住であり、更にその後私自身も福知山市出身の女性と結婚することになるので



都内ホテルにて（中央）

ある。

当時の思い

出深い方々を  
挙げると、氷  
上町立北小、  
中学校の先生  
方々で、二度  
も担任となつ  
た足立育子先  
生、白井正子、  
芦田武、大西  
田村諸先生方  
の記憶は鮮明  
であり、その

エピソードを東京での高校同窓会で御本人からお聞き  
することができた。

そしてもう一名上田修氏である。氏は高校、大学の  
先輩でもあり、私の兄も所属したクラブ謡曲部の先輩  
でもあり、現在関西学院大学能楽部OB会会長でもあ  
る。やはり氏の本誌への寄稿文を通し、現在お住まい  
の春日町で郷土の歴史的な研究、卓越した謡曲、能の  
技量でもって活動をされている事を知り得た。

最後に拙い故郷の思い出の文章になりましたが、私  
の丹波での暮らしを振り返ると、今は亡き両親、兄そ  
してお世話になった先生方、父と共に仕事をして頂い  
た足立正氏、豊島健二君、名前は上げ切れないが同窓  
生への心からのオマージュとしたい。

（昭和21年生、氷上町出身／元専門商社勤務）

頃は単に授業勉強だけでなく、もっと幅広い先生方  
との交流から生じた学校生活の貴重な体験が思い出で  
の源であり、中心である。

また、以前本誌に寄稿されたことがきっかけで、近  
所にお住まいであった柏原高校の先輩で自衛隊の幹部  
として活躍された白井小五郎氏と私の父との心温まる



撮影・岡田昌子

## 縁故疎開

徳 義 通 夫（横浜市）

田舎の代名詞のように言われている丹波は、大阪から福知山線で3時間。鉄橋とトンネルの連続で、何処までいっても田舎だった。ここに住み、親と離れ離れになるのが、寂しくて悲しかったのを覚えている。当時は未舗装の県道をたまにトラックが土埃をあげて通り過ぎ、鉄道はSLが数本走っていた。

今では高速道路が村の中央を縦断し、鉄道は完全に電化し、特急列車が通過していく。私は横浜に住んでいるが、車で帰省するとき一度も一般道を通らず全て高速道路でいける。村にはスーパーマーケットもあり、都会と変わらない生活ができる。

昭和19年、国民学校1年生の3学期に、父の故郷丹波に2才上の姉と縁故疎開した。

その丹波の家は確かに大きかったが、実に大勢がそ

の家で生活していた。祖父母、まだ嫁に行かない父の妹達、親戚の疎開組も含めて10数人が住んでいた。幼い私たちの見方になってくれるものは誰もいなく、みな自分が生きていくのが精いっぱいだった。

さすがこの田舎に戦争の恐怖はなかった。防空壕も空襲警報もなく、B29が飛行雲を引いて遠ざかって行くのをのんびりと眺めていた。しかし出征した兵隊さんが、英霊になつて帰ってくるのを、村はずれまで迎えに行くのが、だんだん多くなつていった。

そして戦争は終わり、物不足が深刻になつていった。着る物はそれほどでもなかったが、食べ物のひもじさは今も忘れることは出来ない。

都会と比べ子供たちは不潔だった。鼻水をたらし、なぜか「くさ」の出来ている子が多かった。しかしよく働いた。学校から帰ると遊んでいる暇はなかった。夏は畑の草取り、冬は山へ「こくば」かき、必ず決められた作業が待っていた。

5・6年生になると一人前として田んぼの仕事をやらされた。初めのうち私は蛭が怖くて田んぼに入ることが出来なかったが、そんなことは許されなかった。



機械化された近代農業と違い、すべてが人力の辛い百  
姓仕事だった。

近年田舎暮らしがもてはやされているが、私は田舎  
で住もうとは絶対に思わない。遺産相続で田畑と、大  
きかった家を相続したが皆手放した。お墓も整理し、  
丹波とは全く縁もゆかりもなくなった。

疎開したとき、氷上郡春日部村だったが、今は丹波  
市春日町になり、郡、村から市、町になったが、やつ  
ぱり過疎地に違いない。

(昭和12年生、春日町多田出身／無職)



撮影・岡吉明

## 細見綾子さんのこと その二

藤 田 玲 子 (入間市)

細見綾子さんが昭和三十一年、金沢から東京都武蔵  
野市に移られた事は前回書きましたが、俳句の他に  
エッセイ、「筆立」「武蔵野日記」「花の色」「俳句の表  
情」など多数あります。

平成八年三月に出版された「武蔵野歳時記」夏の項  
に、「桐の花」というのがあってこのように書いてお  
られます。

五月十一日に病院行きをした。病院に前もって約束  
をしておいて当日は朝早く出かける。今日は急に夏ら  
しい日となり、九時頃、いつもの道を通ったら桐の花  
が咲いていた。今年はじめての桐の花。家と家とがこ  
み合っているすき間の材木屋の屋根の間を抜き出て  
すっきりと咲いている。今までそこに桐の木が立って  
いたなどは誰も思いつかない。花は無数。その紫は



水原秋櫻子さん

淡くて美しい。

ああ、あすこに桐の花が咲いている、と私はからだをのり出してびっくりした。車を運転している倅（太郎さん＝筆者註）に、今の桐の花見たか、と、うしろから肩を叩いたら、うんという返事が返って来た。

車で急に音楽が鳴りはじめた。

「キャスリン・バトルの独唱。あの美しい声が耳元にひびいて、これはバトルだね、と私は言ったが、倅は無言。それから半時間余り私は澄んだ歌声を聞きつけた。桐の花とバトルの歌声、斬新な調和があると思いつつ。

この後の文章で綾子さんは病院での診察を終えて三

時頃家に帰られたと書かれています。

私はこのところを読んだ時、綾子さんが、無数に咲いている薄紫色の桐の花を見て、驚き、その感

動をうしろから肩を叩いて伝えなければいけない気持を、太郎さんはしっかりと受け止めて、「キャスリン・バトルの虹立つやうに唱ひたり」で答えられたのではなからうかと思いました。同じ「武蔵野歳時記」の少し後の項に「秋櫻子忌」というのがあり、又、引用させて頂きますと、

五月十八日は水原秋櫻子先生の年忌が帝国ホテルであった。夫は名古屋へ行く約束があり前日から出掛けたので、私一人で出席した。会場正面に先生のお写真が飾られ、白い花に埋まっておられる。私も白い一本の花を手を参列者にしたがって献花した。

私は秋櫻子先生の影響を多大に受けている。

明るく美しい、それを近代的と呼ぶか、絵画的と呼ぶか、今までの俳句にはなかった新しさであった。

思いつく話になるけれども、私が東京に移って来てから間もなく、「俳句研究」の西川さんから現俳壇の大家をインタビューして毎月探訪記事を書くよう頼まれた。第一番は秋櫻子先生ということになり、中央線の西荻窪駅で西川氏と待ち合わせてお訪ねした。それが

先生にお目にかかったのはじまりである。

インタビューで綾子さんは、「先生は日本各地の景色をたくさんご覧になってどれが一番いいとお思いですか」と質問され又、「どの花が一番好きですか」など尋ねておられます。先生はそれに答えて、景色は十津川峡にあやめの咲くころが好きだと、又花はミモザがいいと云っておられます。

その後何年かして、秋櫻子先生の『俳句と随筆集』が出版されて、綾子さんはそれを楽しくむさぼり読んでおられたところ、ある日、秋櫻子先生からその読書感想文を書くようにお便りがあつた。二十枚ほどの感想を書いて角川書店の「俳句」誌へ送られた。その「俳句」誌が綾子さんの手許に届くか届かないという時に、先生から速達のお便りが来て、「ご苦労さん」と書かれてあり恐縮されたことを思い出され、師の写真の前に立ちつくしておられる細見綾子さんのお姿を私は思い浮かべました。

(永上町出身)



撮影・岡田昌子

# 上久下小学校卒業記念カレンダー

原 谷 洋 美 (杉並区)



表紙・校章

♪ゆかりある里に生い  
立ち♪と校歌を唄った  
のが六十年前。団塊世代  
最後の学年である私達同  
級生は七十二人だった。

全員で、校庭の隅にあった土俵場で砂鉄取りをした。  
煤を塗った下敷きで皆既日食も見だし、ドッジボール  
もよくした。

上久下には八つの部落(今でいう自治会)があり、  
近隣へ行くのは勇気のいる冒険であったが、太田の白  
鹿さんや青田の獅子舞などの祭りには、約束をした友  
達の顔が浮かびそわそわしたものだ。

学校での時間、家庭での時間、地域での時間の全て  
を一つにして、七十二人の春夏秋冬、四季折々の六年  
間は濃く豊かであったように思う。



6月・宇宙を見晴るかす  
山口神社の千年杉



7月・夏の子供会で泊ま  
った慧日寺



4月・大昔幼稚園に通っ  
た地域づくりセンター



5月・広田のつり橋

平成二十八年二月二十八日付けの丹波新聞に「故郷  
の名所 版画に」との見出しで、上久下小学校六年十  
二人が卒業記念カレンダーを作成したとの記事が載っ  
た。学舎・広田のつり橋・JR下滝駅・発電所跡など  
十二箇所をそれぞれに選び、下絵から彫り、日付けの  
数字やレイアウトまですべて手作りで完成させた、と  
言う内容であった。記事中の写真では、自分の作品を  
持った一学年十二人の顔が達成感に輝いて見えた。  
紙面から上久下があふれ、ふるさとが立って来た。



8月・下滝駅



9月・獅子に頭を噛んで貰った青田の大蔵神社



12月・全校で歩いてお花見に行った川代公園



H29/1月・時代を先取りしたレンガ造りの発電所跡

特急コウノトリが川に沿って力強く走る姿。ゆらゆら揺れる揺りかごのようなつり橋。都会との更には人生への乗降口だった下滝駅。六十年前に小学生で見た上久下と、時々見る現代の上久下が入り交じってありありと浮かんでくる。紹介記事の最後に「希望者は同校へ問い合わせを。」とあり、なんと嬉しいことだろうと直ぐに電話をした。六年担任の先生に丁寧に対応して頂き、三日後にはもう、温かく素朴で、しかしながら力強く、生まれ育つ村への誇りに満ちた手作りカレンダー

ンダーを届けて戴いた。差し出し人は、卒業生一同と書かれておりそれがとても嬉しかった。二本の竹で挟み込み、棕櫚縄の吊り紐仕様は簡素にしてしっかりとしている。裏面には自分が調べた由来を自分の字で書き述べてありその立派さにも感嘆した。十三枚の版面を紹介したい。裏面を見せられないのが残念である。毎年、棟方志功の版面カレンダーを掛けるのだが、四月からは上久下カレンダーに替えた。ふるさとは遠くにありて思うものではなく、毎日身近にある。



10月・儼年から目覚めた丹波竜の元気村かみくげ



11月・特急コウノトリ



2月・朝な夕な思い一杯の上久下小学校



3月・夏には水泳をした悠久の川代溪谷





## 近況エッセイ

### 日本百名山に挑戦中

廣瀬 正和 (川崎市)



#### ◆雄大な山に感動して

鷲羽岳は北アルプスの奥深くに位置し、新穂高温泉から入山し、双六岳、三俣蓮華岳の山々を縦走したその先にある。稜線からは雄々しい奥穂高、槍ヶ岳、黒部五郎、薬師岳を望み、黒部川源流や雲ノ平のある雲上の花園まで歩く。登山愛好家なら一度は歩きたい絶景コースだ(写真)。

家族の日帰りハイキングから始まり、山好きが高じていつのまにか山梨の大菩薩嶺を皮切りに夫婦での百名山に挑戦するようになった。現在65座登ったが、これまでの思い出を紹介したいと思う。

北アルプス表銀座と名付けられた縦走ルートは燕岳から蝶が岳までの稜線歩きで、槍が岳、穂高連峰を眺望することができる。宿泊地の燕山荘では、山小屋のご主人が奏でるホルンを聴いてスイス気分になり、翌朝は絶景の尾根歩きが待っている。

またNHKドラマ「坂の上の雲」のエンディングで映される穏やかな小蓮華岳稜線では、一朵の雲を見つめて坂を登り、白馬岳へ。そして山頂近くの白馬山荘では手作りケーキとコーヒーを味わうという贅沢。山荘の大きなガラス窓を通して、剣岳が見られる雲上の喫茶店だ。

ところで誰でもすぐわかる



山といえば富士山。この富士山を眺めるための登山もまた楽しい。北アルプスの山々の間からは遠くの方に小さい富士が必ず顔を見せる。本栖湖の竜ヶ岳からは裾野に樹海が広がり、どっしりとした大きな富士山が見られる。箱根の金時山からは、家族ハイキングでやさしい富士が望める。

#### ◆豪雨に引き返す勇氣や満員小屋では忍耐も

屋久島の宮之浦岳では雨の中を出発した。山道は沢の如く流れ、岩壁はダムのように流れ、辿り着いた山頂では強風が吹いていた。カッパに雨が入り込み体が冷える。

群馬の武尊山では下山中に天候が急変する。早く帰りたいと気持ちばかりあせり、道沿いに流れる雨水ばかりを見つめて下る。突然、道が水筋から分岐しても、水筋の方へ誘われてそのまま沢へ入り込む。相方が後ろから「道が違う」と叫び、助かった。

白馬岳・唐松岳の縦走では、山荘を雨の中出発。稜線の天狗の頭に出ると強風が吹き、しかもこの先は難関の不帰の剣が待っている。これは無理と引き返す決意をする。下山途中、散歩中の雷鳥の親子に出会い、

チャンスとばかり写真を撮る。引き返した勇氣に自然からのご褒美も。

超満員の山小屋は忍耐だ。三俣蓮華山の三俣小屋では九月の連休と好天が重なり、一斉に人が押し寄せ、「夜は二枚の布団で五人です」と言われた時は、一瞬間が真っ白になった。頭と足を交互にして寝るがそれでも布団に入りきれない。廊下や娛樂室で寝る人もいた。いびきもすがすがしいが、ひたすら耐える。

#### ◆海外の山 ミルフォード・ニュージランド

ミルフォードはフィヨルドの自然溢れた雨林帯で入山規制されている。世界一美しい散歩道と言われ、53キロを4泊5日で歩くトレッキングコースだ。宿泊する山荘は相部屋もあるが、私達は奮発して個室にした。朝夕の食事は山小屋で食べ、ランチはお手製のサンドウィッチを持って行く。初日の歓迎パーティは自己紹介を慣れない英語で苦戦。



翌日はクリトン川が雨で氾濫し道が水没。この水没した道をお姫様抱っこで渡った仲の良い夫婦の話が夜のミーティングで広がる。お前か？ と訊かれノーと韓国のご夫婦だった。三日目、最も高いマッキノン峠の山は、氷河で削られた岩壁に雪が覆いスイス同様の荒涼とした景色で感動する。最終日には米国の新婚さんの奥さんが足を骨折するというアクシデントがあった。最後に一緒に歩いた38名の一人ひとりが感想を述べ完歩証を頂く。いろんな国の人と山の楽しみを共感でき、最高の思い出となった。

#### ◆郷里の山 東播磨・千が峰、丹波・五台山

多紀町の千が峰は故郷から見ることが出来る。小学生の頃、父と登ったり、中学の卒業記念に友と登った山。昔の思い出を胸に50年ぶりに登る。山頂から故郷を見つけ、この山が幼いときから見守ってくれていたと感激する。

また氷上と春日の境にある



五台山。兵庫観光10選の独鈷の滝で有名。香良病院から山頂まで約1時間強。氷上の町が箱庭のように見え、目に入る川や道や家々が懐かしく、いつまで見ていても飽きない。百名山では味わえない故郷の山だ。

#### ◆自然と向き合って、これからも山登り

自然の猛威に人間は弱い。御嶽山では多くの犠牲者が出た。また天候悪化で滑落や低体温で命を落とされた方もいる。無念さを感じても自然に立ち向うの难度大く、自然の中で精いっぱい生きたいと願う。百名山挑戦はまだまだ道半ばですが、無理せず気長に続けたい。そんな山の記録を綴ったブログを公開しています。ご覧ください。検索キー「中高年百名山挑戦」、楽天ブログです。

(山南町出身/東芝アイエスコンサルティング(株)7月退社)



撮影・岡田昌子

## 「ツバメのお宿」が縁で 野鳥の不思議に感動

鈴木智丈(浜松市)



小学生(山南町小川小学校)の時、「ツバメのお宿」のこゝとを学習した。

冬・南国に帰れなくなったツバメが越冬している。場所は静岡県・浜名湖畔の養魚場。主屋につらなる作業小屋の天上に電線を張りめぐらしてもらい、夜はここでツバメたちが集り過ぐすと云うものがあり。

この場所に今も、昔のままのたたずまいが残っている。

今でも、この浜名湖一帯は遺伝子を受け継いだツバメたちが越冬している。日本に渡ってきてきて繁殖し、秋には群れをなし、東南アジアに渡り越冬する。そして又同じ巣に帰ってくるものが多いといわれる。

ただ近年は、建築材や様式が変わり、巣をかけられなくなったりしているが、市中では車庫の中や玄関の軒下などに巣をかけ、外灯の明かりで夜も雛に給餌する姿がみられる。

ツバメ以外の渡り鳥でも、多くの個体が同じ時期に同じ場所に渡ってきて、繁殖し、又は冬を越す。レンジャク（連雀）という美しい鳥は、日本列島の東から西から群れで現れて通過していく。ところが今年（2016年春）は全く姿を見せなかった。どうしたのだろうかと考えたりする。



今は使われていない「ツバメのお宿」の家屋と養魚池（浜松市）

野鳥の生活をみながら、季節のうつろい、美しい地球のいとなみに感謝し、不思議に感動する。日本野鳥の会会員となり、野鳥生息の情報などをいただきながら、生息の撮影をして展示したり、投稿をしたりして楽しんでいる。昨年は念願の“地球最後の楽園”と称せられる

南太平洋のタヒチ探鳥が実現した。

会報に掲載（遠江の鳥 282号）された探鳥記を紹介させて頂きます。

謎のシギ・ハリモチュウシャクに会いに行く。

バードアイランド（タヒチ）探鳥記：鈴木智丈

“地球最後の楽園”と称せられる南太平洋のタヒチ・ティケハウ島から環礁の中の小島バードアイランドに向う。

サンゴ礁の島には接岸する栈橋もない。腰まで海水に浸り、夢の島に上陸する。後に「キュウイー」と「ききなし」した啼き声が飛び込んできた！

目の前の樹々に黒い鳥が点々と、イヤ：いっぱい止まっている。繁殖中のクロアジサシ、ヒメクロアジサシのコロニーだ。海岸の岩礁にもずらりと並んでいる。今この島にはツアーの6人と船長でガイドの7人だけ。鳥は約5千羽のことだった。非日常的な時空の中に居る自分を思う。

島の中ほどに分け入ると、シロアジサシが子育ての真っ最中だ。鳥たちに囲まれている。迷宮に入ってしまった感じだ。林を抜けて浜辺に出て、仰天した!? 謎のシギ・ハリモチュウシャクが紺碧の海を背景に不思議そうにこちらを見ている。群れだ!!

《逃げないで…》会いたくてはるばると訪ねて来たんだ！座り込んでカメラを構える。（33羽の群れを確認、初めての記録と思われる）上空には白くて大きいアカアシカツオド



リの群れが帆翔している。気の遠くなりそうな美しい光景に浴している。1羽のオオアジサシの見送りを受けて離島。ティケハウ島に帰港するときにはナンヨウマミジロアジサシ(初見)の迎え飛翔。

楽園の鳥旅・幸運に乾杯!! 2015/9

ハリモモチウシヤク―日本では数回の記録しかない迷鳥。2羽以上で見られた事はない。18世紀にクック船長により、タヒチ島で最初に発見され、後になってアラスカに繁殖地が発見されるまで、謎に包まれていた生息、マーシャル諸島、ハワイ諸島など南太平洋の島々で越冬しているようだ。このシギの最大の特徴は、和名や英名(White-tailed Tropicbird)にある「針状の羽」で、この羽を確認するのも難しいとされている。幼鳥には顕著にみられた。



ハリモモチウシヤク―脚元に針状の羽が見える



シロアジサシ―島の林縁部で。

(旧姓：井谷英勝(いたにひでかつ) 山南町出身/日蓮宗僧侶。日本に飛来する野鳥の撮影に興味を持ち、海外まで出かけて行く)

## 東西ドイツ統一から二十五年

―新たな試練へ

石橋 順子(町田市)



昨年は一九九〇年の東西ドイツ統一から二十五周年を迎え、当事国に滞在していた者として感慨を新たにしました。一九八七

年夫が当時の西ドイツのカッセル市にある研究所に転勤になり、私も三人の子供たちと共に成田空港を飛び立ちました。不安と期待に満ちた初めての海外生活を待ち受けていたのは東西ドイツの統一という歴史的な出来事でした。私たちが住んだ町カッセルは他の多くの町のように第二次大戦で七〇%が焼滅し、滞在中も工事現場から不発弾が掘り出された事がありました。知り合いになったドイツ人の夫人がある時、私に囁いたことがあります。「原爆がどうして日本に落とされたか知ってる? 最初はドイツだったのだけれどどこも焼野原で落とす町がなかったのよ」戦争の記憶が町

や人々から完全に消滅したわけではないのは日本と同じでした。

生活も軌道に乗ったころ、私たちは車で「国境」を見に行きました。カッセル市は現在のドイツの中央に位置し東ドイツとの国境にとても近かったです。実際訪れてみるとその殺伐とした光景に衝撃を受けました。東西を分ける国境は見通しのよい緩衝地帯を挟んで二重に張られた頑丈な有刺鉄線でした。有刺鉄線の



壁が広い緑の大地のなだらかな起伏に沿ってうねうねと続いています。東側の有刺鉄線に沿って所々に逃亡者などを監視する見張り塔が建てられています。東ドイツの村が意外に近くに見えました。その後東側の住民が消防のハシゴ車を使って有刺鉄線を乗り越えよう

としたという事件が新聞に載っていました。

やがて子供たちは地域の活動にも参加し始め、四歳の息子が入ったサッカークラブは冬は寒くグラウンドが雪で覆われ戸外では練習できません。代わりに向かったのはドイツ軍の基地内の体育館でした。子供たちと保護者は銃を構えた門兵の横を通り、立ち並ぶ大きな戦車の前を抜け体育館に行かねばなりません。巨大な鋼鉄の塊からの無言の圧力を感じながら恐る恐るその前を通り過ぎました。一方、カッセル市の中心部は市電が走りデパートがあり人通りも多くにぎわっていました。ある時街中を歩いていると地を揺るがす轟音がしました。通りの向こうから戦車がやって来たのです。当時の西ドイツでは平凡な日常生活のあちこちに東西間の緊張が潜んでいました。

一九八九年になると東ドイツから多くの市民が脱出を始めハンガリーを通ってオーストリアになだれ込み、西ドイツへの亡命を求めました。脱出した人があまりにも多く、東ドイツの社会は機能しなくなつたと言われています。これを受けベルリンでは東西ベルリンを隔てる壁に人々がよじ登り、ハンマーで壁を壊し始め、

あのドラマチックな壁崩壊へと急展開していききました。そしてついに東西ドイツの統一が武力を使うことなく達成されたのです。東ドイツは「不肖の弟」と言われるほど経済が疲弊していて、国の将来を不安視する知人もいました。

私たちは国境の変化を確かめるため再び車を走らせました。国境に近づくとつれ対向車線を見慣れない同じ種類の小型車がぞくぞくとやって来るのが見えます。東ドイツ製のトラビと呼ばれる車です。車窓から旗を振って歓喜の叫び声をあげている人もいます。途中の村々ではバナナや飲み物を彼等に振る舞っていました。国境の近くの村までトラビの列が途切れることはありません。国境に接する村はお祭り騒ぎでした。家々は窓を開放し食べ物や飲み物を提供し、来る人も迎える人も喜びに満ち溢れていました。それはまるで白黒映画が突然鮮やかなカラー画面になったような光景でした。西ドイツ政府は東の人たちに祝い金を渡すことになり郵便局が混み合いましたが、そのお金で東の人達はバナナやチョコレートなど日用品を段ボール一杯買っていました。私たちはその後ベルリンへ行き、

崩壊し散乱している壁のかげらを拾いました。何人も東側の人々がこの壁を越えようとして命を失いました。しかし赤や青の原色で落書きされたその恐怖の壁は今や魔法が解けたように、ただのコンクリートのかげらになっていました。

当時の西ドイツはナチスやユダヤ人迫害の反省から全体主義的なものは徹底的に排除し、制度的にも他民族に非常に寛容でした。今ドイツのメルケル政権はEUの主導国としてシリア難民受け入れにも積極的です。しかしEU離脱を決めたイギリスのように難民受け入れを渋る人々もいます。メルケル首相は東ドイツで育ち教育を受け物理学者になりましたが、その後政治家として東西ドイツ統一を経験し困難なドイツ再建をくぐり抜けて来ました。首相は「ドイツが多くの人にとって希望の国になっていくことが嬉しい」とも語っています。理想と現実の折り合いをどのようにつけるのか、ドイツは新たな試練に直面しているようです。

(昭和24年生、市島町出身／神奈川県立高校英語科講師)

## ささやかな癒しと感動

谷 口 捷 (川崎市)

かつて「東京には空がない」と言われた方がおられた。最近はその空に気が付くようになった。化石燃料の使用のためと思われる。十八年前に空気汚染を避けて、夢の原子力発電と電気自動車が実現するまでと、出来るだけ山に近い場所を求めて現在の家を手に入れ、太陽光発電と太陽熱温水を試みる。庭は先住者が植えられた格調高い垣根や木を取り除き、果樹と野菜畑に変貌している。通常の世間とは逆行であるが、庭で植物が変化していくのを眺めていると心癒されるものがある。最初は鶯の鳴き声で目を覚し、メジロ等各種の小鳥が来て虫を取ってくれていたのに、だんだんとカラスやヒヨが邪魔してくれる。餌を置いておくと、最近少なくなった雀も集団で仲良く食べているも、日が経つにつれ喧嘩を始めて最終的に強いものが残っている。集団は豊かになると根性が悪くなるのかもしれない。

しかし貧しいことが善であるというわけではないから困る。庭にある孫が作った巣箱から本年も五月に山ガラが巣立っていった。もちろんカラスや蛇対策が必要である。私が庭に居る時が安全であることを知っているのが嬉しい。巣立った後もひまわりの種を置いておくと、親子で来て食べているのを見ることが出来て微笑ましい光景である。数年前に嘘のような経験をしたことがある。シジュウカラの巣に雛が居る時に蛇の侵入を発見し、たまたま来宅していた婿の助けを借りて必死で尻尾を取り引き出した。戻って来た親が子を奪われていると誤解して、私に向ってきたがその後事情が分かったのか眺めていた。騒動が終り四匹のうち一匹を失っていた。親鳥はしきりに訴えるように私の顔を見ては辺りを探していた。解つていてもどうすることも出来ない。それから何日か過ぎ、庭に出ていると三匹が巣立ちを始め、植木鉢に落ちたり物干し竿に止まろうとしている。思わず近寄るとどこに居たのか親鳥が放つて置くようにと命じるように私の顔に向つてくる。それから無事巣立った丁度一週間後、庭に出ていると目の前一メートルもないレモンの枝に、三匹が並

んで止まりその姿を見せてくれている。数分後親鳥のピーという合図で飛び立っていった。昔「鶴の恩返し」という話を聞いたが本当にお礼に来たのだと信じ感動したことが忘れられない。庭には池があり、自分相応に鯉ではなく金魚とメダカを飼っている。金魚は環境により大きくなると言われているが鯉と間違えられる。かつてはテニス仲間等に卵から育てて提供していた。持ち帰った人から最初は奥方に小言を言われたが、今では完全にはまっていると感謝されたことがある。幼い孫も遊びに来ると必ず餌やりをねだる。不思議なこと、魚でも世話してくれる人を認識するから楽しい。他人には隠れるのに、私が水の浄化設備を掃除する時は近づいてきて手に口づけをしたりする。これにも数年前から害するアライグマが出現して、池は不祥にも金網を張ることとなる。国の方針で外来種は駆除することとなり、市に連絡して庭に檻を設置し、五匹を捕獲処分してもらおう。人間社会と同じで、静かに平和に暮らそうとしても、必ず侵害するのがあるから悲しい。「棲み分け」とか「話し合い」という言葉が空しく感じられる。

感動について「国家の品格」の著者藤原氏は、人は感動するために生きている。人が生れて良かったと感じるのは感動した時だけではないかとまで言われている。そして、美しいものを見ることによっても感動は得られ、美は数学の研究においても大切であることをインドの天才数学者ラマヌジャンの例をあげ述べておられたことがあったと思う。連日のごとくにある人身事故や殺人事件を身近に聞くにつけ、癒しと感動が不足しているためではないかと思う。

五月に年一回の兄弟旅行を企画し、丹波と神戸の夫婦づれと山陰へ行った。晴天にかかわらず大山も眺められず、備中松山城からの眺めも今一であった。かつて体験した足立美術館での感動もそれほどでなかったのは加齢のせいであろうか。地元の人々は黄砂のためと言っておられたが、ここも空気汚染である。新横浜に着くとマスクをした人が多くいて、冒頭の東京は地球と替えた方が良いのかもしれない。丹波を含めて各地で頻発している集中豪雨による災害は空気の汚染と無縁ではないだろう。化石燃料の使用を減らすことこそ緊急のことであり、そのためには原発を含め原子力を

安全に利用する技術やロボット技術の一層の研究発展を期待している。

なお後者ロボットに関しては、日本で最高の国際賞である京都賞を本年受賞される一人金出武雄氏は本誌山ざる三十六号で、丹波生れとして書かせて頂いた方である。

(昭和13年生、氷上町出身)

## 謡、長生きしてポツクリ死ねる

細見次郎(加須市)



戦前の紳士録によると、謡は囲碁・読書と並んでメジャーな趣味だったそうだ。このあいだ、寺田寅彦全集を読んでいたら、

お正月に父上と「実盛」を謡ったとあった。彼が26歳の頃で、謡はごく普通の遊び事だったらしい。

私の叔父(神戸市)も熱心な謡手だった。暗譜して

こそ謡だといって、常に謡本を携えて覚えようとしていた。

私の謡は、叔父との接点から始まり、叔父の通夜で聴いた、「江口」の地謡で加速し、遺品の「関寺小町」や「木賊」のテープをくり返し聞くうちにおぼろげに輪郭を描いていた。

そんな折(十三年秋)、市の学習セミナーで、野口先生にお会いし、観世流謡曲というものを知った。それ以来、月二回の割で本格的に指導をうけるようになり現在に至っている。「鶴亀」から始めてこれまで十二曲を習った。

謡事として科白(詞)と謡(吟型・ノリ型)がある。科白は吟を付けず、語るものだが、一句の中にヒラキという個所があり、そこを強く語る。「これは諸国一見の僧にて候」、名ノリという。語るだけだと軽くみると、さにあらず能の語りは厳格できついものだ。

吟型には、ツヨ吟とヨワ吟がある。ツヨ吟の音階は上・中音と下音の二段階だけで、謡い分けを余り気にせず安心して謡える。胸面を共鳴させて息づかいだけで伸々と謡えるので好きだ。



それに比べて、ヨワ吟の音階は、きめ細く複雑だ。クリ音、上のウキ、上、中のウキ、中、下ノ中、下音と七音階もある。自分はクリ音が苦手で、うまく出せない。素謡のとき、直されてばかりで先へ進めない。「経正」の幽霊は、ウロくして、魄霊の影に消えていかない。自分は音階のことだけ習っている訳ではない。節回しも学ぶし、地拍子のことも理解し句末の引き具合を習得することも心掛けている。

謡は呼吸法だと思っている。呼吸とは吐いて吸うと書く。吐くことに意識を集中してすべてを出し切る。吸う息は、意識せずに自然にまかせてはいつてくるだけでいいとする。一句（七・五詞）はひと息でうたうが、長いあいだ声を出しながら（約十秒）、スツと間をいれて、息を吸う（一秒弱）ことをやっている。いわゆる長呼吸・短呼吸である。これはお経を唱えるときと同じで自然の腹式呼吸である。肺の底まで酸素が入るのでそれだけで細胞はいきまする。

吐くことを意識しないと、首が凝ったり、頭が痛くなったりする。脳細胞に十分な酸素が行き届かないことから起こるもので、昔の人はそのことを経験

で知っていて、謡を好んでやっていたのかも知れない。謡手に長生きしてポツクリ死ねる人が多いと言われている。飯野英夫氏（謡曲普及会）は科学的に調査しても同じになるだろうと述べておられる。たとえば、八世片山九郎衛門（因みにシテ方片山家は丹波が発祥とか）は、「求塚」を公演中舞台で倒れて亡くなっている。最近ではシテ方片山幽雪、ワキ方宝生閑は高齢であつたが現役のまま惜しまれて去っていった。こういうことは素人謡のあいだにもあるそうで、稽古に顔を見せなくなつたと思つているうちに大往生の知らせを戴くことが多い。余り長患いの話は聞かないという。「橋弁慶<sup>べんけい</sup>」という曲は剛健の気風を出して腹の底から太く強い声を発す。修羅ノリのところは氣息を急にして一気呵成に謡う。あとで腹の底があつくなり沈み込むような疲れを感じる。「東北」は全てヨワ吟で謡う曲であるが、常に体の中に力を込めて謡うので全身倦怠を覚える。このように謡は心肺は無論胃腸も刺激するので自ずと内臓を鍛える。丈夫で長生きしてポツクリ死ねる人が多いのがうなずける。

（昭和16年生、氷上町出身／杏林製菓・薬学博士）

# 人生を変えた帰省の日

荻野 哲 男（狭山市）

今から三十二年前、昭和六十年八月十二日午後六時三十分、東京羽田発伊丹行き一二三便のジャンボ機が羽田を離陸後、間も無く消息を絶ち大騒ぎになり、何時間か後に群馬県の、御巢鷹山に墜落し多くの命が失われました。世界でも航空機事故の中では最も大きな惨事となり忘れる事は出来ません。無念にも命を落された方々の冥福を心から祈りたいと思います。決して風化させてはならない事故です。

実はその飛行機に私の家族も乗る予定だったのです。当時私が勤めていた会社の夏休みは八月十二日から十九日までと早くから決っておりました。休みの初日に丹波に帰省して、墓参りをしようとして日本航空一二三便の搭乗券を早めに買い求めていたのです。一二三便の伊丹行きは比較的人気が高く予約も取れない事が多いからです。羽田を夕方出発して伊丹に着く頃は大阪の

夜景が実にきれいなので、子供に見せたくて新幹線ではなく飛行機での帰省を決めたのでした。ところが休みに入る一週間前に、会社で十二日にゴルフコンペが計画されたのです。幹事の方から参加して欲しいと再三誘われたのです。三十年前は大変なゴルフブームでした。開催されるゴルフ場は、私のホームコースで一〇組を予約したのですが、後一人メンバーが入らないと一組がプレー出来ないとクラブから言われ困っているとの事でした。今では嘘の様ですが当時はゴルフ場を予約するのも大変な時代でした。私はぎりぎりまで迷い考えに考えた末に、一組の人が楽しみにしているのにゴルフが出来ないのは気の毒だと思つて一二三便をキャンセルして次の日の朝の便に予約を切り替えたのです。家族からは年に一度の帰省なのにゴルフ優先とは……とひんしゆくを買い、まづいなあーと思つた事を今でもはつきり記憶しています。十二日当日は朝から蝉の声が激しく、盆の入りで暑い日でありました。プレーを終え自宅に戻り、中学校一年生の娘が塾が終つたので迎えに来て欲しいと言うので、いつもなら「歩いて帰って来い」と言うところなのですが、飛行

機をキャンセルした引け目もあり、車で迎えに行き帰って来る途中、ラジオでニュースが流れ本日の羽田発六時三十分一二三便が離陸して消息を絶っていますと聞いて、私は耳を疑うと同時に身体全体に鳥肌が立ちました。こんな事があるのか？ この世には神様がいるんだなあ、又、丹波の先祖さんが助けてくれたのだと思っています。伊丹に着いたら宝塚の姉の所で十二日の夜は泊まる予定だったので丹波の両親はニュースを聞いて心配の余り電話が来ました。理由を話したらびつくりとほっとした気持の様でした。又、心やすくして頂いていた、繊維の総合商社に勤めて東京支社長をしていたA氏が一緒に帰りましょうと言う話で彼は一二三便に乗って不幸にも帰らぬ人となり、私も群馬藤岡市まで車で直ぐに行きましたが、規制線がはられて関係者しか入れませんでした。体育館の回りは油臭い匂いで異様な雰囲気でした。彼のご遺体は最後まで見つかりませんでした。優秀な支社長で人柄も良く、ゴルフも一緒によく回りましたが彼はいつもフェアウェイの真中を歩き人柄と同じでぶれませんでした。その日も一緒にゴルフをしておればこんな事

故には遭遇しなくて済んだのだと思うと悔しくてたまりません。彼は今でも私の心の中では生きておられます。大事故以来私の人生観は変わりました。神に救われた命だから生きて来た道を変えてみようと思い、三十三年間勤めたアパレルの会社を辞め、全然道違いのコンビニエンスストアを十六年間経営し現在に至っております。幸いにもゴルフコンペの為に救われた命ですが余りにも大きな事故だけに衝撃が大きく人に話す事も出来ませんでした。三十年も過ぎたので最近では話す気になりました。「人生いろいろ」と鳥倉千代子さんも歌い、小泉元総理もライオンヘアーを振りかざして人生いろいろと叫びましたが、本当に人間は生きていく以上何が起るかわかりません。

救われた命のある限り残りの人生を少しでも人に優しく生きたいと思っています。

(昭和11年生/柏原町田路出身/元アパレル会社員)



## 丸川健三郎と丹波

丸川桂子（江東区）



夫、丸川健三郎は昨年10月病気で入院しましたが、病床で「山ざる」に寄稿した原稿をまとめ加筆して本にする計画を立てていました。残念な

がら完成には至りませんでした。私と息子、娘は本人の希望を生かそうと自費出版の手続きを進めています。息子はそのため昨年冬の丹波まで写真を撮りに行きました。

夫は終戦間際、小学校3年生の時に徳島から丹波の鴨庄へ疎開し大学入学で丹波を離れるまでの10年間のこの地で過ごしました。その間の出来事を「山ざる」にシリーズで投稿したように丹波での生活に強い愛着を持ち、それが本人の人生でいかに重要で懐かしい時期であったかを綴ってきました。



夫婦で徳島訪問

私も丹波での生活の思い出をいくつも聞いています。両親の故郷、徳島市から最初に兄二人が疎開し、一時鴨庄村の村長、吉見傳左衛門氏宅に預かっていただいていた。5月末に残りの家族が疎開しましたが6月に徳島市は空襲を受け実家は焼失しました。そもそも一家で丹波に疎開することになったのは、父親が柏原町に疎開していた東洋ベアリングの工場長だったからです。夫は徳島市の中心地に生まれ育った小柄で色白の都会っ子だったので、疎開先で最初はいじめられ、クラスの子ども達に抱え上げられて落とされたこともあったそうです。都会の男の子が村の子になる一種の通過儀礼だったのでしよう。

夫は三男で一番上の兄は間もなく旧制の柏原中学校に入学するので村の生活にあまり関らなかつたようですが、すぐ上の兄とともにすっかり村の子になりました

た。戦後1年半ほどで両親は田畑付きの古い農家を  
買って農業を始めましたがその田畑は石がゴロゴロし  
ていて、にわか農家にとつて耕作できるようにするま  
で大変な苦労だったようです。父親は昔軍隊にいたた  
めか何かにつけ厳しい人でした。兄たちと共に農作業  
を手伝わされたの言うまでもありません。しかし兄  
弟で山や畑で遊ぶのは楽しく、近所の子どもたちに教  
えてもらつて山の木の実を取ること覚え、特に「け  
んぼなし」の美味しさを何度も聞かされました。

大学入学と共に丹波を離れ京都に移り住みます。高  
校、大学と奨学金を受給しました。高校1年の夏休み  
には内職のような仕事をしたり、大学時代は住み込み  
の家庭教師やその他のアルバイト（祇園祭の行列に参  
加、引つ越し手伝いなど）をしたそうです。それでも  
よく勉強し、卒業後は大学院に進み研究者になりました。

子ども時代の苦労をむしろ楽しかったことのように  
折々私に話してくれたのは、疎開先の丹波が、古くか  
らの良いしきたりを残している上、鴨庄という由緒あ  
る地名が示すように歴史と人材に恵まれた所だったか

らだと私は解釈しています。

我が家の書齋の本棚の一番目立つところに、「山ざ  
る」の17号から46号が並べられています。昨年11月発  
行の46号を除いて、夫はどの号も目次にいくつかの  
チェックを入れたり、付箋を挟んだりして毎号丁寧に  
読み込んでいました。夫にとつて丹波はまさに心の故  
郷だったのです。

北海道大学工学部名誉教授 丸川健三郎 略歴

昭和12年2月13日 徳島市生まれ

昭和20年5月 兵庫県丹波鴨庄村に疎開

昭和30年3月 兵庫県立柏原高等学校卒業

昭和34年3月 京都大学理学部物理学科卒業、同大学大  
院修士課程に進学

昭和36年4月 松下電器産業（株）研究所に勤務

昭和37年3月 東京大学物性研究所助手

昭和42年1月 京都大学より理学博士の学位を授与される

昭和42年8月 北海道大学工学部助教

工学部在任中の昭和45年9月〜47年8月、米国ノースウエ  
スタン大学材料科学研究所に研究

昭和62年10月 北海道大学工学部応用物理学科教授

平成12年3月定年退官（名誉教授） 退官後も研究続行

平成27年12月19日病没

従四位に叙せられ、瑞宝小綬賞受賞

## 介護保険制度

山 岸 幸 子（八王子市）

ふるさと丹波を後にしてから、いつの間にか50年余りが過ぎ、これまで歩いてきた道を振り返ると、反省することばかり多くて我ながらあきれってしまう。

残りわずかの人生で、少しは軌道修正できるだろうかと思索してみるが、妙案は見つかりそうもない。

東京で就職したころは今と違って、世の中は好景気が続き、仕事に追われる毎日だった。会社は人手不足解消のため子供を持つ女子社員に対して、育児休職制度や短時間勤務制度などの優遇措置を出してきたので、それらの制度を利用して50歳を過ぎるころまで勤め続けた結果、子供達には「鍵っ子」で、寂しい思いをさせてしまった。

退職してから、少しでも母親らしいことをしようと思つた時は、子供達はそろそろ巣立ちの時期を迎え、必要な時に傍にいない親は当てにしないで、彼等なり

にたくましく成長し、飛び立って行った。

後に残された親は元気で生きていくしかないと悟り、今までできなかったスポーツや旅行、お稽古事などをしてのんびり暮らしていたが、その内、体調を崩しうくなった。これまで時間に追われる毎日だったのが、急にゆっくりした生活になり、身体の方が変調を来したようだ。自由気ままな生活は快適かもしれないが、やっぱり、適度に忙しい方が健康には良いようである。

丁度そのころ「介護保険制度」が施行され、高齢者を介護する人が必要になるらしいというニュースを耳にするようになった。「もしかしたら私でもまだお役に立てるかも……？」とその時は軽い気持ちで、ホームヘルパー養成所へ申し込んだ。

それから3か月間、介護に必要な学習を専門の先生方から厳しく教わった後、2、3か所の介護施設で実習訓練を受けて、やっと2級の免許を取得した。

予想以上に厳しい訓練内容で、最後までやれるかどうか不安はあったが、一緒に授業を受けた人達が自分とほぼ同年代の人ばかりで、まるで学生時代に戻った



ような雰囲気だった。休み時間には皆でにぎやかにおしゃべりをして気分転換し、その勢いで最後までやり抜くことができた。その時の何人かの人達とは今も交流が続いている。

軽い気持ちで始めた介護の勉強だったが、実際にやれるかどうかは未知数なので、やはり実行に移すしかない！と決心して、自宅近くの老人福祉施設にヘルパー登録をした。

その施設でしばらくの間、見習い訓練を受けていよいよ、訪問介護をすることになった。

自分よりずっと若い「先輩」に案内されて、初めての利用者のお宅を訪問、先輩は利用者には終始、笑顔で話しかけながら、私には仕事内容をきっちり実地指導された。そのスマートな仕事ぶりに感激し、是非とも見習わねば……と気持ちを引き締めた。

最初の内は利用者との意思の疎通がスムーズにできず、何度か先輩に助けを求めたこともあったが、利用者に接する機会が増えるにつれて、徐々に仕事に慣れ、訪問するのが楽しく思われるようになった。

訪問時間内に決められた仕事を終えてから、利用者の健康状態や気が付いたことを連絡ノートに記録しながら利用者の方と軽く話をしていると、訪問時間を過ぎてしまうことがあったが、利用者にとって話し相手の存在は大きなウェイトを占めているということがよく分かったので、許される範囲でお話を聞くようにした。

昔なら2世代、3世代同居が普通で、祖父母から昔話や生活に関する何気ない話を自然に聞かされていたと思うが、いつの頃からか核家族化が進んで、昔話などを聞く機会が非常に少なくなったようだ。

しかし、高齢者は、自分の歩んできた歴史を次世代の人達に語り伝えたいという気持ちが多かれ少なかれ、誰しもあるようで、ヘルパーの我々もその気持ちをできる限り受け止めたいと思っではいるが、決められた時間も守らなければならないので、限度がある。

訪問介護の仕事を始めて6、7年たったころから、自分の身体のあちこちから不協和音が聞こえるようになった。自分の体調と相談しながら、新しい訪問先を

選択するのは許されないことではないが、責任の重い仕事で、ミスは許されない。いよいよ辞める時が来たと思い、ヘルパー不足で引き留められたが潔く辞めることにした。

現在はNPOや民間企業など様々な団体が介護サービス事業を行っているが、増加する一方の介護を必要とする高齢者数に、介護従事者の数がどこも追いつかないように、高齢者が高齢者を介護する「老老介護」という状態も少なくないようだ。

介護福祉を目指す若い人達が、将来の希望を持てるような給与体系、労働内容、職場環境などをもっと改善すれば、魅力ある仕事として介護サービス業に就く人達が多くなるのではないだろうか。

最近、介護保険法の改正で、介護事業の権限が、国から各市区町村へ徐々に委譲され「地域包括センター」という名称をよく目にするようになった。

介護予防、生活支援サービス、一般介護予防が主な仕事内容ということで、今までよりも地域の生活に密着した存在になりつつあるような気配がする。

人間いずれば死ぬ定めだが、できることなら介護のお世話にならず「びんぴん、ころり」と逝きたいと大抵の人は願っていることだろう。その為にも、毎日、少しずつでも身体を鍛えよう。

(昭和20年生、氷上町出身/日本語講師のボランティア)

## 丹波ハピネスツアーを開催して

石塚 富 貴 (品川区)



桜の咲き誇る今年の四月頭、私は「丹波ハピネスツアー」の為、丹波に帰省いたしました。このツアーは丹波出身の方、現在丹波にお住まいの方、丹波に

興味をお持ちの方の三者三つ巴で、2日間に渡り丹波のあらゆるエリアをめぐり魅力を発掘することをテーマとして開催した完全オリジナルのツアーです。こと



ツアー参加者集合写真

の発端は私自身が「丹波のことをもっと知りたい」と考えるようになったことで、小人数で農家さんに訪問させていただく簡単な企画を予定していました。しかし、最終的にはツアーに共感してくださる方が増え丹波の他に岩手・東京・長野・大阪・京都・大分ご出身の方など総勢16名の方がご参加くださる賑やかなツアーとなりました。

私は今回の企画にあたり、いかに自分自身が地元のことを知らないかということにはとさせられました。大学進学と同時に丹波を離れて12年ほどになるとはいえ、毎年、少なくとも3〜4回は帰省していたので、「地元が好きなのである」ことを自負していたのですが、予想以上に知らないことだらけでした。例えば観光スポットで、存在することは知っていたけれど改めて振り返ると行ったことがない所が沢山あったり、そもそも存在すら知らないところもありました。協同

企画者の友人Nさん（大分出身）に「丹波にはこんなにも面白いところがあるじゃない！」と教わって初めて、私は「丹波の人にとっては当たり前で珍しくもなくても、丹波以外の出身の方には魅力と映るのか」という事ですとか、「こんなに面白い人がいらっしやるのか！」と、発見そして新しい出会いと、実りの多い機会となりました。

今回のツアーで廻った大まかなスポットはこちらの六ヶ所です。①月に一度柏原で手仕事市を催されている「TAMBA HAPPINESS MARKET」さん、②丹波大納言あずきの栽培を復活させられた春日町の「あずき工房たなぎた」さん、③100年以上にわたりご家族で代々農業を受け継がれている春日町の「婦木農場」さん、④アイデアと情熱溢れる若きオーナー北さんが「魅了する、柏原町の「Cafe ma-no」さん、⑤関西大学の学生さんが古民家改装などをてがける青垣の「佐治スタジオ（衣川邸）」さん、⑥丹波悠々の森で催された「そば街道まつり」さん、等です。初めての試みで訪問したいところが多すぎて予定がびっしりになってしまいました。

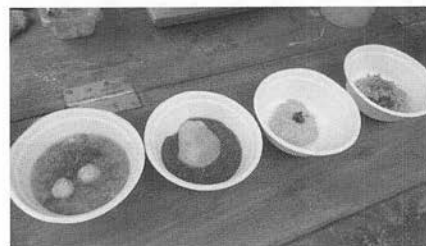
訪問させていただいた先々の方にも濃いストーリーがおりで、お話しを伺う時間が足りないと感じてしまうほどでした。皆さんに共通して感じたのは「今あるものを大切に生きて」という一見シンプルですがとてもむつかしいことを当たり前にされているということでした。参加者の方にヒアリングしたところ、どちらの方のお話しも大変好評だったのですが、とりわけ反響が大きかったのはあずき工房やなぎたさんと婦木農場さんでした。両者とも農家さんなのですがスタイルは似て非なるものでした。



cafe ma-noさんでのお食事



衣川邸でのワークショップの様子



そば街道イベントにて

婦木農場さんでは代々100年、家族ぐるみで百姓をされております。野菜栽培・養鶏・養牛という従来からの農業の形態に加え、農家民宿という「農業体験」ができるスペースを設け、空きがあるときには定期的にカフェを開設されているなど新しいことへのチャレンジが大変盛んなお宅でした。最近息子さん達がリアカーで野菜販売をされたり、新たにサンマルセランという種類のチーズ開発をされたりと、新聞などにもよく取り上げられているそうです。こういった新しい取り組みの突破口は若い息子さんたちの帰郷がターニングポイントだったようです。百姓という言葉の意味は「百の仕事をする」ということなのだよ。というご主人のお話しを伺っていて「一つの仕事にとらわれず、臨機応変に世の中から必要とされる仕事を兼業する」ことを、息子さん達の代まで受け継がれている点が大変印象的なご家族でした。

一方あずき工房やなぎたさんでは、「いのちのつながり」を大変強くメッセージ



婦木農場さんにて

ングされておりま  
した。こちらは明  
治31年以降量産さ  
れなくなり一時は  
ほぼ途絶えてし  
まっていた「大納  
言小豆」を復活さ

せ天皇家に献上された実績もおありの農家さんです。  
自家採種の種のことを「手種(てだね)」というそう  
なのですが、柳田さんではその種をとでも大切に育て  
られております。伺ったお話しの中で私が一番衝撃  
だったのは、普段私達がスーパーで手に取ることで  
きる野菜のおよそ90パーセントがF1種(二代交配種)  
という「異なる親を交配させて、いいとこ取りした種  
から栽培された野菜」だということでした。この種で  
育てた野菜は実がなった時に形や味もよくスーパールの  
規格に安定的に提供できるのが利点だそうです。しか  
し、その野菜から取れた種で次のシーズンに栽培して  
も同じようにはいかないそうで、毎年種を購入し続け  
なくてはならないそうです。これは遺伝子操作をして



あずき工房やなぎたさんにて

自然のサイクルが  
壊れてしまってい  
るものを私達は体  
に取り入れてし  
まっているという  
ことなのかもしれ  
ません。私はまだ

知識も浅いですし科学的根拠も提示できるわけではな  
いのでF1種の野菜の存在を否定するわけではな  
いのです。しかし、普段私たちがいかに当たり前に考  
える選択肢もなく、こういったものを手に取っている  
か、ということを考えさせられる機会となりました。

今回のツアーでは、企画者である私自身も学びが多  
く本当にわくわくさせられる時間となりました。参加  
者の方からもまたやってほしい! と色んなアイデア  
も沢山頂きました。もし、この寄稿に目を通して頂い  
た方で少しでもご興味のある方がいらっしゃいました  
ら是非一緒に第二弾を企画しませんか? ご連絡をお  
待ちしております。

(昭和61年、山南町生まれ / (株) リクルートキャリア)

## 氷上から兵庫県へ輪を広げよう！

太田 颯衣 (目黒区)



昨年11月28日の関東氷上卿友会に参加させていただきました。同卿会・同窓会には兵庫県東京事務所長または次長とご一緒に県人会の幹事・常任幹事が交代で参加させていただき、県人会の活動等をご紹介させていただきお役を担っておりますが、やっと私に順番が回ってきました。

この会につきましては、会長の坂上様は県人会の俳句の会「ふるさとひょうご俳句サロン道草」のお仲間として、また、副会長の岸本様とは幹事会を通して、長年親しくさせていただいており、時々「山ざる」を拝読しております。皆様の文化度のレベルの高さに驚いておりましたところ、今年には私にも原稿をとお願いされ、頭を抱えたというのが正直なところです。

でも、心機一転、昨年の貴会では時間がなくてほとんど県人会のことを話せなかつたので、これを良い機会と捉えて、少し兵庫県の自慢をさせていただこうと思えます。

その前に私の自己紹介を少し。県立兵庫高校卒業後19歳で日本航空に入社し客室乗務員になるために上京以来いろいろな仕事を体験しました。外資系企業での勤務が長かったです。現在はNPO法人とうきょう・はつぴーくらぶの理事長他奉仕活動に専念しております。約20年前より東京兵庫県人会と関わり、7年前から幹事長職を拝命しております。そのうえ、昨年の11月に「ひょうご出会いサポートセンター」、今年の一月には「カムバックひょうごセンター」両方の東京センター長職をお受けすることになり、多忙な日々を過ごしております。神戸を離れて半世紀以上も経ちました。しかし、神戸および兵庫県への愛情は相当深いものがあります。体は東京、心は兵庫というところです。ここで少し「県人会」のPRをさせていただきます。県人会では年に3度の「ふるさとセミナー」を開催しております。講師は兵庫県のご出身者または兵庫に縁



があり、各業界でご活躍の方々です。直近ですと、明治大学院教授の長嶋比呂志先生の「クローン」と医師のお話でした。難解と思われたのですが、とても分かり易く、膝の痛みは自分の組織を培養し、それを使っ  
てほぼ完全に治すことができるなど、眼から鱗のお話  
でした。以前には武庫川女子大学東京センター長で教  
授のたつみ都志先生の「谷崎潤一郎と3人の女たち」  
というお話でした。小気味良い話し方で大人気でした。  
年に3回の機関誌「ふるさとひょうご」の発行、年  
1度のふるさとツアーも実施しています。(今年は10  
月に養父市と丹波篠山です)。東京からの県人会のツ  
アーということで、県の職員の方々がVIP待遇をし  
てくださいます。

そして、年に一度の総会・交流会です。ホテル椿山  
荘東京で、4〜500名のご参加者で賑々しく開催い  
たします。1部には知事の県政報告とメイン講師によ  
るご講演、そして、2部は交流会ですが、目玉は有名  
なアーティストのご出演です。過去5年を振り返りま  
すと菅原洋一、松浦あや、湖月わたる、松永貴志ジャズ  
トリオなどの皆様となっております、今年は甲南大

学ご出身の演歌歌手瀬口侑希さんが予定されています。  
その他に同好会として、句会、ゴルフ、これからハ  
イキング部が出てくる予定です。

また、中堅若手の「のののの会」も勉強会や見学会  
等、年に数回活発に活動しております(50代まで入会  
資格があります)。

さて、次は「ひょうご出会いサポートセンター」と  
いうお見合い推進プロジェクトのお話です。これは兵  
庫県が他県同様県民数が減少してきており、その対策  
として生まれたものです。最近の結婚しない、できな  
い若者たちを何とか後押ししようと十年以上前から県  
内で発足しました。現在総会員数は4000名弱です。  
今までに約1000組成婚しております。東京セン  
ターはオープンして、8月で1年ですが、6月末の会  
員数は80名余となっております。入会手数料は500  
0円です。入会後の流れは一般の仲介業とほぼ同じで  
すが、何度お見合いしていただいても、成婚に至って  
も、年に5000円以外一切不要です。県がバックで  
すし、お申し込みくださる方々もご両親が兵庫県ご出  
身とか県に縁のある方が多いです。安価・安心のプロ

ジエクトです。

最後に「カムバックひょうごセンター」のお話をさせてください。老後は故郷で過ごしたい、若いうちに農業をやってみたい、漁業も良い、でも、ちよつと都会のエッセンスがあつた方が良いという方々に、兵庫県ほど最適な場所はありません。日本海と太平洋に面し、都会もあり、島まであるのは日本では兵庫県だけなのです。このような多様性に恵まれた兵庫県で暮らしてみましよう！というのが、このセンターの存在です。Uターンの方、関東からIターンの方、兵庫は出たがちよつと離れた勤務地に行つてしまつたJターンの方々に県および市町村側としてはいろいろな優遇策を用意しております。ぜひ、一度センターをお訪ねください。「カムバックひょうご」のイベントも時々東京で開催しております。ぜひ、両センターの活動につきましては、ホームページをご覧ください。

兵庫を愛する太田から皆様へのエールを送らせていただきます。氷上から兵庫へお友達の輪を広げてください！貴重な情報に巡り合えますよ！

(神戸市生/東京兵庫県人会 幹事長)

## 「ひょうご縁結びプロジェクト」

あなたの「出会い→結婚」を兵庫県がサポートします！

ひょうご出会いサポート  
東京センター



成婚カッパルが千組を超え「ひょうご出会い支援事業」を推進している兵庫県。20歳以上で結婚を希望する会員の方は兵庫県内のサポートセンター及び東京センターで1対1のお見合いができます。結婚への第一歩をこの機会に！

【お問い合わせ】

☎03-6262-3035

千代田区大手町2-6-4

パソナグループ本部ビルB1階

(東京メトロ「日本橋」駅A1出口徒歩3分)

(JR「東京」駅日本橋口徒歩4分)

開館時間：火水金10：00～18：30

土10：00～17：30/月木日祝休

<http://hdsc.seishonen.or.jp/>

【費用】登録手数料5,000円/年

★会費や追加料金等はかかりません

【登録時のお願い】

メールとインターネットのできるパソコンかスマートフォンが必要になります。

※詳しくは電話でお問い合わせ下さい。

公益財団法人

兵庫県青少年本部/兵庫県

## 私の職場



# 氷上の次の世代

三協運輸株式会社 代表取締役社長 岸本卓也

私は、東京生まれの東京育ち。四十二歳です。両親は夫婦とも丹波生まれの丹波育ち。丹波出身の両親から生まれた東京二世です。

さて、六月のある日、坂上会長様が、ひょっこり訪ねて来られ、二代目経営者の立場で職場の紹介をする様、ご依頼があり、恐縮ではありますが、寄稿することとなりました。

私の会社は、一代目親父が創業した総合物流企業です。トラックでの陸上輸送部門と保管中心の倉庫部門の二本柱で成り立っております。陸上輸送部門は、大型トラック二百台が東京と大阪を繋ぎ、多くの製品を大量輸送しております。倉庫部門は、一万二千坪の倉庫を有し、海外からの輸入物資を保管、配送をしております。何万

トンの物資を大阪から東京へ、海外から東京へと輸送し、消費者の皆様へタイムリーにお届けする機能を有する会社で御座います。約三百名弱の社員が丸となって機動力のあるメカニズム（仕掛け）を創り出していきます。その様な意味で我が企業は、社会インフラの一翼を担っているのだと自負しております。三百六十五日、消費者の皆様に関わることを経営の目標に置いていきます。日常のビールやお茶の輸送から、原料、マヨネーズ、産業機械、家電といったありとあらゆる世の中の品物を保管し、運ぶ事。又、災害発生時には、救援物資や医薬品に始まり、ラーメン、飲料水、後には仮設住宅まで輸送する事もあります。日常の生活においての社会インフラと緊

急時の対応等、物が有って当たり前という現代においての社会的責任を当社は担っていると考えております。



筆者(右)と筆者の父(左)です。

は気を付けております。又、一方では、自分のやりたい様にやれば楽しいだろうと思うし、嫌だ

と思う事もなくなるでしょう。仕事の仕方によっては、お客様の方から自然と当社を引っ張って頂けるといふ場面を多々感じる事があります。

私達の職場という事でテーマに入りますが、それでも今日まで色々ありました。最近はこの仕事を楽しくやっていけると思う事が増えてきました。お客様を選ぶという事はすべきではないと思うし、自らの幅を狭めてしまう様な事には気を付けております。又、一方では、自分のやりたい様にやれば楽しいだろうと思うし、嫌だ

家業である現在の会社に入社したての中間管理職であった頃は割と苦しみました。親父の代のスタツフや自分より年上の社員。試されるべくの言動。自己防衛的な行動。かなり色々な面で辛かった時期でした。そして中間管理職から昇格し、役員に足を踏み入れ始めた頃、次は親父との接点でした。既にこの頃には、親父の代の社員はほとんどいなくなり、又一部の社員には退職してもらおうといった行動も起こしました。親父との経営方針のくい違い。時代の変化。会社の今後。思いは多岐に渡りま

すが、親父で良かったという言葉に尽きます。最終的には肉親なのだと言えられたし、許してもらえました。

ここで親父を知ってもらおうエピソードを一つ書きたいと思います。私の幼少期、家族四人で寿司屋によく行きました。割と良い店で、子供には分らなかったがカウンタ



安全会議の風景です。



倉庫内の風景です。

はなく、引っ込み思案だった為、カウンターでは注文ができず寿司は大変でした。親父は良い意味でカウンターに座らせてくれたつもりだったと思います。ただでさえ昔の寿司屋は、板前さんが強面で声も大きい。唯一、母親の隣に座った時は「これ食べる？」「あれ食べる？」と聞いてくれるので注文も自分で言わなくてよかったの

ーに家族  
四人が横  
並びで座  
つての食  
べ方だっ  
たと思っ  
ます。幼  
い頃の私  
は、今時  
の子供で

ですが、親父は、あまり気にして  
いないので聞いてはこない。マグ  
ロやいくら、玉子しか知らない私  
は、注文もそうだが、食べるもの  
もなかった。母親の隣では、母親  
の真似をして同じものを。親父の  
隣では親父の趣向。今では親父の  
影響かマグロが好きになってしま  
いました。大きな部分では気を使  
ってくれた親父だが、細かい部分  
は気付かないタイプなのだと思います。

話は今に戻りますが、世の中は、  
便利だなあと 생각합니다。二代目経  
営者の為のセミナーや事業継承の  
ビジネス本や案内も多数あり、本  
来は親父の方が知ってもらいたい  
事まで何でも試みてみました。「敵  
を知る」ではないが、自分の側だ  
けでなく、相手側の目線や考え方

をイメージする事でこれは大いに  
役立ちました。今思えばそれ程  
大した事ではなかったが、私とし  
ては当時、とにかく大事でした。  
それらのせいかなが少しは認めら  
れたと思います。親父はまだ健在  
ですが、以前より接しやす。私  
も身構える事がなく割と言い合え  
る。相談相手としても助かります。  
今後の会社の運営としては、前  
向きに明るくと思っています。多  
少の精神論も良しと思っています。  
勿論、時代の風潮にも配慮しての  
事ですが、又、親父との関係も含  
めた親子の関係、母親も健在であ  
るし母親との関係。全て大事にや  
つていきたいと思っっている昨今で  
御座います。



## — 郵政改革の影の立役者 —

株式会社かんぽ生命保険  
執行役副社長  
(インタビュー時は日本郵政専務執行役)

### 谷垣邦夫さん

●インタビューア—

岡田昌子  
上 高子 (撮影)



《プロフィール》 昭和34年柏原町大新屋生まれ。柏原高校、東京大学教養学部卒業。郵政省入省。豊岡郵便局長、近畿郵政局人事部長等を経て、平成20年日本郵政株式会社執行役経営企画部長、平成25年同社専務執行役（経営企画部門担当）、平成28年株式会社かんぽ生命保険 執行役副社長に就任。

——地下鉄虎ノ門駅から徒歩1分の大きな（株）日本郵政ビルをお訪ねし、広い立派な専務執行役室も拝見しました（インタビューの後日、かんぽ生命に栄転されました）

——山ざる4号「私の職場欄」——郵便局の株式上場を目指して—のご寄稿をありがとうございます。民営化される前から現在までも重責ある要職に就いて来られ、様々なご苦労があったと思います。

谷垣 民営化してから10年間、政権交代があったりトップが変わったりしました。経営の企画担当として、郵政という大船が沈まぬよう、微力ながらトップの舵取りのお手伝いをしてきましたが、なんとかここまで勤めて来られたと思います。

——流石ですね。株式上場に向けても一踏ん張りされたことでしょうか。





谷垣 来週、上場後初の株主総会があるのですが、それをもって、民営化10年で第1ステージが完了するという大きな区切りになります。今後は、また第2ステージに向かって新たな歩みを始めないといけません。

### 子ども時代&体の鍛錬

——郵政に就職されたのは切手の趣味が高じてとか？

(笑い)

谷垣 いやいや、子どもの頃は魚釣りとカブト虫に夢中でした。カブト虫はあの大新屋の自然の中の原木で育て、幼虫が解ると拳田へ売りに行く。1匹10円くらいでしたよ。小学生時代は、勉強よりは遊びに夢中でした。しかし、中学に進学してから、急に学校の勉強が面白くなりました。それまであまり勉強してこなかったこともあり、どの科目も新鮮で、新しい知識が増えるのが楽しみでした。また、部活では、

美術部の部長をやらせていただき、水彩画や書初めが県の美術展で入選したり、丹波新聞にも

載ったりしました。(笑い) 楽しい思い出です。

——子どもとして思う存分遊んだ後の脳に知的なことがどんどん吸収されていったとは教育の理想的な展開ですね。高校では一層勉強一筋ですか？

谷垣 父が3年間、闘病生活の結果亡くなったこともあって、高校時代は辛かったですね。あの頃の辛さを思えば、その後のことは、大抵のことはたいしたことないとさえ思えます。

——お辛い体験が精神力を鍛えた、さぞいいお父様だったのですね。東大入学を知らずにご逝去されたのは残念でした。魚か昆虫の研究ではなく文化人類学に進まれたのには何かお父様と関係があるのですか？

谷垣 いえいえ、卒論は「民族性と法構造」という、中国の明、清朝時代の社会構造の研究でしたが、文化人類学では食べていけないので副専攻として法律を選択していました。

——その頃奥様と出会われその後結婚されたのですね。奥様は母校で教授職とか、夫婦そろって優秀ですね。お子さんが親を超えるのは大変ですよ。(笑い)

谷垣 いやいや、元気に育ってくれば十分です。



——将来が楽しみです。ところで、ベンチプレス（ベンチに寝ての筋力運動）世田谷大会で銅メダルを受賞されたとか。

**谷垣** 20年近く前のことです。60kg級では参加者が少なかったもので、これもたいしたことではないのですが、100kgに成功した時はうれしかったです。いろいろと体は鍛えました。ポール・ポトのテロがあった頃、各省庁から1名選ばれ、カンボディアPKOに参加し、オーストラリアで行われたPKOセミナーで、研修の合間にトレーニングをやりました。また、何でも見てもやろうと、NY大学の客員研究員時（1999年から2000年の1年間）は休暇を利用してアメリカ大陸を回りました。アマゾン河で、念願のピラニア釣りやワニ狩りツアーに参加した時の、ジャングルの夕暮れ

にこだまするサルの遠吠えは今でも心に残っています。船の上で飲んだカイペリーニャ（カクテル）とブラジルコーヒは絶品でした。勿論、英語で論文を書き、研究発表もしましたよ。ノーベル賞受賞の米国経済学者ポール・サミエルソンとポール・クルーグマンの二人も、当時はなぜか同じ研究室におられました。

——文武両道の逞しさですね。世界的な方たちと勉強されたなんて素晴らしいですね。優秀だから勤まるのです。話は変わりますが、郵政Gに陸上部が来て、リオ五輪の1万mと5000mに鈴木亜由子、関根花観選手が出場できそうですね。赤い「日本郵政G」のユニホームが新鮮です。谷垣さんの指令があったのですか？（笑い）

**谷垣** 私の指令ではなく、2代前の社長の時から、郵政も企業スポーツに参入しようという構想がありました。人から人へメッセージをつなぐ郵便のイメージから、やるなら駅伝が良いだろうと。郵政グループビジョンを出した頃だったと思います。

——今年の五輪が楽しみです。他にインドアのご趣味は？

**谷垣** 本が好きで大新屋の実家に書庫を建てて、愛読書を保管しています。好きな作家は、人間の極限を描いた新田次郎。また、司馬遼太郎の歴史小説には、魂をえぐるような名セリフがたくさん出てきますよね。

「国盗り物語」でまだ世に出ない明智光秀が慨嘆する場面など、今でもそらんじています。映画も音楽も好きで今はネットで見えています。昔はクラシックが好きだったのですが、最近は昭和50年代の紅白歌合戦も見えています。子供のころ家族と一緒に見た幸せな時代を思い出します。残念ながら、絵のほうは描く時間や場所がない。だんだん、感性が無くなつて来ているのを感じます。

### 今後の郵政と大人がやれること

——何でもネットやスマホで見られる時代ですが、郵政への影響はありますか？

**谷垣** 郵便部数は減ってきていますが、ゆうパックやレターパックは、まだまだお客様の評判がいいみたいですよ。これまで、郵政グループのビジョン、中期経営計画、株式上場という仕事をしてきましたが、今後も

お客様の支持が得られる事業を目指して心血を注いでいきたいと思っています。この年になると、やはり生活の基本は、健康、家族、そして仕事の3つですが、今まで大変な時も無事乗り切つてこられたのは、ご先祖さまに守られていると感じる時があります。

——丹波育ちの関東住まいは常に先祖の霊に守られている感じがして、粘り強く頑張れるものですよ。同感です。最後に、世界中に様々な問題が山積し出口の見えない時代に突入していますが、今の社会をどのように見ておられ、我々は何が出来るのか、また子どもたちをどのように導いて行けるのか、簡単にお聞かせ下さい。



**谷垣** 我々の世代は、戦争が終わって10年余この世に生を受け、日本の高度経済成長と一緒に育ちました。「努力すれば報われる」という日本の歴史上では最も幸福な時代の一つを過ごしてきた



世代だと思えます。テレビドラマにも未来もの、根性ものが多いですね。巨人の星、アタックナンバーワン、鉄腕アトム等々。ストーリーが単調でわかりやすい。サラリーマン社会は、年功序列、終身雇用、上司には服従。家庭を犠牲にしても深夜の飲み会が優先。受験勉強も学歴偏重。だからこそ、私のような環境でも世の中に出られたということもある反面、この単調な価値観に合わなかった人にはやりにくかった時代かもしれません。しかし、これからの世代はどうでしょうか。自分の子供たちの価値観は、すでに我々とは、全く違います。正解のない時代を生きなければいけません。しかし見方を変えれば、世の中に一層多様な価値観が受け入れられる社会かもしれません。モノトーンではなく、どんな悪環境でもあきらめず、自分のアタマで考えた価値観を大切に追求していくことが大切です。

上司や先輩の言うことだけが絶対ではなく。

——確かに、これからの日本社会は多様な価値観の世の中になるでしょうね。でも丹波人の強さでこれに立ち向かっていきたいですね。郵政の中で頑張っておられる谷垣さんにお会いして元気をもらえました。今後一層のご活躍を願っています。お忙しい中ありがとうございました。

### インタビューひと言

岡田昌子

早口でパンパン言葉が飛び出し、頭の回転の速さ、記憶の確実さ、知識の広さ深さに驚かされました。重責をもとめせず、楽しんでおられるようにお見受けしましたが、責任者としてのお顔と、家族を大切にしておられる柔らかな夫と父親のお顔はどちらも丹波人でした。

(柏原町出身)

上 高子

郵政民営化が決まってから、何度か揺れ戻しや浮沈があったりして、その間の谷垣さんを見てみると、暗い顔が多かったように思います。でもインタビューの日は、株主総会を目前に、満を持した余裕が見られ、同郷人・同窓生として本当にうれしく思いました。

(氷上町出身)

正覚を得る土との対話

陶芸家・陶彫家

可部美智子さん



昭和七年神戸市灘区に生まれる。終戦前の三か月間柏原町の伯母宅（中井書店）に疎開。終戦後柏原高女から甲南女子高校を経て専攻科・英文科卒業（現甲南女子大）。昇格運動の一端を担う。二十三歳で結婚。夫（銀行員）の転勤転居を重ね、名古屋で陶芸を始め、鈴木青々・加藤鈔・亀井勝氏に学ぶ。東久留米市にて窯を持ち陶芸教室を始める。京都府知事賞・東京都知事賞・文部大臣奨励賞受賞。銀座、赤坂、新宿等で個展を五十回開催。現在八十三歳。日本陶彫会委員、全陶展名誉会員。

藤原ひさ子（平塚市）

「桜咲く四月、幼い姉弟は逝きし母を精一杯桜の花びらで埋めました。」

悲しみの中から桜の花は、私の心の中で美しく満開になりました。

そして、桜は私の人生に大きな力を与えてくれました。

毎年干支と取組み、巳はいつも人に嫌られる蛇ですが、満開の花かげからちよこんと顔を出せばと考えました。

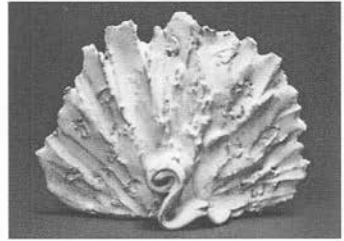
昔から蛇は神仏のお使いとして知られ、人間と関わり合いを持っています。

また、巳は四月を表すことから桜と合うのではと、白釉で清楚に仕上げました。

今や母の倍も年を重ねた私ですが、作品を手にもた新たな感謝の花が満開になりました。」

「花かげ」 二〇〇〇年作

「花かげ」に添えられた文章はかくも美しくも、悲しく、私の胸を締め付けては、ザワザワと心をかき乱していきます。



幾重にも重なりあう白い桜の花びらの前にちよこんと身をすくめて鎮座する白い蛇(写真上)。迷い込んだ何とも不思議な世界で、ぼったり出くわした思いがけない光景のようで、これまでの崇高な茶器やお皿、ふくよかな陶彫人形などは、なかなか一線を画して異質である故、目が釘付けです。

いつも明るく快活な可部さんの、幼少期に亡くされたお母様への思慕の憶念は今も深いようです。

古より万人に愛され、毎年華々しく咲き誇る桜の元に、神仏の使いであるとされる蛇に登場願いたいという気持ちには、数年前に母を亡くした私にも解かるような気がします。

大好きな桜をたくさんの句に残し、葉桜が青々と茂るころに逝った母。

何度も通った最後のお見舞いの道すがら、これまでにあんなに悲しい色をした、あんなにもたくさんの桜を見たことはありません。

「花かげ」を見る私の心が異質の作品と捉えるのはこのせいなのかもしれません。

じつと眺めていると涙が溢れて止まらないように、可部さんの涙も「花かげ」に練り込まれているのでしょうか。

この白い蛇は可部さんのお母様からのお使いであり、私の母からの使いでもあり、観る人其々の愛する人からのお使いなのではと、手前勝手に新釈しています。名古屋にお住いだった頃に黄瀬戸や織部に魅せられて、食器や花瓶を作り始め、個展を全国あちこちで開催。一九六〇年、東京都博物館で開催された「俑」展での大いなる感動が、陶彫へのめり込むきっかけになったとか。

可部さんが独学で作りはじめられた陶彫人形は、見る人をしていつの間にか心穏やかに、そして、一瞬浮世を忘れさせてしまう魔法を秘めているのです。

無垢でそのつぶらな瞳に魅了されてしまうのです。みんな等しくふつくらとした体と丸い顔、小さな瞳。そして、何より印象的なのは、決してうつむいたりせず、いつもすつくと何かを見上げていることです。

仏教にも深い信仰心をお持ちの可部さんだからこそ産み出せるこれらの温かさで力強さを備えた陶彫人形なのだと言ひしきり。

昭和七年、神戸で生を受けた美智子さんは、甲南女子学園ではテニスや英語を学び、ハイカラで、好奇心旺盛で、華道に生徒会役員、それにちよつとお転婆な女学生だったそうです。

明けても暮れてもテニスで全身真っ黒に日焼けした彼女は、阪神地区大会では準優勝するほどに打ち込んだそうです。

その頃相次いだ身内の不幸にも耐えられた心身の強さや開拓精神は、テニスを通して身に付け、その後の人生の支えにもなりました。

美智子さんからは、若い頃夢中になれる物を持つことの大切さ、素晴らしさを学びました。

「今でも時々、こんな場合、英語では何と表現するのかしら、とふと思ったりするのよ」

今尚陶芸にかける情熱や仏教に帰依する求道も、そして新しいことへの好奇心も、情熱的に、そして楽しそうなお話しぶりからは、益々旺盛にお見受けしました。

お転婆ぶりもまた然り。

美智子さんは長年重い土を捏ね、運び、焼く重労働を支えた両膝の痛みに耐えかねて、二年前に手術を受けることに。

生来の好奇心からくるお転婆ぶりは病院でも発揮。

初めての車いすで、病院の廊下を老人暴走族よろしく全力疾走したり、休憩室ではお茶とお菓子を持ち寄り、リーダーになって毎日みんなを誘って女子会を開いてしまう。

辛いはずの入院生活も、彼女の手にかかれば、いかなる所でも、いかなる人でも、みんなパラダイスに。

美智子さんはそういう器量の持ち主なのです。

最後に釜場を拝見し驚いたのはその窯の大きさに加え、想像以上に相当使いこまれていたこと。

「この窯が壊れた時に、私は作陶を終りにします」と少し寂しげにおっしゃったのが忘れられません。

美智子さんの創作意欲のあるうちは、どうか最後まで支えてあげてくださいねと、そつと窯にお願いをしてみました。(書家 山南町出身)

\*注 可部さんの作品はマイ・ギャラリー欄に掲載しています。



# My Gallery

可部 美智子さん (東久留米市)

レイアウト・岡 吉明

①



- ① 花かげ (干支 巳)
- ② 灰釉・四方皿
- ③ 白萩釉・茶碗
- ④ 蒼釉 古鏡  
古都残照
- ⑤ 織部・長皿

②



③



④



⑤



# My Gallery

可部 美智子さん（東久留米市）

花が咲く



聖徳太子像



お猿の楽士





# My Gallery

鶴田 ゆき子さん (板橋区)

趣味の技の集大成 娘の晴れ着



留袖 (月に万年青) をロングドレスに



お色直し用ドレス  
洋服地 ドレス-シルクシャンタン  
ボレロ-ベルベット  
後日着用の要望に小物で  
変化可能なデザイン



「お召し」の着物をロングドレスに

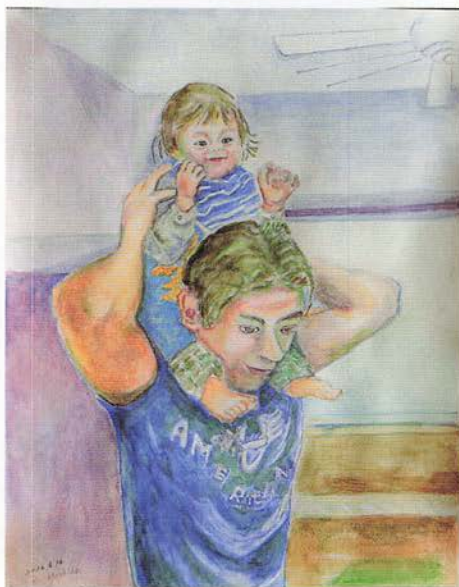


何事も同じ習うなら習い事で終わらせないとの思いが底流にあり、長年の家事の合間にも切れ目なく続けていたものは洋裁だった。ドレス店でドレスの仕立てを覚えたことにより、お付き合いの幅が広がり、盛んな頃は実益も……。楽しかった思い出です。

# My Gallery

吉田 素子さん (港区)

芝増上寺の三門



守る 息子が子供を肩車している図ですが、後で息子の小指が付かず離れずに子供を守っている様を見て親になったんだ〜と感慨深く絵にしてみました。

陽光 太陽は皆に平等に降り注ぎます。花の咲く事を夢見て！



中学高校は図工美術を習いましたが、その後に絵筆を執ったのは、子供の手が離れた後2年位と、まったく仕事を止めて暇になった時でそれはこの6年ほどで、描いたり休んだりです。近くの公民館の様などころで描いています。

俳壇……………

五月の太陽に海も山も耀き、熱海は美しい季節です。月日の経る早さに驚きつつ、日々を俳句に託し、感謝しております。

久呉 道子(熱海市)

初苗水平線上朱に染めし

夜櫻の果てしロビーの更けゆけり

ふるさとの「りくの峠」や遅桜

春灯や襖外して無礼講

栗の花道標古りし武家屋敷

満天星の花咲き今は他人の家

山鳩も夏の別れを啼きにけり

笛の音の一節澄みし夏木立 (高見城址の奥池)

東洋のナポリてふ町月涼し

永き夜や坐り直して文の絨

※

句作では、少年時代の丹波の風物が材料になることが多い。今や句の上でしか故郷丹波は存在し

ない、と言つてもいい。でも、故郷のあることは嬉しいことだなあと思う。時々夢に出てくれるから。

金子 徹(富士市)

— 懐郷七句 —

青田吹く風も乗り込むローカル線

這えば野は戦時の匂い草いきれ

この町に投網をかけて火花散る

酒屋またつぶれて村の春変わる

たまさかに逢う兄弟や柏餅

雁帰る田舎訛りの声こぼし

老いたれど陽炎ほどの明日があり

※

持つべきは友。毎年手製の梅干を送つてくれます。

坂上 勝朗(板橋区)

梅干しを今年も要るやと郷便り

麦嵐利根の川面をやすやすと

春雷や宵の曇りの被さりつ

遥かなる時を戻すや草の餅

※  
 ぼけないようにと始めた俳句ですが、虜になつて二十年。その基本の心を忘れずに、ささやかな同好会のお世話を二つしています。今回、山家の猿がお江戸で芝居させていただく気分でご寄稿させていただきます。

大野 昶(たかし) (俳号・沙年) (丹波市)

畑まで届く昼めし麦の秋

石臼はゆるりと回せ草の餅

一水の貫く一村霧の底

ふるさとに故里の酒秋灯

山霧のとりまく郷や吾小さし

※

地球上は穏やかに平和で暮らしたい反面、世界中が現在は荒れ果てた状態で、非常に悲しく思う。

荻野 哲男 (狭山市)

指に来て人恋しさや赤トンボ

亡き友の手紙出てくる春の午後

福島を忘れた如し桜咲く

テロの記事読む新聞や春の月

国を捨て難民の子に荒れる波

※

この団地にもエゴの木が数本あつて、五月には小さな花がさきます。

藤田 玲子 (入間市)

転職を告げし息子やエゴの花

元気かと留守電の声エゴ咲きぬ

エゴ咲きぬ巡り巡りして十五年

エゴの花真下に散りぬ平和かな

雨止みて道に落ちたるエゴの花

※

無粋なコンクリート塀が取り払われた道端に、名も知らぬ草花が生き生きと絡まり、繁り、雑草の生命力と自然の美しさに足を止めてしまいます。

上田 道代 (目黒区)

雨のしづく含んで 春を待つつばみ

白蓮の のぞけば見える 路地の奥

寝転んで天の川みた夏 遠し

幾億の星に紛れて 漂う我ら

爆、機、音高し 空は誰がもの



詩座……………

人の世は ギブ・アンド・テイク。

上 高子（世田谷区）

夜中に目が覚めた。

薄明りに目を凝らして時計を見ると3時。

起きるにはまだ早い。

じっと目を閉じてあれこれ想いを巡らせる。

亡母は老後30年余りを独りで生きた。

私はといえば、せいぜい年2回の帰郷。

丹波の広い屋敷で独り、母はさぞ寂しかったことだろう。

私は晩年の母の孤独をよくわかっていただろうか。

同年齢の友人が集まると、そんな話題で持ちきりだ。

老いて振り返る、若いころの自身の姿。

「親に冷たく当たった自分を反省することしばしば」。

「謝りたいけど親はもういない」。

「子をもつて知る親の恩」と伝えたとき、母はうれしそうに笑った。

「子ができ親の苦労がわかった」と我が子が言ったときは、私は会心の笑み。

自分がその歳にならないとわからないことは多い。

「年老いて知る親の哀しみ」を、今は亡き母に伝えたい。

近頃つくづく思い知った。

人の世は、ギブ・アンド・テイクの 繰り返し。  
「もっと優しくしてあげたらよかった」と、我が子よ、悔むときが来るでしょう。

でも、私も、母を悲しませたから、おあいこね。

どうやら眠くなってきた。



老いて今、急ぐ用なく迎える明日の朝。  
夢で母に会い、謝ることにしよう。

「あなたの娘は今となって、あなたが耐えた孤独  
がよくわかる」と。

(七十二歳の誕生日に)



歌壇……………

思いがけず発病し、不自由な身になりましたが  
何とかがんばって「自分のことは自分で」を続け  
たいと思っています。

足立 美都子(春日部市)

渦巻いて流れる淵が頭ずの中に有りて時折われ  
は溺れる

三十年の昔過こせし街に来て今浦島の心地し  
ている

戴たいきしまユハケオモト三年目真白な花を高く  
かかげる

何時からと無くそれぞれに役割の分担きめて  
過こす四年目

字が書けぬ脚があがらぬ突然に体の異常表わ  
れし朝

病室に見知らぬ人ら三人と枕並べて眠れる不  
思議

週に二度りハビリ通いの身となりてにわか

年を取りたる気分

久々にペダルを踏みて楽しみりハビリ室の  
固定自転車

車椅子や杖付く人らばかりなりゆっくり午後  
の 때가 過ぎゆく

地方紙が届きてまずはお悔み欄広げて友の名  
無きを確かむ

※

俳句に短歌に川柳もと、一日一句一日一首を目  
標に頑張つて、まだまだ勉強しています。

荻野 哲男（狭山市）

眠れざる夜のしじまに聞こえるサイレンの  
音はげしく走る

かんしゃくのくの字を抜いて過ごそうと思え  
ど今日も心乱れる

早くから購入したいと思いつつ今日に届きし  
電動ベッド

物事のひとつを終えしまたひとつ重なる事が  
人生なのか

日々の事追われ我が娘の誕生日忘れて急ぎメ

ール打つなり

※

盆の来るたび、父母の齢をはるかに越えて生き  
ている自分に瞑目しています。

坂上 勝朗（板橋区）

母逝きて六十年の夏迎う弟妹各各白髪かこつ  
青蜥蜴出しつ引込めつ舌二枚古木の幹を周り  
て消えぬ

海棠を挿頭して母子その先の幼稚園の門くぐ  
りて行きぬ

石垣の墨系の跡まざまざと薄紅梅の匂い染み  
るる

※

昨年、大規模農家に嫁いで六十年近くの丹波市

市島町下竹田在住の友人から句集『まどぬ』が送  
られて来てきました。「三人の子ども達が喜寿の

祝いに句集を上梓してくれ、生涯の記念となりました。  
私が生きた証です。」と書かれていました。

挿絵も素敵な句集です。

木呂子 恵美子（清瀬市）

子と孫と曾孫二人で十三人喜寿の祝いに友ほ  
ほえめり

六十年自然の恵みも災いもたおやかに受け農  
を生き賜う

顧みまずと私は亭主を亡くして二十八年。それ  
までの結婚生活より長くなり心身大分疲れて時々  
つぶれそうで、友の毎日を見習いたいものです。

独り身になりて二十八年疲れきびしき日々な  
れど「おばあちゃんダイスキ」にすべて消  
えゆく

応援歌作詞の頃を思うと、六人姉弟きょうだいの二番目  
だったのでこれからの進路のことや恋いに恋する  
片想いなど悩み多い年でした。

十七の想いあふれてかえる路厄神下よりタヤ  
け仰ぐ

※ 柏原高校応援歌の作詞者です

年毎に「日本人の心」に思いを寄せるようにな  
り、今まで不勉強であった日本文化をもっと身近  
なものにしたいと思ったりしています。

山本 述子（三浦市）

新緑の大櫓をも組み込みみて舞台しつらへ「富  
士山」の能  
（称名寺薪能）

「不死山」と捉へ神秘の山なれば舞に謡うたひに雄  
大さあり

薪能の篝火灯る夕暮れに風収まれり炎の高し  
打つ鐘の響き身に沁み故郷の山の鼓動の蘇り  
をり  
（龍華寺）

幼き日小川の辺りに螢狩る蚊帳に放ちて戯れ  
居たり

※

何の脈絡もなくただ書きとめておく。これが歌  
を詠む原点です。

福田 治子（横浜市）

寝返りを打てば今にも落ちそうな場所で昼寝  
す猫の不思議さ

眠りとは不思議なるもの目醒さむれば全て消え  
てる決意までもが

アルパカの毛十二パーセント混ざりたるカー  
デ羽織りてアングス思う

※

外出のお供は『歳時記手帖』と銀色のキャップを被った短い鉛筆。柔らかいBが手には心地良く、すぐに過去になる言葉を拾っておく。

原谷 洋美（杉並区）

芳しき香りに満つる菩提樹の花房なべて下向く淋し

菩提樹の香しき夜は左門町に独り居の娘の食卓おもふ

指先に母の匂ひがあふれ来る熟れし実からも青梅からも

七か月に入りてお腹の子と話す娘のかたはらに聴く立葵

花の名に似合ひて丈も葉も大き泰山木はおほらかに咲く

初生りは小さきままに摘み取りて味噌汁の具にはつなつの茄子

ジューンベリー六月の実は赤く照り熟す匂ひの真夏に向かふ

## 川柳座.....

生活川柳にはまっています。TBSラジオのデイ・キャッチに十六年前から投稿して何百回もチャンピオンになりました。俳句と違って季語はなく、ユーモアが言うなれば季語の川柳で、日々を笑いとペーソスに変えて活性化しています。

川柳座も登場するようにと、寄稿いたしました。

荻野 哲男（狭山市）

この部屋に何で来たか？とももの忘れ

医者通い帰りに寺にも寄って見る

病院で元気ですかとご挨拶

最近はずぶネクタイ黒ばかり

同窓会、葉の話で一夜明け



# 丹波を撮る

写真と文：徳田八郎衛

## 水無月の丹波(1)



←旧暦行事がどんどん廃れていきますが、にぎやかな鯉のぼりに迎えられてほっとしました。  
(柏原町田路)



←無事に田植えも終わりました。  
左から権現山、高浪山。  
(氷上町本郷)  
残り苗は、どうなるのかな？↑



菜園の植え付けも終わりました。→  
(氷上町本郷)



## 水無月の丹波(2)



←6月といえば夏至です。(一般に) 高額の銀行融資を受けて設置した高価なソーラーパネルが最高に稼働する時節なのです。がんばれ!



ここ氷上町新郷は、北高南低ではなく西高東低の地形ですが、集落の中に「地籍：山林」が多かったので、「農業振興地域の整備に関する法律(のうしん)」がからむ農地の場合と違って、すんなりと設置できたそうです。→



←「ホータルの宿は、かーわはたヤナギ…月々」。新郷は、知る人ぞ知るヒメホタルの宿。ソーラーパネルもホタルも、一番元気なのは水無月。3日と20年の違いはあるが、どちらも寿命は有限。大いにきらめいて下さい。

## 水無月の丹波(3)



←2カ月ごとに実施の氷上高校販売実習に遭遇しました。ここだけでなく本郷の「夢タウン」と黒井の「アルティ」でも行っています。(柏原町母坪「コモール丹波ショッピングタウン」)



指導教官も一緒に「お買い上げ有難うございました」。↓



↑最近の農業実習について尋ねましたが、「商業科の生徒なのでよく存じません」とのこと。そうだ、これは販売実習なのだ。まじめな実習ぶりに感激し、両手に一杯買いました。朝採りのキュウリ7本で200円なり。加工食品の製造者も明記。↓





# 丹波を撮る

## 秋祭りの宵宮（春日町）(1)



←延喜式内社の兵主神社は、春日部荘でも氷上郡でもなく全国に19ある兵庫（つわものぐら）の守護神で天平18年に創建（春日町黒井）。だが現在の祭神は、4人の福の神様で病気治療に靈驗あらたか。近くの春日神社（野村）のような「社殿自体が文化財」ではないが、寄贈された多くの書跡、絵画、工芸品が市指定文化財となっている。中でも赤井一族が寄進の「戦国武将の兜」や近衛家寄進の「近衛信伊筆芋匁」は有名。



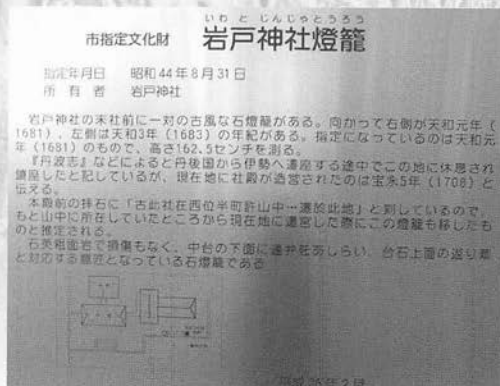
←柏原の厄除祭に負けられないほどの提灯が境内に飾られる。



↑準備を終えた神輿。  
←懸命に準備中の神輿。大鳥居傍の、このレストランは地味ですが、女性週刊誌にも載る人気絶頂の店だとか。



## 秋祭りの宵宮（春日町）(2)



←岩戸神社は春日町国領区の氏神様ですが、自慢が二つ。一つは、丹後の元伊勢から伊勢へ皇大神宮が遷宮する道中で、ここに仮泊されたという伝承。もう一つは、末社前に立つ一対の古風な石燈籠。一つには天和元年（1681）、もう一つには同3年の銘があり、前者は市指定文化財。本殿前の拝石に「以前は西へ半町ほどの山中に在った」と彫られているので、この燈籠も移転されたと見られます。



←「伊勢への遷宮のとき、ここに幣が立ったので斎き祭り、幣が立った1間四方の地は注連をめぐらして清浄の地として今もあがめる（丹波志）。誇り高い氏神様です。お伊勢さんと同格の「大神宮」を名乗っています。↓



←右の小さい方が市指定文化財。この標識では間違いそうです。



# 丹波を撮る

## 変わる福知山線



←20年近く特急列車として走ってきたクリーム色の381系が引退し、真っ白の289/287系が登場しました。289系の方が古いのだとか。↓



←トイレも新幹線並みになりました。



←そこで但馬へ向かう歴史研究の方がたに「JR利用と柏原での一時下車を勧めたら、「丹波市を代表する駅なのに、樹の葉が茂ってホームの観光地図が見えんではないか」とお叱りを。どなたか墓参を兼ねて伐採ボランティアに……

「駅前にはコンビニもないし、駅舎のキオスクも閉店ではないか」と呆られました。下車させたらヤブヘビに……→





撮影：徳田八郎衛 大岡橋から下流を見る

# 丹波から

## 笹倉鉄平の画に魅せられて

赤井俊子（氷上町）

「ミモザ」

海をのぞむ窓辺には明るい光が差しこみ、ミモザの鮮やかな黄色が白磁の壺の中で輝いている。はるか向こうに白いヨットが走る。そんな景色が見える部屋で好きな音楽を聞けば至福の到来となる。笹倉鉄平氏の絵は異国情緒たっぷりの柔らかなで優しさに満ちたやすらぎのひと時を醸し出してくれる。

「ミモザ」の絵を見たとき以前訪れた南イタリアのソレントのことを思った。ちょうどレモンの季節でソレントの街中はレモンであふれ、きれいなボトルに詰められたレモンチェロはどの店にもぎっしり並んでいた。お酒は飲めないと言うと店の若い男性は「アイスクリームにレモンチェロをかけると美味しいよ」と勧





ミモザをプレゼントするのが習慣だ。笹倉氏はどんな思いでこの「ミモザ」の絵筆をスタートさせたのだろうか、氏自身の思い出に基づいているのだろうか、いろいろと想像の世界が広がるのも氏の絵を鑑賞する時の楽しみだ。

める。そうかもしれないと言われるまま小瓶3本を求めた。バッグに入れたが早くもアイスクリームにかけて試したくなる。旅の楽しみがまた一つ増えた気がした。街はレモンの黄色一色だったが、ミモザの季節にはその黄色でいっぱいになるという。ミモザが花をつける季節、3月8日はイタリアでは「ミモザの日」と呼ばれ、男性から女性に

## 「ブルージュ」

もう一つその魅力に取りつかれたのはブルージュの運河に沿って並ぶ家々の絵だ。町はまるで中世にタイムスリップした絵本の中の世界。いわゆる旧市街地区、つまり世界遺産でもあるブルージュ歴史地区だ。この街が表情豊かに描かれているのが氏の傑作「今日が始まる」である。街並みが光、風、水と共にまるで新しい希望のように心地よく迫ってくる。歴史地区にあるホテルに泊まり運河に沿ってマルクト広場へと歩いた朝が鮮やかによみがえる。また、ヘップバーン主演の映画「尼僧物語」の舞台になった世界遺産・ペギン修道院も記憶



に残る建物だ。広い中庭で聞こえるのは木立の葉の音だけ。ただひたすら静謐さに溢れて

いた。

私にとって氏の絵は、他の絵では感じられない特別な感覚を引き起こす。自分自身がその感覚に取り込まれていることに気づき他の作品も見たいという気持ちが強まる。きつと洗練されたヨーロッパに対する憧れが明確になるからだと思う。私の若い頃は今日ほど頻繁に外国に行ける時代ではなかった。小学校の教師にという親の勧めに反対して英文学にこだわったのはその根底にある若者特有の強いあこがれからだっただけと思う。だから海外、特にヨーロッパの日常の匂いが迫ってくる絵は自然に心に収まる。言語としての英語だけでなくキリスト教、ギリシャ神話、ラテン語、そしてイタリアルネッサンスやフランスなどヨーロッパ全体にまつわるいろいろなことを知り、その後の人生を多様な方面に広げてくれた。それを笹倉氏の絵は受け止めてくれる。実際にはそれぞれの国に明暗があり、現地にいれば懂れることばかりでない。しかし氏の絵はいつまでも純粹に遠い日の豊かな気持ちを思い出させてくれて気持ちが良い。

今回の植野美術館における笹倉鉄平展に3回訪れた。

商業関係のイラストなどその繊細な描き方とイメージを適確に捉えた作品には別の面を見た思いだった。最も惹かれるヨーロッパの絵も一朝一夕に出来たものでなくいろいろと苦勞を重ねられた末であることが彼自身の言葉で分かった。丹波人らしい努力もあったのかと思う。

現在丹波新聞社でカルチャーの英会話講師をしているが、生徒さんの一人に笹倉鉄平氏の従兄の笹倉英昭さんがおられる。英昭さんはオーストラリアでエンジニアとして仕事をされていた方で物腰穏やかでスマイルな対応振りが印象的な人である。鉄平氏に直接出会ったことはないが英昭さんのよう物腰柔らかな人なのだろうと思う。なぜなら鉄平氏の絵からは激しさより穏やかで心落ち着く豊かさや郷愁を感じるからである。鉄平氏にはそんなヨーロッパの表情をもっともっと描いてほしいと願っている。

(昭和19年生／氷上町出身・元氷上郡教委勤務。NPO法人丹波まちづくりプロジェクト運営)



## 丹波に伝わる むかしばなしを語る

蘆田 ひとみ（丹波市）



丹波の森協会から発行されている「丹波のむかしばなし」は十集あり、一一九話のむかしばなしがおさめられています。

丹波市、篠山市には何百年も昔から語り継がれてきた民話があり、多くの人に知ってもらえるよう活動しています。語りべの会では丹波、篠山の小学校に行き校区に伝わっているむかしばなしを紙芝居、かたりで伝えることをしています。こどもたちの心に残り読んだり、聞いたりすることでこどもたちのこころを温かくし、郷土愛が生まれたり、ともだちとの繋がりにもなるのではないかと思います。

F M 8 0 5 たんばのラジオ番組にも「たんばのむかしばなし」を語る番組に出演させてもらいむかしばなし

しを語らせてもらっています。むかしばなし聞いたよ、また聞きたくなると嬉しい声を聞きたびさせてもらってよかったですと思います。聞いてくださったかたが心を温め親子のふれあい、いろんな学習の場での活用、むかしばなしに興味をもたれ一緒に活動する輪が広がればと頑張っております。

高等学校で故郷の歴史、伝承など学習する授業に呼んでいただき地域に伝わるむかしばなしを紙芝居にして聞いてもらいました。中には目をキラキラとさせ聞いてくれる生徒もいてみんなのところに届くと嬉しいな、故郷を愛し、心のよりどころとなり、故郷はいつでも待っているんだよと思えるようにと、願いをこめながら語らせてもらいました。貴重な時間をいただき感謝でした。

また、介護施設でもむかしばなしをさせてもらっています。昔のことを思い出されそんなこと聞いたわと話が弾みます。少しでも回想法で脳の刺激になれば嬉しく思います。待つて下さっているので毎月4か所にお話に行きます。聞いて下さりありがとうございますと、感謝しています。



観光ボランティアガイドをしているのですが、案内をするとき神社仏閣など地域にも昔から伝わるお話が沢山残っているのが紙芝居にして聞いてもらい、地域のこと、おはなしができた背景、昔の方々が命を懸け生き抜いてこられたことや、楽しい話、先人たちの思いなど受け継いで語っていきたいと思います。

わたしが勤めていた保育園でも民話劇をするなかで民話「むかしばなし」の良さ、自主性、行動力、子どもをこのころを育むことを実感していたのでいろんな場所でむかしばなしを伝承し、広めたいです。

わたしたちの活動は微々たるものですが、これから未来を担う子どもたちの心に温かい思いが育まれ、心やさしい子どもが育つようにむかしばなしを届けられることができますよう先輩たちの力をかりながら精進したいと思います。

青垣町にはもみじで有名なお寺高源寺があります。開祖である遠谿祖雄和尚は青垣町山垣城主足立遠政公の曾孫にあたります。(1325年)

高源寺にはむかしばなしの中におさめられている「幽霊の片袖」という伝説があります。おはなしを紹介

介したいと思います。

江戸時代の中頃小倉の医者丹治一斎に多門という息子がおり、医者になるため京都の薬問屋紅屋植西定張の家に寄宿しました。定子という娘がおり恋仲になったのですが、修行が明けると多門は郷里に戻らなければならず、苦悩のうちに二人は別れ、定子は心の病でなくなってしまう。一方多門のところに定子が現れ、定子が幽霊とわかり、高源寺の和尚に拜んでもらうと定子が消えようとした時に片袖を掴むと袖だけ残して消えたそうです。それ以後、定子の父は高源寺の中に庵を建てて定子の霊を弔いました。またここにお墓もあります。

今でも「片袖」はあるそうですが、定子さんがみんなに見られたら悲しまれると思うので公開はされていません。住職のやさしい心づかいです。

青垣町に来られた時はぜひ訪れてください。  
(青垣町／元保育所職員)

## 丹波に暮らす

本間 速 (丹波市)



僕は平成2年の春に兵庫県にある市川町という町で生まれました。丹波市から車で1時間ほどの町で、丹波に負けず劣らず田舎な地域です。特に僕の実家がある谷には駅もなく、今でも最寄りのコンビニまでは車で10分以上かかってしまいます。

家業として代々米農家をやっていることもあり、田んぼの真ん中にある家で育ちました。そのせいか、今でも田んぼがそばに無ければ落ち着かないという困った特徴を持っています。

丹波へ移住したのは今から約7年前の春です。きっかけは高校卒業と同時に西山酒造場という酒蔵に就職させていただくことになったからです。「酒造りがしたい」という自分の夢を叶える形で、丹波へ移り住みました。

この話をするに必ず「どうして高校生で酒造りをやるうとおもったの？」と聞かれるのですが、ものすごく大きな理由というものは特にありませんでした。ただ、菌が好きで発酵に関わる仕事がしたいと思っていたこと。周囲の友人たちの日本酒に対するイメージが悪く、そのことに違和感を覚えていたこと。(僕は母が日本酒を上手に嗜む人ということもあって日本酒に対するイメージは悪くありませんでした。)そんな思いの中で、他人と同じことをしたくない性格の僕は高校2年生の冬のある日「酒造りがしたい。酒造りをしよう。」と夢を決意するに至りました。

しかし、その半年後に、夢を諦めようとしていた時期がありました。地酒低迷期だった当時、どこの馬の骨ともわからない自分に、酒蔵の働き口など見つからなかったためです。「仕方ない」と自分に言い聞かせていたある日、母が突然「お母さんの実家の近くに酒蔵があるから、一回電話したるわ」と言い始めました。僕はそれほど期待をしていなかったのですが、なんとその電話がきっかけとなりその酒蔵に面接していただけることになりました。



その酒蔵が、西山酒造場でした。当時は社員の募集などかけておらず、ましてや新卒の社員など何年もとつていないような状況でしたが、母の熱意を感じてか、いきなり面接をしていただけのことになりました。夢のようだったので面接の時の記憶はおぼろげですが、社長と固い握手をし、その場で内定をいただいたことだけははっきりと覚えています。

ずいぶんと後にどうして電話してくれたのか母に尋ねると「あの時のあんたは死んだ魚みたいな目をしてたんや。あのまま諦めさせたら絶対にアカンと思った」と言ってくれました。本当に母には頭が上がりません。

もちろん、拾って頂いた西山社長にも。

それから高校を卒業後に、市島町にある母の実家で、祖母と一緒に暮らし始めました。初めての社会人、初めての実家以外での生活、初めての車の運転…と初めて尽くしで困惑しながらも、

蔵人として日本酒造りにかかわらせていただきました。その次の春、20歳になったときに初めて、自分でつくった「小鼓」の搾りたてを飲ませていただきました。心がしびれるほど美味しかったことを今でも鮮明に覚えています。

それから6年が経ち、26歳となった現在は酒造りの責任者である「杜氏」の「見習い」という肩書を頂戴し、丹波はもちろん、神戸・大阪・東京と、あちこちを駆け回らせていただいています。今は日本酒のづくりに関わることを少しでもお休みさせていただき、半分営業というような立場になっています。

というのも、社長から「これから先、もし杜氏になるとしても、どんな方が日本酒の販売に関わっておられ、酒屋さんがどんな風に販売し、お客様がどんな顔で愉しまれているのか、自分の目で見て、肌で感じてきなさい」と言って頂き、外に出て修行を積む機会をいただいたからです。

こうして外に出て、たくさんのお客様と接する中で、酒蔵の中の世界がいかに小さくて、狭いところだったかを知ることができています。

自分がこれまで造っていたお酒は、こんなにもたくさんの方が想いをもって売ってくださり、こんなにも多くのお客様を笑顔にしていたのか、と喜びを感じる。と同時に、この方々のためにも、もっといいお酒を造りお届けしていかねばと身の引き締まる思いを感じています。

この広い世界を知らなければ、きっと知らず知らずのうちに独りよがり、自分勝手なお酒造りをしてきたに違いないと背筋が寒くなる思いがします。

そういった意味でも、機会をいただけている社長には、やはり頭が上がりません。

そんな丹波での暮らしを振り返る中で、忘れられない記憶があります。一昨年の市島町での集中豪雨です。2014年8月16日のあの夜、僕は母の実家でもある前山の家にいました。体験したことのないような強い雨と風で、家が壊れるんじゃないかとビクビクすると同時に、雨と雷の轟音で全く寝ることができませんでした。

次の17日が出勤日だったということもあり、会社の

ことも心配でなりません。西山酒造場はその時の10年前にも浸水被害にあっていましたので、きつと大変なことになっているに違いないという思いがあったからです。

そして深夜の4時に我慢できず、会社に向かうことにしました。——が、車を少し走らせてみれば、家の目の前の川が氾濫。濁流が壁のようになっていました。あふれ出した濁流は隣のお家を飲み込んでいたことに、そこで初めて気づきました。(後で何うと1階は濁流にのまれており、2階に避難されていたとのことでした)

結局家に戻り、一睡もできぬまま雨の収まった7時ごろ、会社に向かうことにしました。会社までの道のりもひどい状況だったので、ついでみると、会社はまるで池に沈んでいるかのようになっていました。水が引かず、近くへさえ近寄ることができない、そんな状況でした。

最大で130cmが浸かり、資材や商品が水に浮かんでいました。何もかもがむちゃくちゃで、その時は何が起きたのかさえよくわかりませんでした。

社員が続々と集まってくると、やはり何とかしなればと思うもので、社長の指揮のもと、泥かきを行いました。地域の方や、ボランティアの方のやさしさに心を打たれ、また助けていただきました。また、その状況を一人でも多くの方に伝えなければとほぼ毎日SNSを通じて発信し続けました。事情の分からないお客様や関係者の方に少しでも届いてほしいと必死に更新し続けました。泥をかき続けた1か月の間、気づけば延べ2000名にも及ぶ方がボランティアに駆けつけてくださり、本当に本当に助けていただきました。また、あの時にボランティアの方が言ってくれた「また小鼓が飲めるの、待つてるからね!」の言葉は今でも忘れることができません。あの方にもお酒は届いたのだろうか、と度々思い返します。

丹波に移り住んだこの7年間は本当に濃厚で、密度が濃い日々だったなと感じます。今は学生時代の何倍も、挑戦に溢れていて、やりがいのある毎日を過ごすことができています。

やはり仕事ですので、時にはしんどいことだってあ



りますが、それでもその度に、僕はこの丹波が好きで、小鼓というお酒が好きなんだと改めて感じています。

有機の里、市島で育まれた湧水で醸される、文人に愛された丹波美酒「小鼓」。創業167年の歴史ある会社の、次の歴史をつくっていくのも自分たちなんだと思うと、まだまだ挑戦を続けていかなければと感じるばかりです。

日本酒にまたブームが来ているといわれる今日、もしよければ故郷のお酒・小鼓を愉しんでみてくださいませ。

東京でも百貨店での試飲会や飲食店でのイベントなどをもちとやっていければと思っています。ぜひどこかで見かけた際には、声を掛けて頂ければ幸いです。

東京では田んぼが無くて落ち着かず、少し辟易しているかもしれませんが(笑)

(1990年生、市川町/杜氏見習い)

## 丹波の山と農地について

竹村 公 作（春日町）

私は、パブリック・キッチンと言うグループに少しかかわっています。丹波で有機無農薬の野菜を作り、大阪の船場と東京の吉祥寺でその野菜を使ってカフェレストランをしている若者たちのグループです。

まず、私が彼らと関わりたいきさつからお話しします。

私は、丹波市の工務店に三十余年勤めました。もともと公共工事を主体とした地方のゼネコンですが、平成に入った頃、私がかかわって木造住宅を専門とする部門を立ち上げました。その当時、建築用木材といえどほとんど外材か外材で作った集成材でした。周囲を山で囲まれ、杉や桧が沢山ある丹波に住みながら外材で住宅を建てることに疑問を感じつつも、価格のな面から外材を使った住宅を建てていました。しかし、丹波の木材で住宅を造ることができないかと言うことは、



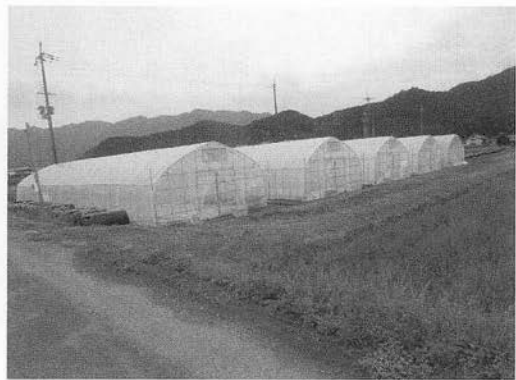
常に意識しておりました。終戦後に植林された杉や桧は五十年から六十年経ち、柱や梁が十分取れる大きさに育っていました。が、その頃の国の林業に対する考えは、「切り捨て間伐」と言い、密生している木の間伐をしてそのまま山に切り倒して腐らせる方針で、それに補助金を出していました。だから、ちゃんと山の管理をしようという志のある山の持ち主ですら、補助金を貰うために切り捨て間伐をし、山から木を切り出して木材として利用するということがありませんでした。私は、何とか丹波の木材を利用して建築をしたいと考えましたが、切った木材を持ち出す方法がありませんし、そういう作業をする人がいません。木を里まで持ち出すルート山の山の持ち主がわからないのではどうにもなりません。その結果、無理して持ち出せば木材の価格がかなり高くなります。今

もその状況はほとんど変わりません。我々は一旦、林業という産業を捨ててしまったのです。

私は、十年ほど前に会社から独立して建築事務所を開業しました。その時、国道一七五号線沿いに取得した私の土地に十坪の小屋を建てました。木材コーディネーターとしてNPO法人を立ち上げて活動している友人の能口秀一君にお願ひして、杉や桧の間伐材を出してきてもらって建てたもので、特に何に使う予定もなく、間伐材だけでもこんなものが建てられますよと、見せたかったのです。

そんな折、パブリック・キッチンを立ち上げた彼らが間伐材で建てた小屋を使わせてほしいと訪ねてきました。それから彼らとの付き合いが始まったのです。

以前から私は、山だけでなくこの先、丹波の農地がどうなるのか気になっていました。農地を農業として活用している年齢層が六十歳代後半から七十歳代、八十歳代であることに不安を持っていましたが、具体的に動く手立てがなかったのです。しかし、彼らを知ることにより、彼らと一緒に何かできるかもしれないと考え始めたのです。ある時、彼らが貸主の都合により



ら、水上の水田が農業を使用すれば、その水が下の農地に流れ込むから、水田用の用水は無農薬野菜のハウスの水として利用できないというのです。この地域では、これまで農業につき込まれた補助金は、水稲にしか使いにくい農地へ改造するための農業土木工事の費用に使われてしまいました。だからその農地で他の作物はつくりにくいのです。

幸い私の家には井戸があります。生活は水道水を

ビニールハウスを借りられなくなり困っているのを知り、ビニールハウスを建てることにしました。休耕田を借りて建てようとしたが、米を作るために圃場整備した農地にはビニールハウスを建てても駄目だと彼らは言うのです。なぜな



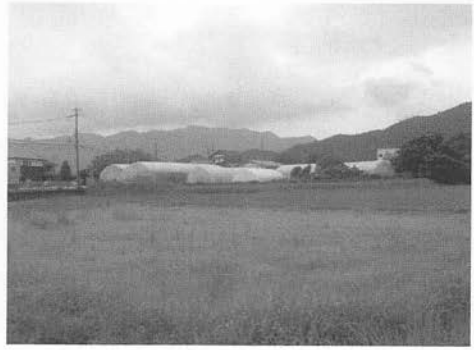
使っているので井戸水は使用していません。この井戸水を使うことにしました。こうして私のわずかな畑と隣接の畑を借りて六棟のハウスを建てました。渇水期には我が家の井戸水だけでは足りなくなるので近所の井戸も借りて賄います。現在、私の家はこの写真のようになビニールハウスに埋まっています。その後、他の場所も入れて十二棟できました。

彼らにかかわって初めて知ったことが多くあります。しかし、まだまだ私は本当の苦勞を分かっていないと思います。野菜作りも林業と一緒に、それで若者が生活していくのは大変です。マスコミ等で成功した人たちの紹介がありますが、多分ほんの一部でしょう。生活できるだけの収入を、野菜作りで安定して確保することがいかに大変なことか。それを実感しながらも必死で頑張っている彼らを見ると、私はじつとして、いられません。彼らのような若者が農業を仕事として生活できる仕組みが出来るのかどうかやってみなければわかりません。とにかく手探りです。しかし、作り上げていかなければ、丹波に若者が来ても定着しないと考えます。丹波にある資源は良質な山と農地のはず

です。それをきちんと利用する仕組みを作らずに丹波地域の活性化、若者の定着をいくら叫んでも絵空事に終わるでしょう。

丹波地域の有機農業をしているグループが丹波市内の学校給食に有機野菜を使ってもらおうとしても、今の学校給食の調理基準では手間がかかりすぎて使えないと断られるそうです。価格面のリスクもありますが、地元で出来た季節を感じることで有機野菜を使うことができない調理基準って、何なのだろうと考えてしまいます。学校給食は結局手間のかからない冷凍食材になっちゃうのでしょうか。

それから、もう一つ私が気になっていること。我々団塊の世代以上の高齢者は生活の安定した人が多いですが、その方たちが余暇で丁寧に作られた野菜は当然おいしく、価値の高い野菜です。ほんの小遣いになればいいという気持ちから、その野菜を半値以下の価格で市場に出されることもあるでしょう。若い世代が生活をかけて一生懸命作った野菜と、高齢者の作られたおいしくて安価な野菜と並んでしまったらどうなるのでしょうか。ただ楽しみで作ったおいしい新鮮な野菜を



手輕に他の人にも食べていただきたいと言う、善意の気持ちの行動が、結果として若者たちの生活と夢をかけた農業に対する思いを砕くことになりかねないので、価値あるものは高くても価値にふさわしい価格で販売する、そうでないと価値は維持できません。やはり我々団塊の世代が企業戦士として、農業や林業よりも稼ぐ高率の良い工業を優先して、農業と林業の事を真剣に考えてこなかった。この事実を認識して農業と林業で生きていける方法を模索していかなければならないことだと思えます。我々の世代に課された宿題かもしれません。

「山手」四十六号を読ませていただきました。足立忠司君の「私の仕事」が目に残りました。彼とは同級生です。彼は野上野地区で私は多田地区、同じ春

日町です。なつかしく思い出しながら読んでみると、ロボットのことが書いてありました。彼の宇宙ロボットの技術を農業に使ってほしいと強く感じました。農作業は重労働です。今の農作業の方法を続けて行けばいくら若くても体力がもちません。ITやロボットを利用して効率を上げていくことが必要です。宇宙ロボットを使うほどのお金はかけられませんが、宇宙ロボットの知識を持った人がその目で農作業を見れば安価で利用できるものが作れるかもしれないし、温室の水や温度と湿度の調節をする装置も簡単に安価にできるかもしれません。たとえばルンバというお掃除ロボットがあります、水に浮くような軽いルンバ様のロボットを作って田んぼを這い回らせたなら除草に役立つのではないかとか……？ このアイデアを農機具メーカーに……？ 丹波市や地元の家を巻き込んで……と、あれこれ自分でも「バカなことを！」と思いつつ丹波に生きております。しかし過疎化は着実に進んでおります。

（昭和24年生、50年から丹波市内の建設会社に勤務、平成20年丹波で建築事務所開設）

## 「丹波と能」

上田 脩（春日町）



東京で三十数年の生活を終え、丹波にUターンして十四年が経過しました。

その後、平成二十二年十一月発行本紙「山ざる」第四十一号の特集／丹波Uターン生活に寄稿しました。その中で述べておりますが、私の趣味は能（謡曲）です。それを知っている在京の友から「丹波と能」について寄稿したら……との話しをいただきました。知識も未熟で拙い文章しか書けませんかどうかお読み下さい。

先ず「能の魅力」です。

\*「能には汚いものは何もない」

これは、喜多流の十五世宗家、喜多実のことばです。

\*「この混沌とした時代にあつて、能ほど清々しく強く美しいものは他に知らない」

これはある女性作家のことばです。

\*現在使われています能の台本（謡曲）、衣装、面（おもて）は全て七百年前と同じです。次の百年先、それ以上もずつと同じ伝統が引き継がれていくでしょう。これが「能の魅力です」

### 「猿楽の時代」

能を大成したのは室町時代の観阿弥、世阿弥親子です。能の前身は猿楽であり、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、大和・近江・丹波・加賀・若狭・摂津・山城・伊勢をはじめ諸国に複数の猿楽座が存在し、多くは有力な寺社と結びついた形で神事や仏事には必ずと言っていいほど猿楽が演じられていました。

猿楽芸団は各地に多くありましたが、丹波猿楽諸座の歴史はその中でもとりわけ古い座でした。当時の丹波猿楽諸座は、矢田猿楽座（現・亀岡市）、梅若（現・綾部市）、日吉座（北条田群）等がありました。

中央に進出する事はあまりありませんでしたが、丹波猿楽で忘れてはならない座に「八子太夫」があります。「八子太夫」は丹波水上郡和田村（現山南町和田）に住み、付近の氷上郡山東・野村の春日大明神、氷上

郡山西・小新屋の阿歩大明神、新郷村の一の宮大明神  
和田村の狭宮神社、三原村の内尾大明神、柏原村の八  
幡神社の神事猿樂を務めていた事は大正時代に上梓さ  
れた「丹波誌」にも記載されています。

又、丹波史年表によると「一一九二年・神池寺にて  
猿樂」とあります。

### 「能の発生と発展時代」

能は、その発生期にあつては、神社の祭礼や寺院の  
佛会の余興として存在していました。そして、それを  
支配する僧侶によつて育まれていました。能の発展の  
基礎を築く上で、僧侶が保護者として果たした役割は  
高く評価されなければなりません。

丹波における能もやはり社寺を中心に根付いてきま  
した。丹波史年表によりますと、「一六一三年に和田  
狭宮神社に能楽殿が寄進される」「一六八二年に和田  
村八子太夫が狭宮神社にて勸進能を演ず」。水上郡誌  
には「柏原・八幡神社では年中行事として、八月十五  
日の祭礼に於いては毎年能楽奏進あり」「葛野村・内  
尾神社にて能楽奏進の古例あり」「沼貫村・奴々伎神  
社では神能の奏進あり」「野村・春日神社では文龜年

代に近隣十一カ村の立会い祭礼を行い、能楽の興業を  
なせり」等の記述があります。

能を完成したのは、観阿弥、世阿弥親子でありまし  
たが、これを保護し奨励し、完成を助けたのは、その  
当時の貴族のトップ、室町幕府の三代將軍足利義満が  
見初めた事から、武家社会との関係が密接になり、そ  
れ以後能はほぼ一貫して「武家の式楽」として、支配  
階級必須の教養となつていきました。

平成十五年にその歴史的価値を認められ、国の重要  
文化財に指定された「篠山春日神社能楽殿」は一八六  
一年当時の篠山藩主青山忠良公が境内に建立寄進され  
たもので、箱根より西では最も立派なものといわれま  
した。その能楽殿では毎年元旦に丹波猿樂に源を發す  
る「梅若万三郎家」が能「翁」を奉能されます。これ  
も歴史的必然性によるものとおもわれます。

### 「謡の普及」

能の台本であり歌詞である謡曲を、能から離れて朗  
読の形で謡い、情景を表現する、いわゆる「謡」が流  
行したのも観阿弥、世阿弥が能を大成した室町時代の  
後半からです。しかし、能が徳川幕府の式楽と定めら

れてからは、徳川幕府の政策は、能を武家の独占にし、民間で自由に演ずる事を禁じたので、能は江戸時代には全く民間芸術であることを失ってしまいました。しかし、「謡」はそうでなかったのです。室町時代から普及していた「謡」は、江戸時代になって出版活動が盛んになり、テキストである謡本が続々と刊行された事もあって、全国津々浦々に広まっていきました。

特に、丹波は都に近いという立地条件もあり幅広く普及していきました。夕方になりますと、どこからともなく伸びやかな謡の聲が響いてきたものであります。

## 「氷上郡（丹波市）謡曲同好会の結成」

戦後、やっと平和そのものが現実の姿となるに及んで、京都や大阪から一流の師匠を招いて本格的な稽古を進める会が丹波市内各地域に出来てきました。昭和三十九年、氷上郡内各町において謡曲と仕舞の稽古を進めつつ次第に進境を示してきた人達の中で、有志の発想が軸となって氷上郡一本の同好会を結成し、各グループの大同参加のもとに出演大会を開こうとの呼びかけに機が熟してきました。良い事は急げと、早くも第一回氷上郡謡曲・仕舞大会が柏原町の氷上郡公会堂

にて開催する事になりました。

毎年の大会を各社中輪番制に催し、丹波市、丹波市教育委員会、丹波県民局、丹波の森公苑等の後援を受け、次第に内容の充実と出演参加者の増加を見てまいりました。

そして、平成二十五年四月二十九日に五十周年記念大会を丹波の森公苑大ホールにて開催、世阿弥作「羽衣」を観世流能楽師により上演いたしました。

又、昨年春から能楽囃子方小鼓方の若手上田敦史さんが氷上町石生に移住されました。能とは歴史的に縁が深い丹波の地に於いて、より多くの人に能の魅力や醍醐味を伝えたいと活躍中であります。

〔能楽全書〕 東京創元社などを参考にしました)

(昭和18年生)



撮影・岡田昌子

# 丹波のまつり

## 春日町のまつり

高見 勘 逸（春日町）



一口に「まつり」といっても  
種々の様態があります。「祀る」  
の名詞化が本来の意味でありま  
すので、元々は神を祀ることや  
その儀式を示すことが本義ですが、古代日本の祭政  
一致の体制から政治のことも「政<sup>まつり</sup>」といえますし、  
地域を挙げて行われる行事全体のことや、祭祀に伴  
う行事だけを指して「祭り」といったり、各種イベ  
ントや催事を「○○まつり」と称しています。

### 春日地域の主なまつり

#### ① 祭礼

- ・春日神社、兵主神社のえびす祭（一月九・十日）
- ・阿陀岡神社の厄除大祭（二月十七・十八日）

・稻荷神社各社の初午（三  
月の午の日頃）

・兵主神社の夏越の大祓

（六月二六日）

・舟城神社の祇園祭（七月

七日）

・黒井の川裾祭（七月二十

三日）

・国領の水無月祭（七月三十一日）

・阿陀岡神社の八朔祭（八月三十一日）

・兵主神社、阿陀岡神社など各神社の秋祭り（十月

九日頃）など

#### ② イベント、催事

・野上野れんげ祭（五月三日） 野上野地区

・多利日ヶ奥溪谷祭（七月十七日）

日ヶ奥キャンプ場

・柚津ひまわり祭（七月三十一日）

ひまわり遊柚農園

・船城ふるさとまつり（八月十四日）

船城小学校



舟城神社祇園祭（茅くぐり）  
丹波新聞（平成 28.7.14）より

# 丹波のまつり

・春日ふるさと夏祭り(復活八月二十六日)

春日総合グラウンド

・春日文化祭(十一月三日) 春日住民センター

・黒井城まつり(十一月十二日)

黒井小学校、黒井城跡

・大路アグリフェスタ(十一月十三日)

春日総合グラウンド

※( )内は今年の予定月日又は実施月日です。

## 春日地域の神社

### 【黒井地区】

兵主神社(式内社)、(黒井)、猿田彦神社(黒井)、

稲荷神社(黒井)、天満神社(黒井)、春日神社(野

村)、天満神社(野村)、八幡

神社(平松)、須賀神社(古河)

大歳神社(稲塚)

### 【春日部地区】

阿陀岡神社(式内社)(多利)、

小富士神社(小多利)、鴨神

社(池尾)、賀茂神社(多田)、

加茂神社(七日市)、熊野神



野村 春日神社

社(野上野)

### 【大路地区】

八田神社(中山)、大原神社

(広瀬)、天満神社(松森)、

一の宮神社(栢野)、熊野神

社(野瀬)、美登内神社(上

三井庄)、於久雲神社(上三

井庄)、一宮神社(下三井庄)、大武神社(鹿場)

### 【国領地区】

八幡神社(東中)、岩戸神社(国領)、天満神社(棚

原)

### 【船城地区】

天満神社(朝日)、聖神社(石才)、船城神社(歌道

谷)、安宅神社(坂)、熊野神社(野山)、舟城神社(長

王)、楯縫神社(式内社)(長王)、愛宕神社(新才)、

加茂神社(牛河内)、若宮神社(山田)

※1式内社とは延喜式神名帳に記載された神社

※2「春日町誌第一巻」、「記紀神話にみる氷上郡の

神々」参照

春日地域には以上三十七の氏神・産土神が祀られ



下三井庄 一宮神社



ていますが、現在宮司在位の神社は、兵主神社（村上勝一氏）、阿陀岡神社（藤田警司氏）、舟城神社（村山義人氏）の三社のみで、他の神社はこの三人の宮司の兼務となっています。

宮々で伝承されていた神事は、時勢の移り代わりと共に消滅したり、省略、簡素化されたものが多くなりました。かつて集落の神事として存在した「お当」の受け渡しもほとんど廃止されました。特に最大の年中行事である秋の例祭神事も祭日を祝日や日曜日に変更したり、若者が担いで渡御していた神輿も担ぎ手不足で台車に載せて引き歩くようになったり、祭礼の日を体育、レクレーション行事にあて、集落で楽しむ行事に変わっている所もあります。

しかし、日本人の心として、産土神への郷愁の念、氏神さんの護持、伝統保存の精神を持ち続けたい思いです。

春日地域のまつりについては宮司様や寄稿者にお譲りし、ここではお祭りの実例として我が集落の多利区の祭事と盆踊りの思い出を述べさせていただきます。

## お日待神事

春日町多利では「日待講」という行事があります。二〇〇戸弱の集落を「日待講」を催行する組として北、中、南に三分割し、「北日待」などと称してある程度の自治を持つ地区としています。

南日待では、毎年立春前後の二月第一土曜日午後六時から「日待講」を執り行います。大正八年の記録によると当時は「南日待天神講」と称し、三月と十月の二回実施し、天満宮崇敬の神事だったようです。

当日は、南日待七三戸が相集い、集会所に祭壇を設置し、宮司による神事祭典の後、総会、懇親会（直会）と進行します。現在は約三時間で終了しますが、かつては文字通り翌日の日の出まで行い、早朝参宮して閉会だったと聞いています。

宴たけなわの午後八時四五分になりますと、「お当渡し」の行事が行われます。「お当渡し」とは、神事の当番の交代を行う儀式のことで、「おとうぶんさん（祭具、掛軸、お当帳などを収めた桐箱）」を次当に渡します。会場の中央に座卓を置き、正面

# 丹波のまつり



かぎを供える山の神

に宮司、両側に当番組と次期当番組が対面します。伊勢音頭を全員で囃す中、宮司の発声で、次当が今期当番にお礼の献酒、当番から次当に「お当」引継ぎの献酒をし、その後次代表が宮司から「お当」を授かり、次当は退出します。受け取り後は決して振返ってはいけないといわれています。「お当」は一年間当番宅を巡回してお守り続けます。

### 山の神祭

春日地域の県立自然公園日ヶ奥溪谷の雌滝上部の岩塊の上に、山の神様をお祭りする鳥居と小さなお社があります。

多利集落の山の神は女神で、木花咲耶姫（このはなさくやひめ）あだかあしつひめのみこと）を祀っています。この神は下流の阿陀岡神社の祭神でもあります。春先には里に降り田の神となり、秋の収穫が終わると山に帰って山の神になるといわれて

います。

お祭りは七月九日と一月九日でしたが、現在は一月九日のみとなっています。当日は朝八時から阿陀岡神社宮司が祭祀を執り行い、自治会長以下の役員や林務部委員、農会長、水利組合役員の他一般の村の人達も参拝します。神事後、お神酒を戴き、スルメや煮干の酒肴で直会となります。

昔は、この日に勝手に山に入ると災難が起こり、女神は嫉妬深く、女性が祭りに参加することを嫌い、男が浮気をするとう山の神が怒るといわれています。

神域には、雑木で作った手かぎが掛けてありますが、参拝する時、木で作った「かぎ」をお供えすると、山で遭難しそうになった時、山の神がこのかぎで引つ掛けて助けてくれるという民族信仰があります。

### 盆踊り

盆に招かれてくる精霊を慰め、送るために始まったといわれていますが、現在盆踊りは数少なくなってきました。春日地域では、お盆の期間中や二十四

日盆、地域の夏祭りなどで、広場や社寺の境内にやぐらを組み、前座は子供たちが踊り、その後、春日おどり保存会の三味線、太鼓、尺八で囃し、黒井音頭や祭文音頭を老若男女相集って踊り楽しめます。阿陀岡神社の八朔祭の盆踊りが最も盛大のようです。

子供の頃は娯楽に乏しく、夏の唯一の楽しみであり社交の場でした。お盆（八・一五）、観音祭（八・一七）、地藏盆（八・二四）と踊り、さらに小多利柏野の大師祭（八・二二）や遠く市島町神池寺の二十六夜さん（八・二六）、野上野、多田などの他集落にも行き踊っていました。盆踊りの締めくくりが阿陀岡神社の八朔祭（八・三一）で、正に連日連夜盆踊りが続いていました。

（昭和20年生。兵庫県各地の高校教員を歴任。春日部郵便局長他、自治協議会長歴任後、現在 阿陀岡神社 責任役員）

## 延喜式内 あだおかじんじや 阿陀岡神社（元縣社）

宮司 藤 田 馨 司（春日町）

御祭神

主神 あだかあしつひめのみこと 吾田鹿葦津姫命（木花咲耶姫命）

相殿 品陀別命（八幡大神）

相殿 菅原道真公（天満大神）

御由緒



創立年代は不詳なれど地方の古社にして延喜の制小社に列し、延喜式神名帳（西暦九〇五年）に当社の社名、鎮座地が所載されている。

社伝にいう欽明天皇即位三年三月（西暦五四二年）春日部乙身勅命により幣物を捧げた後、慶雲の起こるによりて、この地に遷し、敏達天皇の皇子社頭に賽す。或いは口伝えに日ヶ奥のアダカ山にありしを洪水が起こり、この地の巨岩に留まり事なきを得て現在地に祀ったといわれている。

明応元年八月（西暦一四九二年）社殿を再建せし

# 丹波のまつり



阿陀岡神社 拝殿 本殿



本殿裏にある岩倉

(西暦一七四二年) 造営して同月十九日遷宮したが、現存する本殿である。

当時は、公郷武家の崇敬が厚く、岩倉具視は、自筆の神号額を納め、領主は高五斗の御供田を除地とした。

寛政四年(西暦一七九二年) 当村字東山一七一番地内より八幡宮を合祀する。

明治四十二年同村多利字東山より天満宮社を合祀する。

明治六年十月村社に列し、昭和三年十一月縣社に昇格する。

## 御祭神

主祭神は、吾田鹿葦津姫命又の名を木花咲耶姫命

も、元文四年七月(西暦一七三九年) 八朔祭の松明の火で炎上、寛保二年九月

と申し、天孫降臨瓊々杵尊の妃でお姿が美しく、女の業何一つ出来ぬ事はなく、婦女子の鏡と仰がれるお方で、火照命(海幸彦) 火遠理命(山幸彦) の母君で火中で安産されたことから、安産の守護神として遠近の信仰を集めている。

相殿神は、八幡大神、天満大神で福德開運、厄除、交通安全、学問の神としてあがめられている。

## 阿陀岡神社 八朔祭について

八朔とは、八月一日のことで、当社の八朔祭は、一カ月遅れの九月一日の前日に宵宮として八月三十一日午後六時からお祭りを行います。五穀豊穡、安産祈願を行い、松明を奉納しております。この松明の奉納は、古くから行われており、記録によると元文四年七月(西暦一七三九年) 今から二百七十七年前に松明の火で社殿が炎上したとあり、当時は社殿の前に三基松明を立て、お祭りをしたとあります。

その三年後寛保二年九月に造営し、現存の本殿は、当時再建されたものです。

現在の大松明は氏子が奉納し、参道の松明台の上に置き、その大きさは、三段積の大きなもので、一



番下は長さ一米八十糎、太さは、回りの上、一米二十糎、下一米五糎、回りを青竹で包み、注連縄を張る、その上に長さ六十糎の中松明を置き、さらに、その上に四十五糎の小松明を置く(写真通り)。

宵宮の祭典中に宮司が御殿内にて小松明に火を移し、これを当番長が参道の松明台まで運び、中松明の上まで持ち上がり置く、火は次第に中松明、大松明に移り、約三時間かけて燃え尽くす。この大松明は、御祭神が、天孫瓊々杵尊に誓いを立てて産室に籠り、火中にて御子を生まれられし由緒により奉納して、御祭神を和めいていると同時に、農作物に害をもたらず害虫が夏夜空に大きな炎を上げる松明の火に寄り、害虫駆除の一役をも担っている。夜松明の燃える間、舞堂にて、鏡割りを行い、参拝者に神酒を振る舞う、又本殿前の広場では子供会、氏子による盆踊り大会が盛大におこなわれ、参道には、露天商が軒を並べて、多くの参拝者で賑わい、夜遅くまで、賑々しいお祭りが行われる。

## 秋祭り

十月体育の日の前日の日曜日に行う。

秋の豊作を感謝するお祭りで神輿一基が氏子の若者五十数名揃いのハツピ姿で担いで、子供神輿は子供会の二十数名により、引っ



張って巡行し、参加する人数は宮司、神社役員、交通安全委員、一般供奉者総勢百五十余名が行列をつくり、神社を十二時出発、村中を回り、途中御旅所で、お祭りを行い、午後五時ころ神社に宮入りする。宮入後は、境内で餅まきが行われ、大勢の参拝者で賑わいます。

あと五時半ころから祭りに参加した、百名余りで直会が行われ夜遅くまで賑わう。

## 厄除大祭

毎年二月十七日十八日の両日に行う。

厄除祈願をする方で祈祷を受けられる方が行列される、また十八日には、今年の五穀豊穰を祈る祈年祭がおこなわれ、多くの参拝者、厄年の方も参拝して

行う。大勢の参拝者で賑わう境内には、露天商が立並び、又舞堂では、参拝者全員に神饌のセンベイと福引があり、氏子役員によるうどん屋、おでん、お酒の店が開店、満員の盛況で、十七日は夜遅くまで参拝者があり、二日間で約二千名余りの参拝者で賑わう。

(昭和5年春日町生、昭和51年阿陀岡神社宮司に就任。春日町議会議員一期奉職、神職分浄階一級を授く。現在に至る。)

## 阿陀岡神社祭礼の思い出

浮田 信子(浜松市)



と言えます。

春日を代表する歴史深き阿陀岡神社は、長い長い参道の奥、鎮守の森に囲まれ多くの人々の幸せを見

春日は四方を山に囲まれ、四季折々の田園風景は風物詩を醸し出し移り変わりの楽しさ、豊かさ、大自然の恩恵深き土地柄

守り続け、現代人の心に豊かさを今尚お与え下さっておりです。感謝の気持ちをお忘れてはなりません。杜の近くに竹田川が流れておりその川に渡所橋わたせりばしと呼ばれる橋から川面を眺めれば色の異なる粘土がモザイク柄を表し夏にはこうぼねの花が首を長く長く伸ばし水面に咲き清らかさを強めてくれます。

四季の思い出として、春、枯草の土手にはすみれ、たんぽぽ、れんげ草、小川には小動物がきれいな水の中を泳ぎ、山の竹林では竹の子が首を出し、蕨がよっつきり木々の芽生えと共に自然の恵みを頂き、緑色増す頃、畦道で区切られた田に稲が植えられ日毎に背を伸ばす頃、山裾の小さな杜の周りでは長い間土の中の生活を終えた蟬が羽化する姿の美しさ、生命の尊さ、力強さを眺める事が出来ます。稲の穂が実り金色に変わる頃道端の桑の実が色づき、山中では、実った栗が地面にころげ落ち人々へ喜びを与え、落ち葉が風に舞い冬支度を始めます。白銀の世界も例えようのない美しさです。

時の流れと共に童謡、春の小川、村祭り等を口ずさんだ光景を目にする事は出来なくなりましたが、

私の春日の思い出は、童謡の田園風景をいつでも垣間見る事の出来る箱庭となつて心に存在しています。  
(昭和10年浜松市生。幼少期は、丹波・浜松市で過ごし、柏原高校卒後浜松に戻り、地方公務員として幼児教育に奉職後定年。現在に至る。)

## 兵主神社の秋祭り

河上 仁之(伊丹市)

(前兵主神社社祢宜)

兵主神社は、延喜式内社で創建は古いのですが、戦国時代の戦火・落雷や神仏混合などにより、神社には、例祭(秋祭り)などの文献はほとんど残っていませんので「丹波市文化財保護審議会会長」村上完二氏(春日町黒井在住)が兵主神社報「兵主だより」十四・



兵主神社

十七号に寄稿された原稿を参考にさせていただきました。  
まつりの主役

秋祭りは、兵主神社のご神霊が乗られるお神輿です。例祭の当日に神職が兵主の大神様のご神霊をお神輿に移します。お神輿に移された御霊は、年に一度氏子たちに担がれ(現在は台車)町をまわります。その道を御旅道と呼ばれ、また休まれる場所を御旅所と言ひ、道順は昔も今もかわりませぬ。  
ご巡行と太鼓

お神輿の渡御に合わせて、氏子たちは、色々な出し物を考え、太鼓の音を響かせ賑やかに



お神輿巡行前 猿田彦

囃しながら先導をし、ご神霊を喜ばせます。

先ず先頭には、高千穂に天孫降臨の時、猿田彦の神が道案内した故事にならい、きらびやかな衣装を着て、赤い顔に高い鼻の面を持つ猿田彦の神に扮した人が露払いを務めます。

次に「第一兵主大明神 天正十九年九月吉日西地



下中」と書かれた幟がこれに続きます。天正十九年  
と言えば、今から約四三〇年ほど前、黒井城が落城  
した直後のころで、秋祭りもすでにこの時代から行  
われていたことがわかります。

続いて社紋と町名を染め上げた幟と鉾がゆき、昔  
から定められた順にしたがつて、こども神輿、六台  
の太鼓台、最後にお神輿が巡行します。六台の太鼓  
台は、地元では「たいこ」と呼ばれ、屋根に千木を  
置き千鳥破風と唐破風を重ね二重の垂木をめぐらし  
た小さな社の形をし、中に太鼓をつるしています。  
おわりに

高齢化と人口の減少により秋祭りの太鼓台、お神  
輿の巡行が危ぶまれています。

護持とこの良き伝統が続くことを願うばかりです。  
(昭和19年春日町生、兵主神社祓宣就任後傍ら伊丹市  
教職を歴任。平成27年10月 兵主神社祓宣退任)

## 兵主神社のおまつり

鍋木 榮 (大田区)



春日町黒井をはなれてもう五  
十年たちました。今回黒井のま  
つりについてと問われた時にや  
はり想いだすのは兵主神社の秋  
まつりです。年に数回は帰省してはいますが、一度も  
まつり時に遭遇した事はなく……。高校三年生の秋  
まつりが最後になりました。

黒井町での秋一番の催しがこのまつりでした。宵  
宮、当日と子供心に楽しかった事をおぼえています。  
旧黒井の商店街を中心に部落ごとにもみこしがでて、  
みこしの上では大人にまじり可愛く衣装とお化粧を  
した小さな男の子供達が大人と一緒にかけ声をかけ  
ながらタイコをたたいていました。たまたまこの年  
は、隣のたかゆき君がタイコをたたいていましたの  
でカメラにおさめて、文化祭に展示した事をおぼえ  
ています。題材は、「みこしをかつぐ人」、「ぼく」



兵主神社

の二枚です。今想えばみこしがねり歩くのに黒井の町は一本道、平松・上ゲ町・横町・芝町・から奥野村迄、そして小山・本町・仲町・新町・杉の下とその一本道から上へのび、杉の下から横にのびて稲塚・古河・大野とみこしがねり歩くには最適な部落分けになっていました。宵宮の兵主神社に宮入する参道のみこし行列は、ちょうちんのあかりとワツシヨイ、ワツシヨイというかけ声とタイコの音のみ、回りは数軒の人家と田んぼと山、とても厳かな素晴らしい風情だった事を……。又まつりの御馳走といえば丹波産の松茸入りのすきやき、茶碗蒸し、巻寿司とこれもわが家の恒例行事といえるものでした。昔は、まぼろしの松茸をたらふく食べていました。今この田舎のまつりも人口が少なく、又若者が田舎をはなれて都会に出る人が多くこのにぎやかさはないだろうと思っています。

どんな風になっているのか、一度今年はこの時期

に帰省するのでもいいかなと思っています。あの時に可愛かったばくは自営業で社長を、二人の子供のお父さんです。時の流れと共に昔なつかしい思い出が失くなっていくという事は、本当に淋しいものです。今田舎にいる人達では非昔の伝統行事をと、思いますが無理な事なかもわかりません。でも私達は、一番いい時のまつりを知っているという事は、私にとっては一番の思い出です。

(昭和19年春日町生、柏原高校15回生。趣味社交ダンス)

## 黒井地域のまつり諸々

片山公造(春日町)

黒井城まつり

黒井に近づくと、舞鶴自動車道、黒井駅から町並みのすぐ北側にそびえる黒井城跡が目には



いります。

これこそ国史跡黒井城(別名、保月城)で、戦国

# 丹波のまつり



武者行列



黒井城跡（城山）

期からの  
史跡が残  
る「丹波  
が誇る中  
世戦国時  
代の巨大  
な山城」

で築城は南北朝時代。標高三五六メートル・城域は約一二〇ヘクタール・周囲一四〇キロの猪口山系全体が城跡、となっており城域に下館（現在の興禅寺）や七間掘りが含まれ、山中に曲輪跡・土塁等の防御施設が残っております。

旅行等で黒井に近づくと、山城がやさしく迎えてくれ、ホッと安堵感を覚えるのは、私一人ではないでしょう。

城主は荻野（赤井）悪右衛門直正。「丹波の赤鬼」と名を馳せ、甲斐武田家の軍学書の「甲陽軍鑑」に「名高い大將衆」当代の四大将に北条氏康公・武田信玄公・上杉謙信公・織田信長公、つぎの大將十三人の筆頭には赤井悪右衛門が記されており、又、高

野山に行けば、武田信玄公の横に赤井悪右衛門の墓がありますが、何らかの偉大な関係があったと推測されます。

この巨大な要塞を持った黒井城も織田軍明智光秀による三度目の攻撃により落城していますが戦国の面影を今に伝えていきます。今、竹田城跡が脚光を浴びていますが、黒井城跡も勝るとも劣らないと初めて来訪された方は絶唱されています。特に、山頂からの眺めはすばらしく、又、冬に向かう時期の風物詩「雲海」は格別です。

国指定史跡を記念して翌年度から「黒井城まつり」を毎年十一月第二土曜日に開催されています。当日は、黒井城登山・手作り甲冑の武者行列・春日戦国太鼓の演奏・川柳大会・黒井小学校児童による学習発表会・戦国汁の振る舞い等盛りだくさんで、盛大に開催されています。

なお、本年度春には城跡が町よりよく見えるように雑木等を伐採整備され、より一層戦国の山城の姿をみせていきます。

私が、過去川柳大会に出品したつたない作品をご

披露し黒井城まつりのご案内とします。

題「まつり」 戦国汁 情も溶ける 城まつり

題「矢」 悪右衛門 矢文に託し 弓を引く

題「山」 山頂で 望む城砦 ロマン呼ぶ

### 春日局

春日局は幼名を「お福」といい徳川家光の乳母で、大奥をつくり上げ支配した人であること、又、NHKの大河ドラマでもご存知と思いますが、黒井城が落城し、この戦後処理と統治の為に黒井城に入部したのが明智光秀の重臣で名将と謳われていた「斉藤内蔵助利三」です。お福の父親である利三は黒井城の下館（現興禅寺）を陣屋と定め、この地の治安維持にあたり平和が訪ずれました。しかし天正十年になると亀山城に移り、「利三」は、六月に主君・光秀と共に本能寺の変に加わって織田信長を攻め亡したが、山崎の戦いで破れ「利三」は磔刑されました。四歳の「お福」は戦争の悲惨さを見、辛い体験をしたと思います。勝ち負けというのは善悪ではなく時の運もあり、戦争に弄ばれてどん底から這いあがって最後に道をつかんだ人と思います。



興禅寺

春日局をひどい女だったとか、気が強い女だったとか言われますが、徳川家康が見込んで乳母として信頼したと覚えていません。もし、春日局がそんな嫌な女であれば、「家康」ほどの人間が見抜けないはずがないと思うのです。動

乱の世をたくましく生きた「春日局」、その生涯は、愛と献身に貫かれた女性だったと思います。「お福」を通して戦争の悲惨さと平和の尊さは、今に通じるものと思うのです。

### 黒井の川裾祭

水無月祭というところもありますが、黒井では川裾祭といい、七月二十八日夜に、駅前通りの黒井川畔で行われます。この祭りは、水の恵みをもたらす川裾大明神に感謝する祭り。旧暦の「夏越の祓」として神事例祭となったもので、又女性の下の病気にかからないようにと、下の病を川に流して健康でありますようにと祈る祭りともいわれています。

## 丹波のまつり



秋祭り

以前は、七月二十八日に朝から橋の中ほどに祭壇を設け、兵主神社宮司の司祭で神事を行っていたが、現在は、勤め人の都合から、開催日は固定しておりません。(今年七月二十三日(土)々)

当夜は、地元上ヶ町自治会では、川裾祭に協賛して文化祭、灯籠流し、露店や福引き等がありにぎやかに繰り広げられます。

### 黒井の秋祭り

黒井の兵主神社の大祭は、黒井はもちろん当地方でも最も盛大なもので、十月十六・十七日に行われてきましたが、現在では九日が宵宮、十日が本祭りとなっております。

神輿と六基の太鼓みこし・子供みこしが連れだつて町内を練る様子は圧巻です。祭りの一週間程前になると、他の神社でも行われるように各所に大幡が建てられ又、乗り子の太鼓の練習の音が聞かれ、宵宮の夕方までに各町の太鼓みこしは清掃され、飾り

付けをして、七時に横町に集まり町内を一巡します。宵宮は太鼓みこし六基が、九時過ぎまで練り歩きお宮の参道に献灯が飾られた明かりと、みこしの明かりで宮入る様子は、すばらしいものです。

最近では各地域で色々な催しが開催され、昔より見学者が減少したとはいえ、黒井の秋祭りとして今でもにぎやかです。太鼓みこしの乗り子は、小学校児童四人、みこしの四隅の柱に身体を縛りつけ・中央に吊るした太鼓を担ぎ手の掛け声に合わせて桐のブチでズンデンドウ・ズンデンドウ、ア、ヨイヤセ・ソウリヤ・ヨイサツツセと声を合わせて、太鼓を勇ましく打ちます。十日の本祭は、太鼓みこしの装いを替えて、兵主神社を出発します。先導は、天狗で以前から上ヶ町だけの持ち回り、又、一番幡も上ヶ町で十條余りの各町名入りの大幡、鉾を持つ人々、子供みこし、つづいて太鼓みこし六基、兵主社の神霊を移した神輿が神官や供奉の人々を従えて、黒井の町を一巡し、五時過ぎに宮入りして秋祭りが終わります。太鼓みこしは、江戸時代につくられた見事なものです。神輿・太鼓みこし等は肩に担いで

練っていたものですが、これも若い衆の減少等により台車に載せて曳くようになりました。乗り子も、男子と決められていましたが、乗り子が減少し、やむなく女子も乗り子で頑張っています。

宵宮から本祭りにかけて、各戸に氏子の氏と紋の入った大きい提灯を吊るします。黒井の町並みでは伝統あるこの献灯がいまでも受け継がれています。

(昭和18年、春日町生。柏原高校14回生。丹波各地の郵便局に勤務後、自治体の役職を歴任し、現在に至る)

## 国領のまつり今昔

葦原 孝 義 (春日町)



昔は国料と称していたという。多紀郡(現篠山市)から福知山に通ずる街道(旧大阪街道)にあたり、かつては宿駅として繁

栄した時代もあったようである。県道黒井草山(現栗柄)線が通り、なかでも村役場等の公共施設が置

かれていた中心の国領は商業も発達し商店が軒を連ねていた。しかし、町村合併そして丹波市へと行政が移行されたり、大型の商業施設が次々と進出するにつれて廃業する商店が増え、今日では数軒の商店が細々と営業を続けている有様である。

国領は明治時代には国領・東中・柚津・棚原の四部落を合して国領村(現在は丹波市春日町)になり、それぞれが字部落名となっている。

各部落には神社が祀られている。国領には「岩戸神社」があり、明治六年十月に村社となり今日に至る。東中には「八幡神社」があり、大永六年八月、領主赤井刑部の心願により宇佐八幡宮の分霊を三尾山城中に勧請したことにはじまる。天正七年三尾山城が明智光秀によつて落城。慶長六年三月現在の地に社殿を造り八幡宮と称して今日に至る。棚原には「天満神社」があり、慶長八年に建立され明治六年十月村社となる。

これらの村社は往時はそれぞれに秋を中心に祭祀を実施し、奉納芝居や神輿巡行など村人総出のにぎわいを見せていたが、高齢化や若年者の都市部流出、

## 丹波のまつり



福知山から大阪に向かう道巡礼橋

あるいは車社会の到来で人の流れが変わるにつれて、地域社会の人と人とのつながりが薄れ、村祭りも変容していかざるを得なくなった。現在ではそれぞれの自治会などが中心となって神輿の巡行（子ども神輿のみ）にしているところもあり）を実施するなど大きく様変わりしてきた。

また国領では、以前は旧大阪街道途中の巡礼橋（写真参照）を中心に毎年七月三十一日に水無月祭が催され近在の人びとが多数お参り見物に押し寄せた。八月二十一日には国領商店街の中にある流泉寺境内を中心に大師祭が開かれ、真夏の一大行事となっていた。水無月祭・大師祭ともに露天商も数多く出店し、さらに町内会が五力所に造り物を披露して御互いがアイデアを競い合うなどして見物客を楽しませた。両祭とも人びとの娯楽の変容や商店の衰退とともに、かつてのにぎわいを失い、現在では国領自治会役員が中心となって灯籠流しや花火打上げなどを

中心にした水無月祭を七月三十一日に実施しているのみである。

旧大阪街道のかつてのにぎわいを示すものとしては、江戸時代の文人（作家）上田秋成の『秋山記』と題する次のような文章が参考となる。

〔略〕福知山の宿のむつかしげさに、いぎたなき朝出しつれば、けさおく霜はわきて身にしみて見るよしみの竹田といふ郷は、家づくりの誠によしめきたるに、都とほからず思ゆるは（略）右手の山にそひて、煙のたつが賑わしく見ゆるをととへば、氷上の黒井といふこの聞ゆる郷は、おや祖父達の住み給ひし故郷とかねて聞きしものから、斯る序におつて尋ねゆかましを、母刀自のいかに侍佗びたまふらんとおもひ棄て、こくりやうの坂道にかかる、丹波の国にはふたつなき高嶺といふ、（後略）

上田秋成は大阪堂島の紙油商嶋屋、上田茂助の養子となる人で、雨月物語などの著述がある。この上田氏は、氷上の黒井（現春日町黒井）の出身という。

（一 筆者）

このように国領は江戸時代から明治時代にかけて



人の往来も多かったと思われ、巡礼橋や道標などが往時を偲ぶ縁よすがとなっている。

少子高齢化の波は国領にもみられ、若年層の都市流出や車社会の発達で、文化とともに衰退の一途で、かつてのにぎわいをとり戻すのは別としても、国領の今昔をみるにつけ、これからの地方の活性化は大きな課題となる。

(昭和20年春日町生、兵庫県立高校教員、県立宝塚東高校長在任中、兵庫県学校図書館協議会会長等歴任)

## 「まつり」について思うこと

吉住 春代(春日町)



柏原の厄除祭や氷上の愛宕祭りのような賑々しいお祭りがあることを知る由もなかった私の幼い頃の「まつり」といえば、

菩提寺で行われる八月二十四日の盆踊りや産土神社のささやかな秋祭りでした。でもそれらが何と待ち

遠しく、ワクワクする行事であったことか。盆踊りでは何日も前から母にせがんで姉のお下がりの浴衣を出してもらい、あと三つ寝たら、あと二つ寝たら……と文字通り指折り数えてその日を待ちました。露店は二つだけ。そこで買ってもらうセルロイドのお面や小さな葡萄の数房、それらが本当に嬉しかったものです。秋祭りの日は学校が半ドンでした。急いで帰宅し、お風呂に入って服を着替えます。明るいうちにお風呂に入るということも、この特別な日だけの贅沢です。ご馳走と言えば紅生姜が添えられた鯖寿司と祖母の自慢料理の胡麻豆腐。一口のご飯に分厚いネタが乗った近頃のお寿司とは違って、薄く切り落とした酢鯖が、酢飯の大きなおにぎりの上に乗っていました。大人を待ちきれず、近所の友達と先にお宮にお参りしてお神酒を沢山飲んでしまい、ふらふらになって兄妹に笑われたことも思い出します。

その頃のお神輿は勇壮でした。近年はどこでも神輿に車を付けて静々と曳くようですが、大勢の男の人たちが直接肩で担ぎ、部落中を行きつ、戻りつ巡

## 丹波のまつり

行ずるお神輿は本当に迫力がありました。

嫁ぎ先の大路地区中山部落のお神輿は太鼓神輿で、これに乗せてもらえる子供は一家の長男だけと決められており、夫の弟は乗せてもらえずに悔しい思いをしたそうです。

このように、私はごく狭い範囲のお祭りしか知りませんが、「まつり」というものの持つ意味はここ数十年の間に随分変わってきたような気がしています。幼い頃を感じたような高揚感はだんだんとしぼんで「まつり」は雑多な日常の中に埋もれてしまい、特別なものではなくなってきたように感じます。あの頃はハレの日にしか食べられなかったご馳走も、今ではそれ以上のものが毎日の食卓に乗り、お祭りよりも刺激的で面白い娯楽が身近に溢れている。世界中には住む家も今日の夕食にもありつけない人々が何億人もいるというのに、なんとという恵まれた境遇でしょうか。でも私は、このような状況に一抹の淋しさも感じるのです。

十年以上前になりますが、「正月が詰まらなくなつた」という趣旨の文章を読み、気になって保存して

いました。それには、(日本の正月は単に年が改まるのを祝うことではなく、新しい「年の神」を迎え、その年の豊作を祈願するものであった。正月ばかりでなく、お花見、端午の節句、お盆、秋祭りなど日本の伝統行事は、いずれも田の神とか祖先神という「神」抜きでは考えられないものであった。それがいつの頃からかこうした神々を捨ててしまつて、これら伝統行事は単なるレジャーになつてしまつた)とあります。一抹の淋しさを感じるのは、もしかしてそのへんに原因があるのかもしれない。

人類は科学技術を目覚ましく発展させ、宇宙空間に何か月も滞在したり、ヒトの細胞を初期化して、様々な臓器や器官を作製したりするまでになりました。しかし一方、地震や洪水、火山の噴火などの自然の脅威の前には対抗する術を持ちません。そもそも、我々人間を始めとする生命そのものを生み出した自然を超えられる訳はないのです。神、つまり自然を古来より敬い祀つてきた日本人の精神性を思い起こし、我々が神と共にある祭りを取り戻せたら……と思つたりするのです。

さーて、今年のお祭りにはスーパーで買ったたりしないで、鯖寿司をにぎり、胡麻豆腐を手作りして神様に感謝を捧げるとしましょうか。

(柏原高校22回卒、(株)吉住工務店 取締役)

## 熊野神社の村祭

富田貞子(鎌ヶ谷市)



「村の鎮守の神様の、今日は楽しい村祭り」の童謡そのままに、小さな集落(旧春日部村野上野)のほずれ、熊野神社に数日前から大きな幟が立ち、子供達が待ちわびた祭の朝。村に響く太鼓の音は嬉しく楽しい祭の始まりでした。

普段は静かな木立に囲まれ、私達子供の遊び場、お社の回りでかくれんぼや、しいの実拾いを楽しんでお社に紅白の幕が張り巡らされ、境内におみこしが飾られて人々を待っています。



熊野神社秋祭

の掛け声と共に揺られて飾りを落とし始め、祭は最高潮になります。

祖父や父は毎朝の宮参りを欠かさず、お宮は人々の信仰の場所として在り、社務所では夏休みの子供会の合宿所として、又習字や絵の展覧会を開催したりと村人は、「熊野さん」と呼んで、神社は村の要でもありました。

残念な事に当時も神主さんは常駐せず、事ある度に多利の阿陀岡神社の神主さんが来て下さいました。宮守のおじさんはいつも私達子供の見守り役として世話をして下さいましたのを覚えています。

故郷を離れて半世紀余も過ぎた今、変わらず村祭

りは行われているものの、おみこしの担ぎ手が少なく、子供達と大人の引くおみこしが村祭の主役になっていると聞きました。

昔を顧みます時、戦後の貧しい時代ではありませんでしたが、折々の行事が村人達の心を繋ぎ、大人も子供も心豊かに暮らした日々を老境の今日、望郷と感謝の念で思い出します。

(昭和20年生、春日町出身、柏原高校15回生。鎌ヶ谷市在住28年)

## 舟城神社と祇園祭

宮司 村山 義人(春日町)



船城村、今は丹波市春日町。JR福知山線の石生駅と黒井駅の中程にある。並行して走る国道一七五線は、東は舞鶴、西は

京阪神へと続く。国道から福知山線を跨いで北に広がる六角の田園地帯。回りの山裾に張りつく農家が

点在する不便な所である。昔は沼池が多く小舟で由良川、加古川に出る交通路だった。

船城の名称の由来も頷ける。この船城村の北西の隅に天王坂があり、春日町の西玄関とも云われ、その登り口の山の中腹にある舟城神社は、寺の面影を残しながら二六七年の風雪に耐えて建っている。創建は今より五七〇年前のことだが、二度回祿により焼失している。文安三年創建後、神社、寺院、神社と変遷を余儀なくされ、徳川時代には税免除の朱印領。龜山城主、松平忠晴の崇敬。と時代の波にもまねながら今日に至っている。ご祭神は、祇園の神々、須佐之男命、櫛稻田姫命、天押雲命。境内社の八柱神社、蘇民社は須佐之男命のお子神と蘇民将来である。祇園の神と云えば、我が国特有の神道と、インドの仏教と中国の道教などの習合による神で、まさに国際的な神様である。以前、舟城神社の門前には牛市場があり、藩政時代に毎年十月二十七日に牛市が開かれ、農業、牛馬、疫病消除と守護に靈驗ありとして、七月、十月、十一月の祭日には、牛をつれて参拝する人もあり、米麦の奉納が神前の樽に山と盛ら



船城神社

れ、毎祭人で埋まる盛況ぶりだった。各地で天王講が組織され、京都府天田郡、多紀郡からも参拝があった。地方誌には「どつと三万人の人の出、神主さんほくほく」の見出しもあった。

露店も多く、スリあり、迷子あり、社務所に詰める警察官も大忙がしであった。これは昭和二九年頃まで続いた。私は平成九年に父の跡を継いだ。耕運機が普及し、牛馬に依る作業はなくなり、牛馬の神札の授与も畜産、酪農の家のみとなり、各地の天王講もほとんど見られなくなった。少子高齢化の現在、不況は吾が社のみではないらしいが。

神社経営の方針を変え、六角田園地帯の氏子に期待、二月の節分祭、七月の茅の輪くぐり、人形（かたしろ）による厄祓、出張祭に勉めている。昔と変わり、小さな祭りを続けているが、小さな氏子では仲々大変である。

舟城神社の特色を生かして、遠方の崇敬者の参拝も考えた祭も必要かな、と考えている。

さて、翻つて祇園祭の始まりを尋ねるに、平安時代前期、貞観十一年五月二十六日、マグニチュード八・三以上の巨大地震が発生。千年に一度と云われる貞観の大地震の被害状況は「日本三代実録」に、『陸奥国で大地震が起きた。空が昼のように光った。人々は逃げ惑い、家屋の下敷となって圧死し、あるいは地割に吞まれる者あり。牛や馬は狂奔した。城や倉庫の門や壁が崩れ落ちた。海鳴りと共に潮が湧きあがり、川が逆流して城下に達した。全て水浸しとなり、野も道も大海原となって境もわからなかった。船で逃げたり、山に避難出来なかった人千人程が溺れ死んだ。あとには田畑も人も財産もほとんど何も残らなかった。』と記されている。その後各地で疫病が流行り、平安京では疫病消除と死者の怨霊を鎮めるため、御霊会などの儀式がとり行われた。京都八坂神社の祇園祭の始まりでもあった。あの日から一四二年目に発生した東日本大震災は、貞観大地震の再来ではないか、と云われ、場所、規模、被

## 丹波のまつり

害状況が良く似ている。似ていないのは人の心であろう。大きく違うのは、今日の科学、文化の進歩により豊富な情報。交通手段。社会システム。生活環境の変化は人々に自然を制する大きな武器を与えた。しかし自然の力は先の地震の如く、まさに人間の抵抗も許さぬ神の力ではないだろうか。不幸にして死亡する人、傷つき泣く人、PTSDに苦しむ人、奇的に助かる人は運命と云うか、神のご加護かも知れない。人は自然の驚威に耐えることに依り、より安全な社会を実現する知恵を神様から授かる。全ては神の御手の中にあると思う。諸外国から、信仰心を持たない日本人、世界で一番アメリカナイズされた日本人と揶揄されるが、日本独特の精神文化は決して滅ぶことはないと思っ

ている。  
(印刷関係会社を経て独立経営、平成9年より父の跡を継ぎ、舟城神社宮司)

※

※

※

本年5月兄の7回忌法要で帰省の折、家内と下滝駅から黒井駅へ足を延ばした。駅前から黒井城を仰

ぎ見たが雨模様で、山頂に登るのは取りやめ、春日の局縁の興禅寺への参拝に止めた。多くの日本人が知る春日の局が、此の地に暫時留まっていた事を知り、その後の彼女の活躍を想起しながら境内を見て廻り、土砂降りの中、兵主神社に参拝。

今回も、柏高同級生の方々、取り分け高見勘逸さんには、多くの寄稿者への依頼等で様々お骨折り頂きました。皆様方のご協力に感謝の限りです。

古来神事であったまつりが、時代の変化の中で、変貌する様子に接し、この様な神事も、時代の変遷の中で、変化して行く様が窺えました。

皆様のご寄稿やお願ひした方々のお話から、素晴らしい伝統と文化を守り、京都文化の後背地に当たる地域特性(地の利)を活かし(温故知新の気概で、既に実践されている事かと思いますが)観光・特産農産品、それらを融合ミックスした所謂グリーン・ツーリズム等、丹波市地元利益の多くが還元される様なスキームが、地元の方々の知恵で時代の変化に沿った地域創生として展開する事を祈念いたします。

当欄編集担当 大野義昭(山南町出身、埼玉県在住)

女子高等教育の先駆者

井上 秀

―母から聞いた秀のこと― その1

徳田 八郎衛（浦安市）

1 はじめに

「やけに井上秀に詳しいね」と若い時から揶揄されてきた。「郷土の大先輩だもの」と返すと「郷里はどこだ？」と問われる。氷上郡と述べても誰も知らないから丁寧に「大阪駅9番ホームから福知山線で」と応えらるともう駄目だ。「判った！ 要するに田舎じゃ、



1924年卒業アルバムに載った井上秀教授

田舎じゃ」。  
 複雑線通学する彼らには宝塚以北の町は、いや伊丹でさえも田舎なのだ。級友

たちの軽蔑する福知山線さえ開通していなかった時代に「笈を負って田舎から」京都へ出た秀を初めて知ったのは中1の夏である。マツカーサ元帥に代わりリツジウエイ中将が占領軍総司令官になり、行き過ぎた占領政策の見直しの一環で日本政府に公職追放の緩和や復帰を認めて1951年末までに25万人以上の追放解除が行われた。だが私には、氷上在郷軍人会小川支部長を務めたという理由で公職追放を受け新井国民学校長を解職された広瀬巖先生が教職復帰できないのが悲しかった。終戦の年、私たちの入学を迎えるや直ちに応召されたが無事に復員の後、翌春には校長自ら我々2年生を受け持って下さった恩師である。村として英霊を谷川駅へ出迎えるには将校の在郷軍人が必要であり、多忙な校長職務にありながら請われて支部長となったため教育界を追われたのだった。

母も同じ悲しみを抱えていた。1931年から1946年11月まで日本女子大学校長を務めた恩師、井上秀（1875―1963）の追放である。1924年卒業の母にとって、秀は雲の上の校長ではなく親しく教えを受けた家政学部教授・学部長、寮監、先輩で



かつ郷里の大先輩でもあった。卒業後も同窓会「桜楓会」が卒業生の生涯教育のため毎週発行する「家庭週報」に会長として健筆を振う。その秀が1946年10月に教職追放を受け、「生涯を女子教育に捧げてきたのに、名目だけの大日本青少年団（男女別だった約500万人の青少年団を統一）の副団長だったために教職を離れるのは悲痛極まりないが、軍を信頼し戦争遂行に協力した不明の責は当然負うべきであり、一人くらは女性の戦争責任者は出てほしいと思う」と翌年1月の家庭週報に記して退任したのは痛恨の思い出たと母は嘆いた。

小1の9月、芦田村で行われた海軍軍令部次長、大西瀧治郎中将の村葬に遺骨を抱いて帰郷された淑恵夫人が我が家に泊まれた。この想い出が幼い私に戦争責任や敗者の美学に関心を抱かせるが、それを加速したのがこの井上秀である。

実は朝鮮戦争の影響で1950年10月から秀も含めて公職追放解除が始まり、翌年2月には教職追放も解除され桜楓会理事長や母校の理事・評議員には復帰していたが、念願の「大学昇格」が叶った日本女子大の

学長となることはなかった。1940年の紀元二千六百年記念関連で勲五等瑞宝章が、没後に勲四等宝冠章が贈られたが、これは申請担当の文部省が大学学長と認めていないことを示している。

## 2 京都へ、さらに東京へ

1975年（明治8年）に船城村山田の富農・井上家の長女として生まれた秀は、同村の長見尋常小学校、寄宿舎住まいの柏原高等小学校を経て念願の京都府立女紅場（なごほば）へ入学する。東海道線開通翌年の1890年、徒歩で京都へ行き寄宿舎へ入った。ここで同室となる

広岡亀子の母が大阪実業界の女傑、浅であった。京都の豪商、油小路三井家の出で大阪の豪商加島屋の広岡信五郎と結婚後、三井を建て直し、九州の炭鉱経営や



「女傑」  
を助けた秀  
浅岡

銀行・生保の創業に活躍する。娘が同伴する秀を可愛がるが、後に秀がスケールの大きい女傑になるのは浅

の影響が大きいと見られている。

1901年開校の日本女子大学校への進学を勧めたのも浅であるが、1894年女紅場（1901年に府立第一高女となる）を首席で卒業し専攻科へ進む秀が、どんな志を抱いていたかは定かでない。初代校長となる成瀬仁蔵の著書「女子教育」に浅が感動し、同校設立のため奔走するのは2年後なのだ。

秀は「生活のため和服仕立てを行い、これが後に女子大での教育にも役立つ」と述べている。当時の専攻科が厳しいカリキュラムを組んでいたのか、自由で「請負」にも励めたのかはよく判らないが、時間的余裕はあったようだ。鴨川



秀の生家。今は撤去されている。  
2000年筆者撮影

河畔に住む天狗党の残党、鈴木無隠居士から儒学を、天竜寺の蛾山老師に禅を学んでいる。だが夏に井上家を悲劇が襲う。鳳鳴義塾に学ぶ弟の純太郎がチフスで急逝し、秀に婿養子が必要となるが秀に

釣り合う婿など簡単には見つからない。まだ柏原中学校も設立されていないのだ。

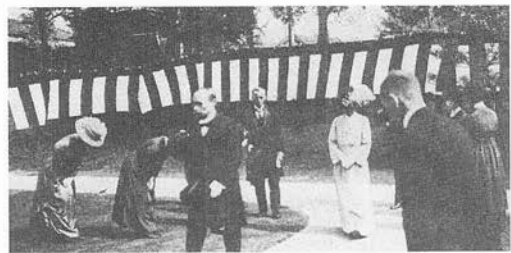
ところが翌年1月、海軍機関学校生徒で2歳年下の遠縁の少年、足立雅二が機関科士官としての将来に幻滅し、卒業間際なのに退学して神楽村稲土へ帰省する。今から中国語を学び大陸に雄飛する夢を秘める次男坊だ。「これは、これは」と井上家に迎え入れ入籍した後、直ちに京都で中国語を学び、秋には軍政が実施された台湾へ陸軍通訳として赴き、翌96年6月、東京専門学校（後の早大）へ進学する、99年の卒業時に簡単な挙式を済ませたという。秀の両親は三國一の婿のために、豪華な華燭の宴を挙げたかったが断念し、代わりに婿を5年間も修学させたのだ。

この間、秀は何処で何をしていたのか。ある記録では大阪の広岡家に寄寓し、（TVドラマと違って）この時期に浅と親しくなるとされている。だが挙式の年の夏、長女支那が生まれたのは京都円山の産院であり、京都に留まっていた可能性もある。女子大設立に多忙な成瀬から入院見舞状も届いているから「推薦入学」の根回しは二年前に終っていたのだろう。

誕生後の支那は、秀の入学のため小学校卒業まで祖父母に預けられたと記す文献は多い。だが私の伝聞は少し違っている。私の祖母の妹の一人は神楽村稲土の足立家へ嫁ぎ、そこは足立雅二と同じ株内だった。そこで父の「いとこ会」へ飛び込み、大勢の明治人に秀と雅二について尋ね、「女子大へ入学しての育児は大変だったが立派に育てたよ。やがて雅二は韓国政府に出仕し秀はコロンビア大学へ留学するので小1となる支那を郷里へ預けたのだ」と教えられた。支那も船城村へ向かう想い出を記している。秀も今の小5の歳から柏原で寄宿舎生活だった。エリート担当の哀しみと試験を親子は共有したのである。

### 3 女子高等教育無用論との闘い

いくら才媛でも秀が受けた優遇は過剰ではないかと率直に母に聞いたことがある。そこで知ったのは、周囲の学生より10歳近く年長で専攻科も終え、結婚・出産・育児も経験した秀が与える頼もしい存在感であった。「女子高等教育無用論」が世間に横行し、「出生率を減少させる」「独身者を生み出す」という批判



1924年貞明皇后2度目の行啓。

震災翌年とはいえ、その簡素さに驚く。

もあつた。それら妄論への無言の反証となる秀への関係者の期待は大きかった。29歳で卒業した秀は、付属高女教諭と発足する「桜楓会」幹事長に任じられ、さらにコロンビア大学家政学部へ入学して欧米の家政学動向を研究する機会を与えられる。2年後に帰国するや35歳の若さで教授、かつ桜楓会理事長

となる。初仕事は小石川での託児所開設であつた。

当時、明治末期は不況で女子高等教育厳寒期であつたが、皇太子妃の暖かい支援に関係者は涙した。度々のご下賜金に加え、秀の帰国翌年（1912年）には女子大へ行啓する。私学としては未曾有の光栄だ。「無位無官」の成瀬校長の先導で教育を視察し、創立以来の後援者である西園寺侯爵、大熊伯爵、渋澤男爵などに謁を賜るが、その中に秀の姿もあつた。皇太子妃は

大正となると皇后として2度も行啓する。10代半ばで皇太子妃となった貞明皇后は、自分が受けられなかった女子高等教育の夢を秀や学生たちに託したのだ。関東大震災翌年の2度目の行啓では、秀は渋澤子爵と並んで特別に菓子を賜る。このころから新聞等では、秀は秀子に替わっていくが、あくまでも戸籍上は秀であり広岡浅(子)も同様であった。だから1941年刊行の「日本女子大学校40年史」においても秀と記されている。

だが幾ら皇室の押しがあっても、建学以来の目標、大学への昇格は難しい。大学校と名乗るが就学年限は、開校時で3年、私の母が学ぶ大正末期でも4年である。これでは高専と同じで予科3年本科3年の大学には及ばない。1917年に政府が(文部省ではなく)内閣直属の臨時教育会議を設け、大学制度の見直しを図った時が絶好の機会であり、この好機に東京高商は商大に、新潟医専や京都府立医専等は医大に昇格するが、文部省の大嫌いな家政学部を要として総合大学を目指す日本女子大は、大学校のままであった。

1919年、秀を家政学部長に、そして将来の校長

に指名して成瀬校長は他界する。創立以来の補佐役、麻生勝三が後任となるが1931年に他界。老齢の渋澤栄一が引継いだが半年で他界。それまで学監として実質的に運営してきた56歳の秀が12月に新校長兼校楓会会長に就任する。エースの登板だ。

それまでに秀の名を高めてきた学術活動、社会活動、国際活動については紙数の関係で割愛するが、この実績を持つ秀の力量でも大学昇格は成功しなかった。ここでは当時の女子大の一断面を伝えたい。

#### 4 リケジヨを輩出した女子大

栄養学や生理・衛生だけでなく、化学全般に強い母に以前から敬意を払っていたが、理科教員免許を取得した機会に理由を尋ねてみた。すると家政学部では化学の講義や実験が重視され、同期生には家庭科教員だけでなく理科教員(それも中学校の)となった人もいたと教えられた。母の同期で著名なのは近藤鶴代である。岡山県の女学校で家庭科を教えていたが、代議士の兄の急逝で1946年の総選挙に担ぎ出され女性代議士第1号の一人となる。母に「写真で紹介」され

て間もなく近藤は第二次池田内閣の科技庁長官兼原子力委員長に任命された。メディアは「科学技術の軽視」と池田総理を叩いたが、科技庁の友人は「政治家の大半は理科音痴、さすが日本女子大卒は元素の周期表も頭に叩き込まれている」と長官を庇った。

このリケジョ養成は創立以来の伝統で、卒業後、付属高女の教諭となる秀も担当は化学と修身だった。秀の同期には2歳年長の丹下ウメが居た。鹿児島師範付属小学校訓導から28歳で家政学部へ入学し、卒業の際は化学教員の資格を取得した。40歳で東北大理科大学へ入学し、母校の栄養学の教授を経て理化学研究所でビタミンの研究に携わり、農学博士となったのは1940年。晩学リケジョへの栄冠であった。

後に特殊なリーダーの開発に携わる私は、戦中のリーダー開発先駆者たちの知遇を得たが、「多くの女子学生が陸軍兵器本部や海軍技術研究所に勤労働員されていた中で、日本女子大の学生が理科に強いのに感心した」と述べる企業の技師がおられた。同校の主力は家政学部だから「全員がリケジョ」と思われたのだ。

日本女子大と聞いて「ワー懐かしい」と応えてくれ



開校当時の教室風景

るのは私と同世代の防大応用物理学科卒業生たちである。「遠い目白台と合ハイ？」と冷やかすと、昭和初期の家政学部卒業生で「日本初の女性物理学博士」添谷晃子教授の講義を受けたからだという。「防大と日本女子大はよく似ている。うるさい舎監が居て定期的に」と起きろ、寝ろと言う。私物入れも整頓させる。こんな環境では優れた研究者は育たない」という辛辣な批判に共鳴する学生も少なくなかった。

どちらも「大学校」であるが防大生の名誉のために付け加えると、彼らには上級生が先に入浴するという「封建性」はなかった。だが戦前の女子大にはあった。複数の女中が居るほどの恵まれた家庭から入学し「垢だらけの残り湯に入るのは悲しかった」というのが卒業生の率直な述懐である。

（昭和13年満州奉天市生まれ・柏原町出身／（財）平和・安全保障研究所客員研究員）

# 丹波ブランド紹介



その7 丹波乳業

低温殺菌牛乳の製造ライン

## 酪農家が守った「丹波」ブランド

足立 智和

(丹波新聞社)

丹波市氷上町石生に事務所と工場を構えていた兵庫丹但酪農農業協同組合が、新設された県酪農農業協同組合に参加、今年3月末をもって解散した。前身の氷上郡酪農農業協同組合（1949年発足）から67年の歴史に幕を下ろしたが、「氷上牛乳」のブランドは、ブランドを守ろうと立ち上がった酪農家が設立した株式会社「丹波乳業」が引継ぎ、これまで通り、丹波、但馬地域の生乳を原料に牛乳と乳製品の製造を続けている。

2015年10月1日から商品の製造を始めた丹波乳業は、牛乳とヨーグルトの製造・販売事業を丹但酪農から引き継いだ。製造工場「氷上牛乳センター」と事務所の土地建物を買い取った。

社長は、80頭を飼育する酪農家の吉田拓洋さん（42） 〓丹波市青垣町惣持〓。 早朝5時半から午前9



丹但酪農からそのまま引き継いだ  
氷上牛乳センター＝氷上町石生で

の丹但酪農農協の最若手の理事で、ブランドを守りた  
い一心から会社を立ち上げた。

現在の資本金は2630万円。吉田さんを含む18人  
が出資。うち半数は、吉田さんの思いに共感した酪農  
家。一部取引先や、丹波市出身の実業家が出資する人  
もあつた。丹但酪農から引継ぎ、正社員15人、パート・  
嘱託職員18人からスタートし現在は正職員が23人にま  
で増えた。

旧丹但酪農農協エリアの丹波市、篠山市、養父市、

時半ごろまで牛舎で働  
き、その後出勤し社長  
業をこなす多忙な毎日  
を送っている。吉田さ  
んは三田市出身で、帯  
広畜産大学を卒業後、  
北海道でサラブレッド  
の調教助手をしてい  
た。母の実家近くの牧  
場の後継者として「孫  
ターン」した。解散前

朝来市の酪農家の生乳を使っている。酪農家は丹波市  
が17人、篠山市が2人（今年3月末）。搾乳牛頭数は  
丹波市が約700頭、篠山市約20頭、養父市と朝来市  
が約120頭ずつ（2013年12月）。このエリアで  
日量14トの製造量があり、このうち12・3トを同社で  
使っている。主力商品は「氷上3・6牛乳」「氷上低  
温殺菌牛乳」、丹波、但馬地域の140校の学校牛乳、  
「たべちゃえ丹波」のんじやえ丹波「丹波ヨーグルト」  
などだ。



自社製品を手にする丹波乳業の吉田拓洋社長

2015年度は14年度より生乳の製造量が約6%増  
えた。高齢化によって酪農  
家の離農が続ぎ、減産一方  
だったが、10数年ぶりに増  
産になった。少数飼育は減  
ったが、若い意欲ある酪農  
家が増頭に取り組んでい  
る。吉田さんも今年度中に  
畜舎を増築し、1・5倍―  
2倍に規模拡大をはかる予  
定だ。



製造の大部分が「氷上3・6牛乳」など普通牛乳で、1割ほどがこだわりの低温殺菌牛乳だ。脂肪球をつぶさない低温で殺菌し牛乳独特のくさみがなく、飲みやすい味わいの低温殺菌牛乳は、非遺伝子組み換え大豆など飼料に特にこだわっており、安全な食を求める消費者団体とのやりとりから1985年に生まれた。現在、低温殺菌の生乳は、わずか3軒の酪農家が生産している。

これら低温殺菌牛乳を守り、安全でおいしい牛乳を子や孫の世代にも引き継いでいこうと、昨年、県内の消費者団体が一般社団法人「みんなの低温殺菌牛乳協会」（神戸市、高石留美代表理事）を立ち上げた。同社を、酪農家を支えていこうというユニークな取り組みで、精力的に活動している。

構成団体のひとつに、宝塚市でソーラーパネル設置による市民発電所を手がけている団体があり、牛乳製造工場の屋根に中古の太陽光パネルを設置し、同社の電気料金の削減と、クリーンエネルギーでつくられた牛乳というイメージアップに貢献した。設置費用の一部100万円はインターネットのクラウドファンデ



太陽光発電による市民発電所を証明する銘板



ソーラーパネル設置の祝賀会。みんなの低温殺菌牛乳協会のメンバーがお祝いに駆けつけた＝同社で

イング（小口投資）で満額確保した。こういった取り組みを通し、新たな顧客層の開拓にもつとめている。

さらなるエネルギー自給の取り組みとして、畜産糞尿を利用して、バイオガス発電計画も進めている。北海道などで行われているもので、糞尿を発酵させて得たメタンガスを発電や熱利用に、製造過程で出る液体肥料を農業に使い、エネルギーの自給、循環型農業に利用しようという試みだ。青垣町佐治で開かれたフォードの澤上篤人・さわかみ



自身の牛舎「拓ちゃん牧場」で搾乳する吉田社長＝青垣町惣持で

ールディングス代表取締役が手弁当で訪れ、地域で仕事をつくり、お金を回す仕組みを作ることの重要性を説いた。「協会」の会員はほとんどが都市部の女性で、女性パワーが新風を吹き込んでいる。

丹波酪農が2014年に製造・販売部門を切り離したのは苦肉の策だった。12年に製品から大腸菌が検出される製造事故がおき、運転停止の経費、取引先への保障などがかさんだ。製造を再開しても売り上げは戻らず、加工部門は赤字に陥っていた。また、県の酪農農協への参加協議でも、牛乳センターが「お荷物」として障壁になっていた。丹波酪農はブランドを残すた

めに売却先を探したが条件が折り合うところはなく、閉鎖が現実味を帯びてきたところで「新会社への譲渡」の道が開け、新会社に事業を譲渡したことでブランドも残った。

吉田社長によると、老朽化したプラントの補修などで初年度と昨年度は赤字だったが、今年度からは「何とか回るようになった」という。今年8月、「氷上3・6牛乳」のパッケージを一新。丹波酪農から引き継いだ、同社のマスケットキャラクター「たんたんちゃん」をあしらった。特別濃厚なヨーグルトの試作も進んでおり、会社の雰囲気は良い。

バイヤーからは、「産地表示、産地の顔が見える商品売りたい」と言われており、「兵庫県産、丹波産」の表記ができるよう研究している。全国的に酪農農協の統合が進んでおり、組合の統合で「地酒」ならぬ、「地牛乳」もどんどん減っている。「地元で育った牛の乳からできた牛乳を飲めるぜいたく」がこれからも続くよう、地元の我々が、買って応援、飲んで応援したいものだ。「丹波乳業」「みんなの低温殺菌牛乳協会」は、フェイスブックで情報を発信している。

## F M放送局 「805たんば」

荻野 祐一

(丹波新聞社社長)

丹波市に関する情報を伝えるFM放送局「805たんば」が昨年9月17日に開局した。氷上町市辺にスタジオを構え、NPO法人たんばコミュニティネットワークが運営している。開局した当初、放送にかかわっていたのは20人足らずだったが、今年夏の時点では、高校生から80代までの約100人がスタジオに入入りし、放送にかかわるまでになった。開局から1年余り経ち、すっかり市民に親しまれている。これまでの歩みと番組内容などを紹介したい。



丹波市氷上町市辺にあるスタジオ

## 「丹波市民の放送局」

丹波市でFM放送局を立ち上げようと、平成25年12月にたんばコミュニティネットワークが設立された。開局に向けて模索を続けていた一昨年の8月、丹波市豪雨災害が発生した。

現在、「805たんば」の局長を務めている足立宣孝さんは9月1日、災害の被害が甚大だった市島町の前山地区を訪ねた。そこで、たまたま阪神淡路大震災後に災害FMに携わった関係者に出会い、「丹



打ち合わせをするパーソナリティ

波市でも災害FMを立ち上げたら」と勧められ、復旧復興の一翼が担えればと、豪雨災害に伴う「災害コミュニティFM」の開局に向けて動いた。

スタジオは、被災者への救援物資の集



番組で流す音楽の準備をするパーソナリティ

積場になっていた前山コミュニティセンターのホール。豪雨災害から1カ月後の9月17日に開局した。机が2つだけの小さなスタジオだった。

開局に向けて免許申請をしていた総務省・近畿総合通信局から9月17日の当日、免許状が届き、試験電波を流すなどの準備をし、午後6時から放送を始めた。丹波市長もスタジオに招いた。足立局長は「本当にあわただしい1日でした」と振り返る。

市島町の高谷山にアンテナを立て、市島町内のほぼ全域と春日町の一部を受信エリアに、交通情報をはじめ、給水車やボランティアなどに関する情報を伝えた。大雨が降ると、スタツフがスタジオに泊まり込み、

丹波市からの情報を流した。

この年の11月末まで放送を続けた。およそ2カ月半の体験を通してFM放送に関するノウハウをつかみ、「やれる」という自信と確信を得たといい、念願の「805たんば」の開局に向けて再び動き出した。

翌年の9月17日、氷上町市辺に開局した。

足立局長は「開局はもちろんうれしかったですが、市民の皆さんに受け入れられるだろうかという不安もありました」と話す。周囲には、FM放送に否定的な声もあった。「『ラジオはアナログのメディアであり、オールドメディア。経営は成り立つのか』などと言われもしました」という。

その指摘の通り、経営に関する不安は今もつきまとい続けている。ラジオで流す曲の著作権料や通信回線の使用料など、放送にはコストがかかるが、それに見合うだけのスポンサー料や寄付が得られるかという不安から逃れられずにいるという。

「しかし」と足立さん。「私たちは、成功・失敗の

指標をFM放送にかかわってくれらる人たちの数に置いています。収益よりも、聞いてくれる人、寄付などの応援をしてくれる人、局の見学に来る人、放送にかかわる人など、FMにかかわる人たちの輪が広がることを大事にしています」と話す。

### ユニークな番組が目白押し

「805たんば」は月曜日から金曜日までの朝、昼、夕方に帯番組を放送している。番組名は朝が「モーニングコールたんば」（午前7時半から9時）、昼が「ウィークリーアットヌーンお昼ですよ」（正午から午後2時）、夕方が「イブニングウォーカーFM805」（午後5時から7時）で、元学校教諭や農家、主婦、病院スタッフ、住職など多彩な顔ぶれの13人がパーソナリティを務め、それぞれの個性を生かした放送を繰り広げている。

このほかの番組も多彩だ。元NHKエグゼクティブアナウンサーで丹波市にゆかりがある村上信夫さんが、ラジオスタジオを街角のカフェに見立て、丹波の輝く女性を招き、インタビュを通して女性の



楽しい雰囲気放送するパーソナリティ

ティと氷上高校商業科の生徒がトークを繰り広げる「氷上高校ジェネレーションギャップ！」など、ユニークな番組が目白押しだ。

失礼ながら、素人の放送なので、たどたどしさはある。でも、それも味わい。丹波の話題がふんだんに盛り込まれ、丹波弁も飛び出し、親近感を持てるのがいい。

「805たんば」では、定期的にボランティアス

思いを引き出す「たんば女性STORY」、丹波で子育て中の母親たちが子育てのことや家族のことなどをワイワイ話す「丹波の子育て 母ちゃんよやま話」、40代、50代のパーソナリ



「805たんば」にかかわっているパーソナリティら

タツフ養成講座を開いている。パーソナリティとしての心構えや、ミキサー操作に必要な専門知識など

を学ぶ。その講座を受けた人たちが番組づくりに関わるシステムになっている。

「805たんば」の副局長、荒木伸雄さんは「ラジオを通して、いろいろな人、いろいろなものを結びつけ、丹波を元気にしたい。市民のみなさんの会話の中で、『805たんば』の話題がよく出るようになれば」と話している。

最後に、丹波地域のメディアとして丹波新聞社では、「805たんば」とスクラムを組んでいる。丹波新聞に載った記事を提供し、リスナーに伝えてもらっているほか、丹波新聞の紙面に「今週の805たんば」というコーナーを設け、番組情報を新聞読者に届けている。

「丹波を元気にしたい」は、共通の思い。新聞、ラジオと媒体は違うが、今後も手を取り合って丹波の情報を掘り起こし、発信していきたい。

ちなみに「805たんば」の放送は、丹波市にいてもパソコンやスマホで聞けます。くわしくは「805たんば」のホームページで確認ください。

頑張ってるよ！柏原高生  
「幸せの国」ブータンへ

ブータンと言えば「幸せの国」の代名詞。そんな国へ柏高生の5人が行く。柏原高校の「知の探究コース」に学ぶ2年生たちが、課題「GNH（国民総幸福量）探究」に取り組み、8月に約1週間短期留学する。ブータンで高校生や街の人たちに幸せに関する聞き取り調査を行い、丹波との比較を通じて、幸せになるための術を学ぶんだそうだ。課外授業で海外に調査に出かけるなんて、今の柏高生もたいしたもんだ。大学生にだってなかなかできないことだ。

丹波産ナチュラルチーズ誕生

丹波にもチーズ好きは多いよ。うだが、そんなチーズ好きにはたまらないチーズが丹波で生まれた。丹波・春日町に、飼育、搾乳からチーズ製造、販売まで

一連の工程を自社で行う会社が誕生した。春日町野村の「婦木農場」。作るのはジャージー牛から搾乳して作ったナチュラルチーズ。白カビタイプのもので、フランスのリヨン近くが発祥とされる。時間の経過とともに熟成が進み、風味とコクが増すという。丹波の空気をいっばいに吸って発酵させたサンマルセランチーズは丹波産でしか出せない風味がするに違いない。80グラムで800円（税別）。チーズ好きの人はぜひ一度召し上がれ。

丹波にも鉄人はいた！

「鉄人と言えば衣笠選手」と思う人も多いはず。でも丹波にも鉄人はいた！ 山南町谷川の自営業、岡崎健一さん（40）だ。すごいなのなの！

2014年に出場した「南極マラソン」はなんと100キロ。それでいて3位入賞。2016

年4月の北極マラソンは6位で完走。南極・北極の両方のマラソンを完走したのは日本でもほんの僅か。2016年5月には、世界一過酷なマラソンと言われる「エベレストマラソン」に出場した。高地でしかも42・195キロのフルマラソン。それを約7時間で走破したというから凄い。平地で7時間で走るのさえ素人には大変なこと。日本人初の快挙。いやはや5キロくらいのジョギングでアップアップしてちや恥ずかしいね。

プラザアピア柏原店、  
46年の歴史に幕

ボウリング場「プラザアピア柏原」が3月に閉店した。氷上郡初のボウリング場として1970年（昭和45）にオープンしたが、老朽化で創業46年で幕を閉じることになった。ここでデートした人も多しはず。青春の思い出の場がまたひとつ消えた

と言ってもいい。

丹波市に陸上競技場が  
できるかも？

消えゆくものがある一方で、生まれるかもしれないものもある。県立柏原病院が移転するが、その跡地に今、陸上競技場を造ろうという動きが。提案者は丹波市内の陸上競技愛好者たち。まだ署名運動を始めたばかりで、どうなるかはわからないが、「丹波市に陸上競技場を作ろう会」（亀井忠司代表）では実現を期待する。

丹波市には公認の陸上競技場がなく、今は近隣の三木市や加古川市の競技場を借りて大会を開いている。陸上競技場を作ればサッカー、ラグビーなどの大会誘致で、多くの選手や応援の人々の訪問が期待できる。大いに市の活性化につながるはず。期待したいなあ。

（井徳正吾・横浜市）



■郷土について書かれた本

上田美和著

自由主義は戦争を

止められるのか

芦田均・清沢冽・石橋湛山

吉田弘文館・1700円＋税

自由主義・リベラルという言葉は、多岐にわたる意味合いをもち、人によって違うイメージを抱いたりもする。実は1930年代の日本の論壇でも自由主義をめぐる論争があり、その曖昧さが問題化している。これに興味を抱いた「戦無派」の著者（早大講師）は、当時の日本の、ナショナリストでもあった三人の自由主義者の行動を、自由主義の基本的要素である寛容と自律の観点から追跡し、「自由主義とは何か」を考察する。

一般に出版社の編集担当が「この表題なら売れる」と判断して表題を決めてしまうから、内容と表題が乖離することは珍しくない。本書の大半も三名の行動の観察で占められるから、最後まで読まないで表題に疑

問を感じるかもしれない。著者は、寛容と自律の両立が難しいのを本文で度々指摘した後、最終章「不寛容時代の寛容と自律」で「自由主義は矛盾の体系。自由主義だけでは戦争は防止できなかったのではないか」と記す。続いて「他方で、自由主義なしでは、戦争を止めることはできなかったとも考える」と結ぶ。いずれも唐突、かつ説明不足であり、国際政治に興味をもつ読者には、やや物足りないであろう。

だが著者は近現代史研究家であり、その点では本領発揮といえる。議会政治家の芦田、外交評論家の清沢、経済ジャーナリストの石橋の人生が何処で交錯し、お互いをどう評価していたか、日中問題をどう処理

すべきと考えたのかを究めていく。「弾圧された悲劇の自由主義者たち」という類いの記録とは全く違う研究である。「芦田均日記」や「最後のリベラリスト・芦田均」等により芦田に精通している会員も、学術雑誌に掲載された最近の芦田研究を知って満足するに違いない。

著者の史観で腑に落ちないのは、中国に寛容ではあるが満州国だけは維持すべきとする三名を「中国民衆のナショナリズムを理解せず」と切り捨てていることである。大規模移住でようやく漢民族が多数派になったばかりの満州は、元々ツングース系、モンゴル系、朝鮮系民族が共生し、政治的・文化的にも中国とは別の地域、西域やチベットと同じ立場、というのが日本の為政者やインテリの共通認識であった。だからこそ五族協和（日・朝・支・滿・蒙）、さらには白系ロシア人も交えた王道楽土建設に励んだ「自由主義者」も多かったのである。（徳田八郎衛）



## ■郷土について書かれた本

森公章著

## 平安時代の国司の赴任

## 「時範記」をよむ

臨川書店・2800円＋税

国際日本文化研究センターの倉本宏氏を監修者とする「日記で読む日本史」シリーズの一冊である。「宇田天皇の日記」や「明月記」のように特定の日記も取り上げるし、「日記から読む撰関政治」「日記からみた宮中儀礼の世界」のように幾つかの日記を考証しながら、その時代の背景にも迫る。

本書が取り上げる「時範記」は、平安時代の国司の任国下向の様子をよく伝える資料として研究家の間ではよく知られているが全体の活字化・出版は未だなされていない。長く奈良国立文化財研究所で古代史の研究に携わり現在は東洋大学教授を務める古代史専門の著者は、因幡守に任じられた中堅官僚、平時範（1054—1109）が因幡へ下向・

京上（今の上京に相当）する際の日記を基に、当時の史料や現代の研究報告を駆使しつつ古代の国司と国衙（地方官庁）の実態を探る。

しかしながら拙文が縁で本書を一読頂いても、「どこに氷上郡が登場するのか」と戸惑うに違いない。残念ながら一行は、丹波と但馬、つまり峠越えの続く山陰道を通過しない。山陽道で明石へ、次いで西北へ進み作用から美作の東部、志戸坂峠を経て因幡国道俣駅へ出て、國府へ向かった。大勢の御供や荷物を伴う旅なのに五日で國府へ到着している。平地の多い山陽道および、そのサブルートで西へ向い、最後の山地横断も川沿いに進んで楽をしている。



このルートは奈良時代から公的に存在し、駅馬の整備も徹底していた。延喜式制でも、因幡国から調庸物を都へ運んだ後、六日で歸国できることになっていった。丹波・但馬經由では不可能だ。足利尊氏も京から来訪しているから氷上郡は山陰道の要所だったと思っっている人もいるが、彼は逃亡者だから丹波路を選んだのである。

今の鳥取県は、人口が日本最小で議員定数も減らされる状況にあるが、七郡から成る因幡は、延喜民部上式の国の等級は上国であり、都からの距離では近国とされている。だが土田直鎮著「公卿補任を通して見た諸国の格付け」によると、近江・播磨・美作・備前・備中・伊予の七国が甲、美濃・越前・丹波・備後・周防の五国が乙、大和・伊勢・但馬等の六国が丙、山城・摂津・信濃・丹後・因幡等の十二国が丁とランクされ、都人が喜んで赴任する国ではなかった。山国丹波が山城・摂津よりも格が上なのも興味深い。

(徳田八郎衛)

## ■郷土について書かれた本

丹波市教育委員会編集

## 丹波市の歴史的建造物 I

山南町・柏原町編

平成元年、水上郡教育委員会は発足20周年の記念事業として「水上郡の文化財」と題する見事な報告書を刊行した。国指定14、県指定33、町指定205、総計252の有形・無形文化財と記念物（史跡・名勝・天然記念物）の所在地・所有者・管理者・解説・写真を記した膨大なものだ。評者如き「非文化人」にもご恵贈頂いたので直ちに札状を差し上げたが、一言「陳情」した。「絵画・彫刻・工芸品等は、安全な倉庫で保護されていますが心配なのは風雨に晒されている建造物（44件）。そしてこの他に文化財指定に至らない歴史的建造物が毎年取り壊されています。補助金交付は無理でも調査と記録を是非今のうちに」。

この「ごまめの歯ぎしり」が読み捨てられたか、「一段上のごまめ」

に役立ったかは不明だが、丹波市誕生後の平成19年、丹波市教委は各自治会に「第二次世界大戦以前に建てられ建設年代や大工が判明しているもの、造りや外観に特徴あるもの、公共建築・店舗などで古いもの」を問合せ、寺社建築調査と併せて同年と翌年にまず山南町・柏原町で目視観察・写真撮影を行った（一次調査）。その中から重要なものを選び、同21年から24年に配置図・平面図・断面図の作成、実態や特徴の記録、史料調査を行った（二次調査）。

その結果を専門家が分析して同27年10月に発刊されたのが本報告書である。残りの4町は次回と次々回の報告となる。調査した寺社は山南町61棟・柏原町42棟、民家・公共建築は山南町・柏原町ともに14棟である。



一次調査では山南町の調査棟数は柏原の3倍。戸数が多いから当然だが、最終的には数揃えしたのでどうか。専門的な内容なので紹介は割愛するが、興味ある方は市内各図書館で閲覧下さい。

拙宅も「母坪T家」として記されている。調査に来られた神戸大と京大の教官方に「まだ築130年です。この地域には徳川末期の民家もあるのに恐縮です」と挨拶したら「それらの大半は無人でシヨウルム化しています。サッシも入れず寒さに耐えてのご生活、感銘します」と激励された。我が家は、田の字型の整形間取りでなく食違いの間取りなのが不思議だったが、これは篠山市福住地区（古民家が多い）にもあり、全国的にも見られる上層農家の接客空間の充実が背景にある」と解説されている。

報告書配布の御礼に教委へ伺ったが、計画立案・大学との調整・調査活動・報告書作成等に10年携わった方々の姿はもうなかった。

（徳田八郎衛）

平成28年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く



会場風景

今年の総会・懇親会は平成28年7月16日(土) 11時から、昨年と同じ「学士会館」にて開催されました。

当日は、竹内同窓会長・谷水前会長始め本部から小田、足立、村上の3名

の副会長、井上監事、大西校長、辻丹波市長、仁藤阪神・畑東海各支部長、山名京滋・奥山篠山各支部長代理、古川兵庫東京事務所長、平谷東京兵庫県人会幹事、小田丹波新聞社会長、今年も日本酒の差し入れを戴いた西山(株)西山酒造場会長の計16名のご来賓、他支部からの参加者を含め過去最多の158名の参加で大盛会でした。

総会では会務報告、会計報告が承認されたほか、2年に一度の役員改選で現執行部の留任に加え新たに3名の副支部長増員案が可決承認されました。

ご来賓のうち竹内同窓会長、大西校長、辻丹波市長、古川兵庫東京事務所長からご挨拶を頂きました。辻市長は挨拶の中で今年11月の任期満了をもって丹波市長を退任する旨及び12年間の支援への御礼を述べられました。

今年の担当幹事は昭和45年卒・22回

の皆様。東京支部16名・他支部からの応援6名で見事に対応頂きました。今年も「平成27年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会」の横断幕を書道師範の21回生藤原ひさ子さんに力強い見事な字で作成いただきました。

恒例の柏陵セミナーは幹事学年22回生本城英明さんの「介護保険を有効に活用する術」と題する講演。親なり、自分自身がいざ介護という事態に直面したときどう対応したらいいかについて、永年介護の現場に携わってこられた専門家ならではの具体的で分かりやすいお話しでした。

井徳22回生代表の開演挨拶、仁藤阪神支部長の乾杯の音頭で始まった懇親会は途中に丹波から来られた「805たんばコミュニケーションエフエム」副局長



講師の本城氏

荒木さんからのエフエム放送の紹介と支援依頼を挟んで、時を忘れた4時間の



幹事学年の指揮で校歌斉唱

最後は校歌・応援歌・畑東海支部長の音頭による万歳三唱。思いでの1ページとなるテーブル

毎記念写真を手に、来年の再会を約しての解散となりました。

来年度の総会・懇親会は7月8日(土)の開催です。より多くの皆様のご参加をお待ちしています。会場は今年と同じ学生会館です。

近年関東に来られたご友人・お知り合いがられましたら事務局までお知らせください。

柏陵同窓会東京支部のホームページに総会風景等アップされておりますので、是非ご覧ください。

(支部長・谷口浩章 15回生 氷上町出身)

## 東京支部総会・幹事学年の舞台裏



代表 学年 井徳 幹事

おい、来年は俺たちが幹事年次らしい。幹事年次って何だい？ セミ

ナーをするらしいって。俺たちの中で誰が話すテーマを持っていると言うんだい？ そもそも人前で話せる奴って誰かいるのかい？ ほかに何をやるの？ 受付係りは何人ほど？ 5人で大丈夫？ いや足りないだろう？ 会計もいるよな？ えっ？ カメラマンも要るの？ ひえっ！ 一人で大丈夫かな？ いや足りないぜ！ テーブルは15卓もあるんだぜ。一体全体、手伝いの人数は全部で何人いるんだい？ 足りるかい？ 全員に助けの電話をしようか？ いや葉書がいいよ！ そんな話で盛り上がった昨年の暮れ。それから半年経った7月16日の朝。早く名札を並べないと、そろそろ来

ちゃうぞ！ おい、もつとそつち詰めてくれないと、こつちのほうじゃ並べ切れないよ！ 名札は年次順だよ！ お釣りは大丈夫かい？ 案内板は出したかい？ おい、舞台上にライトがないぞ！ そもそも演台を使うのかい？ 司会者とスピーチのマイクはどれにする？ あれ、このマイク、音量が足りないぞ！ もつと上げてもらおうよ！ 校歌のCDはどこにある？ 誰が操作する？ 校歌斉唱のキュー出するのは誰だ？ それはそうと、女学校の校歌はやるのかい？ 旧制中学校の校歌は？ そもそも女学校OGの人たちは来てくれているのかい？ スピーチして戴く人には事前に伝わっているのか？ 途中スピーチの人も大丈夫？ とこで来年の幹事は来ているんだろなあ？

4時間後、私たちは安堵で、寂として声なし。

(文責 井徳正吾 二十二回生 氷上町出身)

## 同好会

◎氷上ゴルフ同好会、次回は143回目を迎えます！

年4回開催で歴史を誇る「氷上ゴルフ同好会」。

現在会員数40名弱と、長く続ける中で会員の高齢化もあり会員数の減少に心配もありますが、若返りも図るべく新しい会員の増強に努めています。(ゲロスは70点代、130点代といろいろです)

各例会は会員の紹介もあり良いゴルフ場で安いプレー代を心がけ、主に茨城、埼玉、神奈川等と会場を回りながらの開催で各回の参加者20名前後で推移しています。

丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたいと思っています。

毎回パーティでは丹波の話もあり楽しい例会になっています。

ゴルフを楽しんでいる皆様、都合

の良い会場の時だけでも参加されませんか、気楽にお声を掛けて下さい新会員大歓迎です。

ご連絡を頂ければご案内を差し上げます。ホームページにもその都度結果と予定を掲載していますのでご覧下さい。

この1年の成績は次の通りです。

◎第139回 27年9月11日

嵐山カントリークラブ

優勝 安達健一郎

2位 山本喜則

3位 大野邦江

◎第140回 27年12月11日

筑波カントリークラブ

必ず晴れと決まっていたがついに大雨に 残念ながら流会となりました。

◎第140回(再) 27年3月11日

筑波カントリークラブ

優勝 足立悦男

2位 堀博之

3位 西川宣孝

◎第141回 27年6月1日

常陽カントリークラブ

優勝 大野富士夫

2位 細見充彦

3位 赤井紀夫

<http://pc-taiyo.co.jp/hikami> 又は「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係 岡 吉明

☎ 048-460-1601



第141回大会の参加者

## ◆インフォメーション



## 展覧会

### ◎日本陶彫会展

郷友可部美智子氏が所属される日本陶彫会の第六十三回展覧会が五月二十九日から六月四日まで、銀座六丁目のサロン・ド・Gで催されました。

「陶彫とは、土を焼いてつくる感性豊かな面白い彫刻です。……」と案内状に書かれています。たとえば秦の始皇帝陵の兵馬俑とか、縄文の埴輪などをイメージしていただくと解りやすいとおもいます。もちろん製作者は現

代に生きる方々ですから、それぞれの作品を通じて様々な個性を謳いあげて、鑑賞する側に訴えかけて来られます。ここ十年來毎回鑑賞させていた

いておりますが、色んな論議を通り越して、一つひとつの作品にほほずりしたくなるような、とても楽しい雰囲気です。この会の歴史は長く、昭和二十六年に上の松坂屋の特設会場で「日本陶彫会第一回展」を開いたのを始めとして、毎年絶えることなく続けてこられました。

可部美智子氏はこの会の重鎮の一人として、長く役員を務め、会の持続と発展に尽くしてこられました。昨年役員を辞して、なおこの道の奥義を窮めるべく、制作にいそしんでおられます。

可部氏の人となりや信条については、藤原ひさ子さんが本誌本文中にレポートしています。(S)

## 演奏会

### ◎来年四月にブルク・バツハ室内合唱団第六回演奏会



西脇市出身  
で郷友の笹倉  
強氏主宰のブ  
ルク・バツハ  
室内合唱団の

演奏会が二〇一七年四月八日(土曜日)午後二時より次の要領にてもよおされます。

公演名 ブルク・バツハ室内合唱団第六回演奏会  
ア・カペラとカンタータの世界Ⅵ

会場 浜離宮朝日ホール(朝日新聞東京本社内)

最寄り駅 都営地下鉄「築地市場」

曲目 J・Sバッハ作曲 カンタータ  
一〇番「私の魂は主をあがめます」 B  
WV一〇、カンタータ第一一六番「平和の君、主イエス・キリストよ」ほか。  
日本人音楽家 信時潔作曲「あかが



り」、日本民謡、武満徹編曲「さくら」なども演奏される予定です。

鑑賞券 三〇〇〇円

\*



「古希を迎え、漸くバッハ音楽にとりかかろうと思いつき、カンタータとアカペラ曲（バツハゆかりの作曲者の無伴奏曲）で演奏会を開催してゆきたいと、

志を高く掲げて主宰して参りました。隔年行事として五回を数え、多くの応援者のご協力にて浜離宮朝日ホール（朝日新聞東京本社内）にて開催して参りました。」（笹倉氏挨拶より）

\*詳しくは<http://www.bungbach.com/>

(S)

## 関西丹波市郷友会が 柏原で28年度総会

関西在住の丹波市出身者で作る関西丹波市郷友会（旧関西氷上郷友会、有田秀雄会長）は平成28年度の総会を11月6日に、柏原町の旧女学校校舎を活用した「黎明館」内のレストラン「ルクロ丹波邸」で開く。

同会は明治32年に発足し、関東氷上郷友会とも縁が深い。「後進育成」の



第105回 関西丹波市郷友会 総会  
中学校体育連盟の生徒に優勝旗を手渡す有田会長（27年度の総会＝宝塚ホテルで）

基金を作って毎年、市内で活躍する個人、団体の小中学生らに助成金などを贈っている。平成26年度からは5年計画で、中学校体育連盟の総合体育大会と新人大会用の競技別優勝旗計34本を、氷上郡時代のものから更新するために寄贈を進めている。

しかし、活発な支援活動の反面、近年は高齢化、また丹波が京阪神からの交通の便がよくなったことで郷土意識が薄れてきたせいか、会員数が減少している。このため、地元在住の人たちにも会員の輪を広げることにより活性化を図ろうと、従来は阪神間で開いていた総会の会場を初の試みとして地元で設定することにした。

また同総会に向けて会員から寄稿を募り、情報交換のための会報誌「たんば」を創刊する。有田会長は「会の充実のための方策を他にも検討中で、関東郷友会の会員の皆さんにも縁者の方などに呼びかけていただければ」と話している。（同会会報委員 小田晋作）

◎寄附者芳名(平成27年度)

大野	安達	吉見	松本	高見	笹倉	足立	渡邊	頼澤	山口	中井	中居	谷口	岸本	菊池	足立	近藤	前田	光山	竹内	柏陵同窓会会長	大西	東京兵庫県人会幹事長	古川	兵庫県東京事務所所長
善三殿	健一郎殿	弘文殿	栄二殿	嘉都司殿	鉄平殿	謙悟殿	和代殿	博殿	敏之殿	良平殿	篤子殿	浩章殿	勲殿	洋子殿	敏昭殿	仁司殿	和市殿	保士殿	牧人殿		伸弘殿	颯衣殿	直行殿	
五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	八〇〇〇〇円	八〇〇〇〇円	八〇〇〇〇円	八〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一三〇〇〇円	一六〇〇〇円	二〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円

米澤	村上	絹川	藤田	藤田	原	南部	鶴田	千葉	田村	谷垣	高見	鴻谷	柿原	荻野	惠本	浮田	上野	足立	上田	横幕	藤田	谷水	塚口	谷口	梶原	大野	
紀成殿	高廣殿	正殿	千治殿	純殿	利充殿	光殿	宏・ゆき子殿	淳子殿	公平殿	惠美子殿	秀史殿	正博殿	康一郎殿	晴一郎殿	みよし殿	信子殿	忠明殿	和孝殿	正文殿	尚子殿	徹殿	克巳殿	智殿	捷殿	一郎殿	武殿	義昭殿
三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円	四〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円

三宅	西川	中谷	小田	土松	久呉	久下	岡田	植田	井徳	井出	石橋	池端	池田	足立	本城	余田	山口	安井	廣瀬	岸本	稲継	池田	足立	足立	渡辺	若森	
良夫殿	宣孝殿	美鶴殿	朝子殿	京子殿	道子殿	誠殿	充利殿	茂樹殿	正吾殿	恭子殿	昭彦殿	廣士郎殿	和子殿	東一郎殿	武夫殿	英明殿	幸夫殿	泰男殿	孝之殿	安伸殿	隆・敏子殿	尚士殿	忍殿	義雄殿	啓介殿	美都子殿	敏郎殿
一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円

一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円	一〇〇〇〇円
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

本誌にご協力有難うございます ❖



SOMPO  
ホールディングス

保険の先へ、挑む。

損保ジャパン日本興亜

# 保険の 先へ、挑む。

変化の時代にも、揺らぐことのない確かな明日をお届けしたい。  
その想いをカタチにするために、私たちは進化します。お客様の  
「安心・安全・健康」な暮らしをひとつつなぐで支えるグループへ。  
保険の先へ、挑む。

日本の「損保」から、世界で伍していく「SOMPO」へ。

損保ジャパン日本興亜は SOMPO ホールディングスの一員です。

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

南東京支店 品川第一支社

〒108-0075 東京都港区港南 1-6-31

Tel.03(5781)8041 <http://www.sjnk.co.jp>

❖ 本誌にご協力有難うございます

# すべての 働く人のために、 タイヤは強く 進化した。

優れたロングライフ、より確かな耐摩耗性能、  
さらに向上した性能が働く人たちをサポート。

よりタフになった、ヨコハマのライトトラック用タイヤ、LT151R。  
イテゴ-イテゴ-フル

このタイヤには、プロに選ばれる理由があります。

# LT151R

New High Performance Radial Tire for LIGHT TRUCK

 **YOKOHAMA**

株式会社 アイ・ケイ・アイ I.K.I co.,LTD

株式会社 ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸&生産管理 & 小売り

代表取締役社長 岸田 勇 柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

認定NPO法人アジアの新しい風 理事

<http://www.npo-asia.org>

上 高 子 (氷上町出身)

〒 154-0016 東京都世田谷区弦巻 2 - 18 - 22 - 414

TEL / FAX 03 - 5426 - 6714

e-mail takako-ue@t05.itscom.net

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援する NPO です。  
交流大学は中国・清華大学、タイ・タマサート大学、ベトナム・貿易大学、インドネシア・パジャジャラン大学。

東京都によって認定 NPO に認定され、当 NPO への寄附金は、確定申告をすることで、税額控除の対象になります。すなわち、寄付総額から 2000 円を差し引いた金額の 40% が税額より差し引かれます。ご支援をよろしくお願いいたします。

❖ 本誌にご協力有難うございます



地元兵庫県産の酒米と神地寺山伏流水を用いた古式和釜、三段仕込み、槽搾りの創業以来、ほとんどスタイルを変えない伝統的な仕込み方法と、江戸時代より続く寒仕込みにこだわる

丹州氷上之地酒

# 奥丹波

時代を経ても変わらない深い味わいと穏やかな香りの純米酒  
そして、現代の酒造りの粋を極めた純米吟醸酒・純米大吟醸酒を中心仕込んでいます

創業江戸享保元年

TEL0795-85-0015  
http://www.okutamba.co.jp

山名酒造株式会社

関東氷上郷友会の益々のご発展を  
祈念いたします。

 埼玉りそな銀行  
RESONA

# 丹波新聞

伝えたい  
届けたい



## 丹波竹田祭

勇壮なみこしが宮入する市島・一宮神社(中竹田)の伝統行事「丹波竹田祭」。六社のみこしが、「よーい、さあっ」と勇ましく土煙を上げて宮入りする。(本紙・昨年10月15日号より)

無料お試し購読受付中!!

丹波新聞社 〒669-3309 丹波市柏原町柏原201

丹波新聞

検索 

tel.0795-72-0530

fax.0795-72-1956

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,255円(郵送料205円)

あなたの町の「石屋さん」  
そんな石屋をめざしています!!

墓石・霊園・建築石材・造園石材

## (株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高 昭和 36年卒

いしやは ここよ

 0120-1480-54

工場・事務所 TEL 0795-72-3032

FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>





❖ 本誌にご協力有難うございます



## 筑波東急ゴルフクラブ

〒300-4204 茨城県つくば市作谷 862-1

TEL029-869-0109 FAX029-869-0568

<http://www.tokyu-golf-resort.com/tsukuba/>

株式会社東急リゾートサービス



エクステリア専門商社



株式会社 トコナメエプコス

代表取締役 広瀬 寿和 (山南町和田)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル

TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

貯蓄から、非課税投資へ。

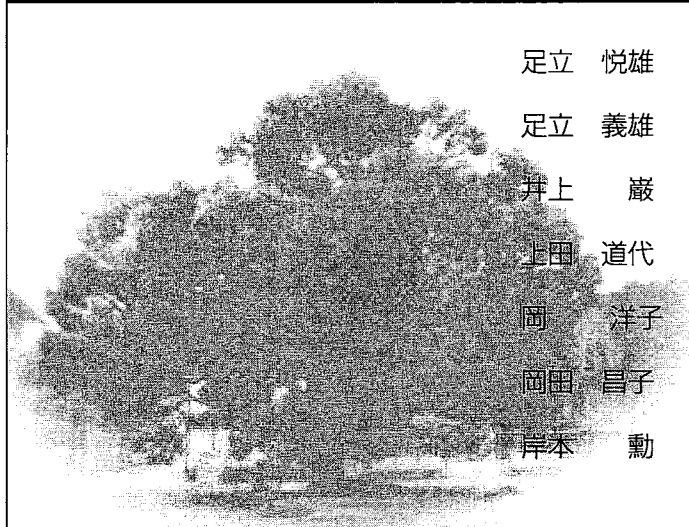
野村でNISA

野村証券株式会社 本店投資相談室

TEL.03-3271-9109 〒103-8011 東京都中央区日本橋 1-9-1

# くすの木 14

14 回生関東支部会



足立 悦雄	岸本 敏子
足立 義雄	仁藤 欽嗣
井上 巖	松田けい子
上田 道代	三觜 洋子
岡 洋子	森田 栄子
岡田 昌子	山名 靖英
岸本 勳	山本 喜則

❖ 本誌にご協力有難うございます

## 今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送  
データ入力等の情報処理、コールセンター、  
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

——— いつでもよりよいサービスを ———

# BSS

## 株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉県花見川区宇那谷町 1501-2  
TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865  
<http://www.betterservice.co.jp>  
e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

## 関西丹波市郷友会会報

# たんば 創刊号

(10月発行予定)

郵送料のみご負担にて配布致します。

【申し込み先】

関西丹波市郷友会

【事務局】

大阪市西区新町 2-15-27

サンキン内 (tel.06-6539-3201)

平成 28 年度総会

11月6日(日) 午前11時より  
柏原町「たんば黎明館」内  
レストラン「ル・クロ丹波邸」

# たんば



関西丹波市郷友会会報  
第1号 2016.11.1

医療法人社団 順孝会 理事長／医学博士  
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒347-0015 埼玉県加須市南大桑一六二〇一  
TEL 〇四八〇六五五九八八  
FAX 〇四八〇六五六一〇九七  
E-mail: kazu358@pastel.ocn.ne.jp

株式会社ナレッジリンク  
足立国際会計事務所

足立知佳子

代表取締役  
税理士・米国公認会計士 (Certificate)  
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一―三―四UIW11自由が丘ビル六〇二  
TEL 〇三三七七八〇四七 FAX 〇三三七七八一八四七  
E-mail: cadachi@ata.gr.jp

足立静雄

モンテッソーリ・スクール ひまわりこどもの家  
NPO法人小学生モンテッソーリ・スクール  
理事長・園長

池田和子

行徳校 〒272 市川市福栄二―六―一  
本八幡校 〒272 0823 市川市東菅野一―三―三

池田忍

〒247-0005 横浜市栄区桂町一―一―一〇一  
TEL 〇四五―八九五―二七二二

石橋順子  
藤原ひさ子

岡田昌子

上武正次

有限会社 PCC大洋

岡吉明

〒351-0014

朝霞市膝折町四-四-三〇

TEL 〇四八-四六〇-一六〇一

FAX 〇四八-四六〇-二三九七

http://www.pcc-taiyo.co.jp

木呂子 惠美子

太田颯衣

「氷上から兵庫へ」お待ちしています！

「ひようご出会いサポーター」東京兵庫県人会 幹事長

〇三-六-二六二-三〇三五

「カムバックひようご」東京センター長

〇三-六-二六二-五九九五

金出一郎

坂  
上  
  
明

近  
藤  
仁  
司

栗  
田  
  
功

仲 山 坂  
口 上  
一 泰  
聰 男 登

仙台市在住

坂  
上  
  
豊

坂  
上  
勝  
朗

合唱指揮者

笹倉 強

〒352-0014 新座市栄四一五―二五  
TEL・FAX〇四八―四七七―五六四〇

高見 嘉都司

〒173-0025 東京都板橋区熊野町四〇番十一号  
電話 〇三一三九五六一〇六〇〇  
電話 〇三一三九七三一六〇五六

高見 秀史

NPO法人睡眠時無呼吸症候群ネットワーク  
<http://www.sas-j.org/>

谷 社会保険労務士・CFP事務所  
年金・保険・労務・ライフプランの談話室

谷 敬三

東京都 豊島区池袋本町四―二二―十七  
TEL 〇三一三九七七一七八二六  
E-mail:tani\_finance@atoshima.ne.jp

谷 口 浩章

「柏陵同窓会東京支部」で検索いただくと  
東京支部ホームページをご覧いただけます。

株式会社シードコーポレーション

代表取締役 千種 倫幸

〒104-0061 東京都中央区銀座二丁目二―九  
電話 〇三一三五六七―九七〇〇



鶴田 宏

エネクスフリースト株式会社  
東日本支店 支店長

土井 聖司

〒272-0004 千葉県市川市原木二五二六―六  
電話 〇四七―三二九―七一〇一

日本舞踊  
西崎 祥  
端唄  
根岸 妙

〒224-0032 横浜市中区茅ヶ崎中央五六―九―七二二  
電話 〇九〇―九九七七―七七九三

西山 裕三

〒669-4302 兵庫県丹波市市島町  
中竹田 一一七一

原谷 洋美

エネクスフリースト株式会社  
関東支店 支店長

細川 貴志

〒347-0046 埼玉県加須市大字平永五三七  
電話 〇四八〇―六一―二四〇〇

青葉山 真照寺 都立八王子霊園隣り  
八王子 青葉霊苑 第二期墓地分譲案内中  
和合廟（永代供養墓）受付中

住職 堀井隆川

〒193-0821 東京都八王子市川町四九三一二

電話 〇四二一六五二二〇一一

FAX 〇四二一六五二二〇三三

若森敏郎

〒302-0023 茨城県取手市白山五―四―一三

渡邊隆男

### 郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て快よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりやを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願いします。

▼年会費の二〇〇〇円は会の運営を支える重要な資源です。同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、「丹波のきずな」の強さを思います。

（山ざる編集部）

編	集
後	記

★外資企業の役員を勤めた宝塚の学生時代の親友逝去後、「洛陽の知己皆鬼となり、……」の心境であった。昨年5月連休中に、学友から、奈良在住の同級生の三人会に、参加の誘いを受けていた。本年5月兄の法要で帰省の折、大阪で50年振りに再会実現。二人は電気業界・鉄鋼業界で活躍、今一人は経済学部教授・部長を勤め、今も週回数講義継続。7月関東地区同窓会で、横浜在住の方に合い、他の仲間も糾合し、東西で交流を計る事になった。50年の風雪を経交流出来、皆と会う事を望んでいた親友の導かと感謝、彼の冥福を祈るや切。(大野)

★文芸欄創設当初から俳壇に寄稿して下さっていた小松京子様が亡くなられた。「都合により投稿致しません。5/23」との葉書が届き、なにかご無礼なことをしたのかしらと思ひ悩んでいた折、ご家族様から五月三十一日にご逝去されたとの報を受け、ただただ驚くばかりだった。そのうちに「最後の最後まで『山ざる』俳壇を気に掛けて下さったのか」とありがたい思いが胸に染み込んだ。御冥福をお祈りするとともに、今後の文芸欄の充実を見守って下さいとお願ひしよう。皆様の投稿をお待ちしております。(原色)

★高一から高二になる春休みに、新しい級友宅でお世話になりながら氷上郡を一周。

その時、最も感激したのが、元伊勢さんが伊勢へ遷宮の途中で一泊したという国領の神社でした。(徳田)

★「東西ドイツ統一から二十五年」を投稿させていたでしたが、奇しくもこの夏、ハンガリー、スロバキア、チェコ、オーストリアを旅行してきました。オーストリアを除いて統一以前は「東側」の国々でした。今ではEUにも参加し観光客も押し寄せ人々は平和に暮らしているようでした。ドナウ川、モルダウ川のゆったりとした流れ、菩提樹が繁る公園などを見るにつけ中東の人たちにはいつこのような平和が訪れるのだろうかと思いを馳せてしまいました。(石橋)

★あの陸の王者ボルトが「チームワーク」と絶賛したほど、日本男子の400メートルリレー銀メダルはすごかった。一人ひとりの走力は他の走者の記録より劣つても、リレーとなると勝る、このパワーはどこから来るのか。リレーだけではない、体操もバドミントンも、団体戦となると個人戦より力を発揮する日本の選手たち。「ムラ社会DNA」と表現してみた。責任感から、個人戦より頑張るのかもしれない。無意識かもしれないが、「村八分」という歴史的DNAがまだ息づいているではないか。この「チームワークのよさ」は日本の強みであることは間違いない。ただ、個性が殺される危険もあることを自覚して、過度に自

制したりせず、自由な表現が許される社会も同時に目指さなければならぬ、と強く思っている。(上)

★今号は今夏の灼熱の太陽に負けないくらい丹波への熱き思いが満載です。寄稿いただいた皆様、関係者の皆様、広告掲載して下さい。毎様に感謝申し上げます。毎年寄稿いただいた丸川健三郎先生がご逝去されました。奥様のご寄稿から「山ざる」をこよなく愛して下さい先生が偲ばれます。有難うございました。ご冥福をお祈りします。(岡田)

山ざる 第47号 定価500円

平成二十八年十一月一日発行

- 〈編集委員〉
- |      |       |       |
|------|-------|-------|
| 井徳省吾 | 石橋順子  | 上高子   |
| 大野義昭 | 岡吉昭   | 岡田昌子  |
| 坂上勝男 | 鶴田ゆき子 | 徳田八郎衛 |
| 原谷洋美 | 藤原ひさ子 | 本城英明  |
- 安井孝之

発行者 関東氷上郷友会会長坂上勝朗

〒351-0014 埼玉県原朝露市膝折町4-4-30

関東氷上郷友会事務局(岡吉明)

☎〇四八(四六〇)一六〇一

振替〇〇一一〇一三二二三三三〇

製 作 株式会社ニ玄社  
編集協力 ダイワコムス



ヒノノ二トン。  
それは日本の心。



日本には古来より、相手を思い、もてなすという美徳があります。その精神に学んだのがHINOの2トントラック。横滑りを抑えるVSC(車両安定制御システム)標準装備<sup>※</sup>をはじめ、さまざまな安全性能を搭載。トラックにも、この国のおもてなしを。

結論、HINOの2トン。

**HINO DUTRO** HINO Hybrid



※ VSC=Vehicle Stability Control(車両安定制御システム) VSCはトヨタ自動車系の登録商標です。VSCはドライバーの安全運転を支援するシステムです。車両の横転、スピン等を完全に防止するものではありません。また、作動には条件がありますので、詳しくは販売会社までお問い合わせ下さい。\*ガソリン車、LPG車は除く

## 東京日野自動車株式会社

本社：東京都港区新橋5-18-1 TEL 03-3578-3939 [www.hino-tokyo.co.jp](http://www.hino-tokyo.co.jp)

江戸川第一営業部：TEL 03-3878-6251  
八王子支店営業部：TEL 042-691-2151  
足立第一営業部：TEL 03-3883-2121  
大宮支店営業部：TEL 048-661-1200  
朝霞支店営業部：TEL 048-467-2501  
熊谷支店営業部：TEL 048-525-2351  
匝納第三営業部：TEL 03-3966-8171

江戸川第二営業部：TEL 03-3878-6271  
瑞穂支店営業部：TEL 042-557-6071  
足立第二営業部：TEL 03-3883-2121  
新狭山第一営業部：TEL 04-2930-2053  
松伏支店営業部：TEL 048-993-2111  
直納第一営業部：TEL 03-3878-6270  
バス部(板橋)：TEL 03-3966-8177

江戸川第三営業部：TEL 03-3878-6251  
六郷支店営業部：TEL 03-3732-6251  
板橋支店営業部：TEL 03-3966-8171  
新狭山第二営業部：TEL 04-2930-2053  
岩槻支店営業部：TEL 048-798-1211  
匝納第二営業部：TEL 03-3878-6270  
バス部(大宮)：TEL 048-661-1229

漢字は太古の思いを詰めた玉手箱。

# こわくて ゆかいな漢字

張 莉 著

A5判変型・320頁 ● 2000円+税

漢字の故郷、中国から日本に留学した才媛が、白川静、阿辻哲次の両大家に学んだ漢字学の知識を元にして書き上げた、漢字をめぐるエッセイ集。日常見慣れた文字の意外な字源を取り上げて行く。



小学校で学んだ漢字を、きれいなくずし字で!

## 大人が学ぶ小学校の漢字 [なぞり書き練習帳]

宮澤正明 著

B5判・160頁 ● 1500円+税

教育漢字1006字について楷・行・草書の三書体をマスター。小学校レベルの漢字を練習するだけで、キレイなくずし字が気軽に身に付く練習帳。



常用漢字を楷・行・草でマスター!

## 大人が学ぶ中学校の漢字 [なぞり書き練習帳]

宮澤正明 著

B5判・178頁 ● 1800円+税

中学校で学ぶ漢字1130字について、楷・行・草書の三書体を網羅。ポイントを学びながら、キレイなくずし字が実用レベルで使えるようになる練習帳。



書写指導の第一人者による書き込み式練習帳の決定版!


## きれいな文字の書きかた [書き込み式練習帳]

宮澤正明 著

B5判・160頁 ● 1500円+税

なぞり書きを交えながら実際に鉛筆やペンで反復練習。ひらがな・漢字の練習から、ハガキ・手紙の書き方まで、きれいな文字が身につく練習帳。

株式会社二玄社 会長 渡邊隆男

 二玄社

〒113-0021 東京都文京区本駒込 6-2-1 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 <http://nigensha.co.jp>